

918301  
村松 擁

関西外国語大学大学院外国語学研究科

博士学位申請論文 2021 年

英語移動動詞に関する認知言語学的考察  
— come/go を中心に —

関西外国語大学大学院  
外国語学研究科 言語文化専攻

918301

村松 擁

918301  
村松 擁

## 謝辞

本研究論文作成にあたり、終始適切な助言及び熱心なご指導をいただいた山梨正明教授に深く感謝の意を表します。

並びに、研究指導副査として論文作成にご助力くださった柿木重宜教授に心より感謝いたします。

また、孤独な研究活動を支えてくれた関西外大大学院の院生諸君、特に、要旨の中国語版作成に尽力してくれた陳懌懿氏、皆様のおかげで博士論文を完成させることができました。誠にありがとうございます。

精神面での支えになってくれた家族にも感謝申し上げます。

最後に、コロナ禍での結婚という大変な困難に共に立ち向かった妻 Abigail Derricott に心からの愛と感謝を送ります。

## 目次

|                                  |    |
|----------------------------------|----|
| 第1章 序論 .....                     | 1  |
| 1.1 概観.....                      | 1  |
| 1.2 先行研究 .....                   | 2  |
| 1.2.1 Fillmore (1972)による研究 ..... | 2  |
| 1.2.2 大江(1975)による研究.....         | 4  |
| 1.2.3 久野・高見(2017)による研究 .....     | 5  |
| 1.2.4 Clark (1974)による研究 .....    | 6  |
| 1.2.5 Radden (1996) .....        | 9  |
| 1.3 まとめと本研究のねらい .....            | 11 |
| 第2章 認知言語学のアプローチ .....            | 13 |
| 2.1 従来の言語研究.....                 | 13 |
| 2.2 認知言語学の枠組み.....               | 13 |
| 2.3 方法論.....                     | 15 |
| 2.3.1 メタファー .....                | 15 |
| 2.3.2 スキーマ化と事例化 .....            | 17 |
| 2.3.3 イメージスキーマ .....             | 19 |
| 2.3.4 拡張とメタファー写像.....            | 20 |
| 2.4 まとめ .....                    | 22 |
| 第3章 移動動詞に関する認知的分析 .....          | 24 |
| 3.1 Fillmore (1972)による分類 .....   | 24 |
| 3.2 起点・経路・着点スキーマ .....           | 26 |

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| 3.3 移動のイメージスキーマ .....         | 29 |
| 3.3.1 場所のイメージスキーマ .....       | 29 |
| 3.3.2 経路のイメージスキーマ .....       | 32 |
| 3.3.3 起点・経路・着点のイメージスキーマ ..... | 36 |
| 3.4 起点・着点に関する考察 .....         | 39 |
| 3.5 直示 .....                  | 41 |
| 3.6 空間移動から状態変化への拡張 .....      | 43 |
| 3.6.1 状態変化を表す移動動詞 .....       | 44 |
| 3.6.2 「状態」の捉え方 .....          | 47 |
| 3.6.3 「変化」の捉え方 .....          | 53 |
| 3.7 まとめ .....                 | 55 |
| 第4章 Come .....                | 57 |
| 4.1 移動 .....                  | 58 |
| 4.2 出現 .....                  | 61 |
| 4.3 出自 .....                  | 66 |
| 4.4 主観的移動 .....               | 68 |
| 4.5 状態変化 .....                | 73 |
| 4.5.1 Come to/into NP .....   | 74 |
| 4.5.2 Come to V .....         | 75 |
| 4.5.3 Come + Adj .....        | 76 |
| 4.5.4 Come による結果状態 .....      | 77 |
| 4.6 まとめ .....                 | 78 |
| 第5章 Go .....                  | 80 |
| 5.1 OED による定義 .....           | 80 |

|                      |     |
|----------------------|-----|
| 5.2. 経路移動 .....      | 81  |
| 5.2.1 比喩的拡張 .....    | 84  |
| 5.3 離脱移動 .....       | 87  |
| 5.4 消失.....          | 89  |
| 5.5 着点移動 .....       | 92  |
| 5.5.1 メトニミーの関与 ..... | 94  |
| 5.5.2 メタファーの関与 ..... | 96  |
| 5.6 主観的移動 .....      | 98  |
| 5.7 状態変化 .....       | 100 |
| 5.8 まとめ .....        | 105 |
| 第6章 結論と展望 .....      | 107 |
| 参考文献 .....           | 110 |

## 第1章 序論

本研究は、認知言語学の枠組みに基づいて、英語の移動動詞の概念構造と認知のメカニズムの解明を試みる。従来の記述文法や形式文法による移動動詞の研究では、動詞の概念構造の記述的分析ないしは形式的分析は試みられているが、認知言語学の枠組みに基づく、動詞の概念構造と認知メカニズムの体系的な研究は本格的になされていない。

本稿では、特に自動詞 **come** および **go** の意味拡張を研究の対象とする。これらの移動動詞に関わる認知のメカニズムの諸相を、メタファー、スキーマ理論などの理論的枠組みに基づいて考察を行う。

### 1.1 概観

本章では、従来の言語研究における **come** よび **go** に関する先行研究を概観する。ここで扱う先行研究は、Filmore (1972), 大江(1975), Clark (1974), 久野・高見(2017), Radden (1996)の研究である。これらの先行研究を踏まえて、本研究での研究の狙いを述べる。

第2章では、本研究のアプローチとして用いる認知言語学の枠組みを、従来の言語研究と比較して概観する。また、本研究で主に用いる認知言語学の理論を紹介する。本研究では、主にメタファー、メトニミー、イメージスキーマを中心とした考察を行う。イメージスキーマに関しては、その前提となるスキーマ化と事例化にも言及している。

第3章は、英語移動動詞全般に関する認知的分析を行う。ここでは、起点・経路・着点スキーマ(Lakoff and Johnson 1999)を前提とする移動の諸要素について、イメージスキーマを考察する。それによって、移動動詞全般にかかわるイメージスキーマの作成を試みる。また、**come/go** 特有の直示性に加えて、空間移動から状態変化へと意味拡張する場合の認知プロセスについても考察を行う。

第4章では、移動動詞の **come** に焦点を当てた考察を行う。第3章で挙げた移動動詞のイメージスキーマを元に、**come** のイメージスキーマの考察を試みる。その上で、**come** の意味拡張に関して、イメージスキーマの変化やメタファー・メトニミーの関与に注目する。本研究では、物理的な移動行為とそこから拡張する物理的な事態と、物理的な事物が伴わない比喩的な拡張も考察の対象とする。

第5章では、移動動詞 *go* の考察を行う。*Come* と同じく、*go* のイメージスキーマが意味拡張の際にどのように変化していくのかが本研究の考察の対象である。また、メタファーやメトニミーの意味拡張への関与の考察も行う。この章では、物理的な事態に関わる意味拡張に加えて、抽象的な事物が関与する拡張について考察を行う。

第6章は、全体のまとめと、今後の研究について言及するものである。

## 1.2 先行研究

本節では、先行研究を概観する。ここで挙げる先行研究は、Fillmore (1972)、大江 (1975)、Clark (1974)の認知言語学以前の研究と、山添(2004)による、認知言語学の成果を取り入れた研究である。

### 1.2.1 Fillmore (1972)による研究

Fillmore (1972)は、物理的な空間移動を表す *come/go* の区別に関する考察を行っている。この研究によると、*come/go* を分ける点は大きく二つある。一つは、これらの動詞が移動に関わる要素のうちどちらに重きを置いているかであり、もう一つは、移動の着点に関することである。順を追って見ていきたい。

Fillmore (1972: 4)は、移動動詞全般に対して、起点指向(Source-oriented)、中立(Neutral)、着点指向(Goal-oriented)の三つに分類できると述べている。その中で、*come* は着点指向であり、*go* は起点指向の動詞であると述べている。以下の例<sup>1</sup>を見てみよう。

(1) a. He *came* home at midnight.

b. He *went* home at midnight.

c. He *went* from Vancouver to Hawaii last week. (Fillmore 1972: 4)

上の例のうち、(b, c)で用いられている *went* は前者が起点指向であり、後者が中立的な動詞である。

着点指向の特徴として、到達点が文脈から理解されることが挙げられている。また、

---

<sup>1</sup> 本論文で引用される例の斜体字は、特に断りがない限り筆者によるものである。



起点指向は反対に、起点が文脈から理解されると述べている。しかし、(1a)を見てもわかるように、文脈から理解されているからといって、ある領域が言語化されないわけではないようである。この考えからすると、(1c)は起点が言語化されている起点指向動詞だと考えることもできる。

次に、移動動詞の着点に関する考察を挙げている。Go に関して、以下の例からわかるように、移動行為の着点は、話者が存在しない場所である。

(2) a. *Go away!*

b. \**Go here!*

(Fillmore 1972: 6)

Come の着点に関して、まず 4 通りの解釈が挙げられている。すなわち、(i)発話時に話者が着点に存在している、(ii)移動者の到達時に話者が着点に存在している、(iii)聞き手が発話時に着点に存在している、(iv)聞き手が移動の到達時に着点に存在している。ある移動行為の着点に、以上の解釈が可能な場合、その移動行為は come で表現される。以下にそれらを反映する例を挙げる

(3) a. John will *come* to the department tomorrow.

b. John will *come* there tomorrow.

c. I will *come* there tomorrow.

(Fillmore 1972: 7)

(3a)は、4 通り全ての解釈が可能である。一方、(3b)は発話時に話者が存在していない場所を指す *there* が使用されていることから、話者が発話時に着点にいる可能性がなくなる。また、(3c)では主語である移動主体が話者であるため、話者が到達時に着点に存在する可能性も排除される。このように、話者・聞き手間のディスコースにおいて、話者の存在する領域が中心であり、その領域から離脱する移動は *go*、その場所へ進入する移動は *come* で表されるのが基本である。この領域が、直示的中心といえるだろう。さらに、この直示的中心は聞き手のいる領域にも拡大させることができる。

この基本の考察を踏まえ、Fillmore (1972)は *come/go* の適切性は、視点の設定と仮定に関係すると述べている。以下の 4 つの視点が存在する場所が着点になった場合、*come* が用いられる。

(4) Fillmore(1972: 16)による視点の分類

- a. come/go を含む文を伝達する行為の参加者の視点
- b. 伝達行為の参加者の視点
- c. 主観的意識 (think, wonder, wish, etc.) の主観的経験者による視点
- d. ある作品の中で語り手が作り出す視点

- (5) a. John will come to the department tomorrow. (p.7)
- b. She asked Fred to come to her party. (p.13)
- c. He wonders if she'll come to his graduation. (p.14)
- d. The men came into her bedroom. (p.15)

Fillmore (1972)の考察をまとめると、最も基本的な発話の場において話者が存在しない場所が着点になる移動は go で表現される。反対に、話者がいる場所が着点になる場合は come が用いられる。一方で、話者が存在しない場所が着点となっても、そこに聞き手が存在していれば come が使用される。また、話者・聞き手間のディスコースで、会話の参加者が移動行為に関わらない場合に重要となるのが、視点である。話者が上にあげたように特定の視点を採用することで、視点の存在がある場所が着点となる移動には come が用いられる。

### 1.2.2 大江(1975)による研究

次に、Fillmore (1972)の流れをくむ大江(1975)による考察を簡単に紹介したい。大江(1975)は、視点の概念を come/go の用法全体に拡大させ、以下のようにまとめている。

(6) a. ユク、go

話者または他者が話者のホームベースを出発して動く。その動きを話者が出発点から眺め、描く。

b. クル、come

話者が自らのホームベースに位置し、話者または他者の動きをその場所（到達点）への動きとして眺め、描く。

c. come

聞き手——結局は聞き手の視点をとる話者——が聞き手のホームベースに位置し、ある動きをその場所（到達点）への動きとして眺め、描く。

(大江 1975: 45)

ここでいうホームベースは、話者・聞き手が占有する領域である。このホームベース理論に関して、次の節では久野・高見(2017)による研究からより詳しく検証し、本研究での直示性の定義付けを行う。

### 1.2.3 久野・高見(2017)による研究

ホームベースに関して、久野・高見(2017)は「移動者の移動前に、または移動者の到達時に、いる所」(久野・高見 2017: 164)であると主張している。このホームベースを中心とし、そこから離脱するか、あるいはそこへ移動するかによって使用される動詞に変化が生じる。以下に例を挙げる。

(7) Tom *came/went* to my house to talk to my sister.

上の文を述べる際に、*my house* が話者のホームベースである場合、すなわち、話者が移動者である Tom の移動前もしくは到達時に自分の家にいると仮定すると、ホームベースへの移動であるため *came* が使用される。一方、Tom が移動する前、もしくは到達する時に話者が学校や仕事場などにおいて自分の家にはいない場合、*my house* は話者のホームベースにはなり得ないため、*went* が用いられる。

このホームベースは上記の例にあるようなある人物の家を指すだけでなく、家がある地域、果ては国にまで拡大できる柔軟な概念である。

(8) [東京在住の話者がボストンの友人にオバマ米大統領の広島訪問をメールで]

President Obama {*came/\*went*} to Hiroshima on the evening of May 27, 2016, to mourn the many people killed by the atomic bomb 71 years ago.

(久野・高見 2017: 162)

上記の文では、話者のホームベースが東京であるため、広島への移動を **came** で表現できないように考えられる。しかし、話者のホームベースを、オバマ大統領の出発地である「米国」に対応させて「日本」に拡大させると、「日本」というホームベース内にある「広島」に移動する行為を **came** で表すことができる。

以上のホームベースに加え、視点も動詞の選択に関係する。第三者が別の第三者のホームベースに移動する以下の文を例に挙げて説明したい。

(9) The girl {**came/went**} to her mother's bedside. (cf. 上野 1995: 179 (太字筆者) )

上の文では **came**、**went** ともに適切になる。ここで動詞の使用を決定しているのが視点である。話者が移動者である **the girl** の視点をとれば **went** が使用され、**her mother** のホームベースである **bedside** からの視点をとれば **came** が使用される。

さらに、話者が聞き手のホームベースに移動する場合、(10)のように **going** ではなく **coming** が使われることがある。これは、話者が聞き手のホームベースからの視点を採用しているからである。

(10) A: Dinner's ready!

B: I'm {**coming/\*going**}.

これらの考察をもとにすると、**come/go** の移動動詞に関して重要になるのは話者の視点である。話者の視点が置かれている場所から離脱する動きは **go**、話者の視点の方へ進入する移動を **come** で表す。本研究では、この考察を支持し、話者の視点が **come** と **go** の使用を分けるものとして考える。すなわち、話者の視点が存在する領域が直示的中心である。**Come** の場合は、その着点が常に直示的中心となる。次の節では、直示性に注目した **come/go** の状態変化に関する研究を概観する。

#### 1.2.4 Clark (1974)による研究

Clark (1974)は、Fillmore (1972, etc.)による直示性の研究に基づき、状態変化を表す **come/go**、それに加えて、**bring/take** の研究を行っている。Fillmore による研究では、

come/go の相違点は着点にあるとしている。すなわち、話者と聞き手の直示において、come の着点は発話時、または文中から判断できる時間における話者か聞き手の存在する場所である。反対に、go の着点は上記以外の場所である。この場合、come の着点は直示的中心(DEICTIC CENTER)と呼ばれる。直示的中心は、go による移動の起点となり得る。

これを踏まえて、Clark (1974)は、直示的中心は正常な状態(NORMAL STATE)を表すと主張している。したがって、直示的中心を常に着点とする移動を表す come は、正常な状態への変化を表すことになる。そして、go は直示的中心を起点とするため、正常な状態からの逸脱を意味する。

さらに、Clark (1974)は come/go で表現される状態変化を二つに分類している。以下にその分類を挙げる。

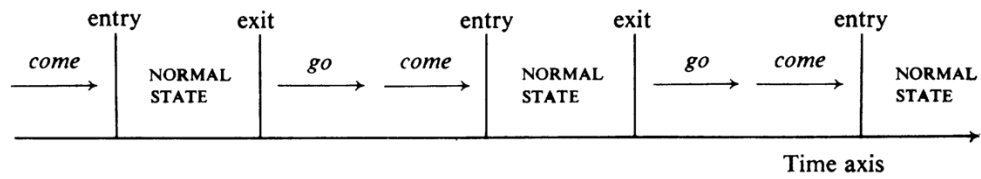
(11) 繰り返し生じる変化

- a. Mortimer *went* out of his mind.
- b. Lovelace *came* back to his senses. (Clark 1974: 317)

(12) 繰り返し生じない変化

- a. Janice *came* of age in January.
- b. The bread *went* stale. (Clark 1974: 318)

繰り返し生じる変化について、主に意識に関する状態であると主張している。上に挙げた例では、意識を表す語 mind が場所の概念から写像され、そこから離脱する移動 go out of が、意識を失うことになぞらえられている。また、意識 sense に戻る移動 come back to で、再び意識を取り戻すことが表現できる。これらの状態変化は、Lakoff and Johnson (1999)による States Are Locations および Changes Are Movements のメタファーが関与していると考えられる。Clark (1974)はこの変化を以下のように図示している。

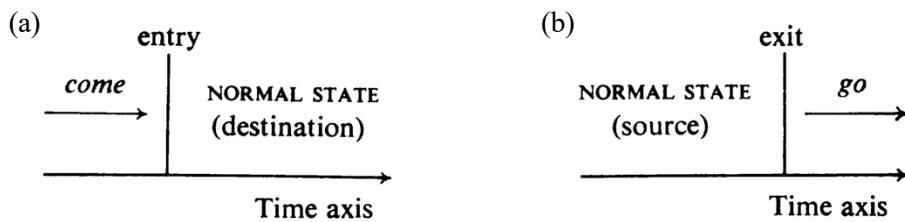


(Clark 1974: 330)

図 1

Come の移動による着点は常に直示的中心であり、直示的中心は正常な状態として捉えられる。また、come の着点となった直示的中心は go の起点となる。直示的中心を起点として、そこから離脱する行為は、正常な状態から抜け出すことを意味する。

繰り返し生じない変化として、Clark (1974)はここで(i)法的に成人である状態への変化と、(ii)新鮮さ、あるいは食用可能性からの離脱を表す例を挙げている。この例も、Lakoff and Johnson (1999)が提案するメタファーの関与を受けていると考えられる。この状態変化も、以下のように図示されている。



(Clark 1974: 330)

図 2

図 2a は、着点への進入が正常な状態への変化に拡張している。一方、図 2b は正常な状態を起点として、起点からの離脱、すなわち正常な状態ではなくなることを表している。いずれも、移動した先が最終状態となる。

以上、Clark (1974)の研究を概観した。Clark (1974)の研究は、come と go の直示性に注目し、状態変化を示す場合の意味の違いについて考察を行っている。同氏の研究では、直示的中心が話者の存在する領域であることが前提とし、直示的中心が好ましい状態と捉えられると述べている。したがって、直示的中心を出発する go の移動は悪い状態への変化として解釈される。反対に、直示的中心を着点とする come の移動は、好ましい状態への変化として捉えられる。

### 1.2.5 Radden (1996)

ここまで、come/go の直示性に着目した研究を概観してきた。その多くは、認知言語学の誕生以前のアプローチによるものである。本節と次節では、主に比喩的な意味拡張を中心に、認知言語学の成果を取り入れた come/go の研究について概観する。

本節では、Radden (1996)による研究を概観する。Radden (1996)は Clark (1974)と同様に、come と go の物理的な空間移動を表す際の直示性に注目して状態変化への意味拡張を考察している。ここで評価すべきは、メタファーの関与を考慮に入れている点である。CHANGE IS MOTION のメタファーを足がかりに、それに伴う下位メタファーが、それぞれの動詞の直示性から写像されていると主張している。これに関して、以下のような表で説明を行っている。

| Motion type               | CONCEPTUAL METAPHOR                                   | Schema, Meaning, Example  |
|---------------------------|---|---|
| <b>Deictic motion</b>     |   |   |
| Locomotion                | PURPOSEFUL CHANGE IS MOTION TO A DESTINATION          | propulsion schema, inchoative<br><i>to go into computing</i><br>diversion schema, inchoative<br><i>to go public</i> |
|                           | ACHIEVING A PURPOSEFUL GOAL IS REACHING A DESTINATION | termination schema,<br>terminative<br><i>to come to a conclusion</i>  |
| Object motion             | COMING INTO EXISTENCE IS MOVING HERE                  | uniform motion, inchoative<br><i>to come into view</i>  |
|                           | GOING OUT OF EXISTENCE IS MOVING AWAY                 | uniform motion, terminative<br><i>to go out of view</i>   |
| <b>Non-deictic motion</b> |   |   |
| Object motion             | END OF EVENT IS END OF PATH                           | termination schema, terminative<br><i>to come to an end</i>   |
|                           | REACHING A STATE IS ARRIVING AT A LOCATION            | termination schema, inchoative<br><i>to come to realize</i>   |
|                           | UNEXPECTED CHANGE OF OUTCOME IS DIVERSION             | diversion schema, inchoative<br><i>to go mad</i>  |
| Subjective motion         | UNEXPECTED STATE IS DIVERSION                         | diversion schema, static<br><i>to go unchallenged</i>   |

表 1: Submetaphors of general metaphor CHANGE IS MOTION (Radden 1996: 451)

直示的移動に関して、Radden (1996)は locomotion と object motion の二つに分類してい

る。前者を *moving EGO*、後者を *moving world* と定めている。これらが状態変化へと意味拡張する場合、観察者である人間が移動することによって生じる変化と静止している人間が、世界を移動しているものと解釈する場合に起きる変化に分けられる。以下にそれを反映する例を挙げる。

- (13) a. John *went* into computing.  
b. The country *went* to war. (Radden 1996: 439)  
c. Russia has *gone* capitalist.  
d. The telephone company is *going* private. (Radden 1996: 440)  
e. We have *come* to a conclusion/ reached a conclusion.  
f. We have *come* to an agreement/ reached a conclusion. (Radden 1996: 441)
- (14) a. The star *comes* into view.  
b. The star *goes* out of view. (Radden 1996: 441)  
c. A nice idea *came* to my mind.  
d. The new bestseller *came* to my attention. (Radden 1996: 443)

(13)が *locomotion*、(14)が *object motion* を表している。Radden (1996)の例では、これらはすべて直示的であると述べている。ここで、*go* の拡張に関して疑問が生じる。Clark (1974)の主張を元にとすると、(13c)の状態変化は正常ではない状態への変化として解釈される。しかし、「ロシアが資本主義になる」という変化は、その事態を観測する立場によって解釈が異なる。社会主義国家や共産主義国家にとっては正常ではない状態への変化になり得るが、資本主義国家にとっては正常な状態への変化とも言える。

次に、非直示的移動からの拡張を確認する。なお、本研究では *object motion* からの拡張のみに焦点を当て、*subjective motion* から拡張する事例は取り上げない。

- (15) a. All good things *come* to an end.  
b. Postwar European order is *coming* apart. (Radden 1996: 445)

上では、非直示的な *object motion* から拡張する意味のうち、*come* で表現される例を取



り上げた。前述の通り、**come** は常に直示的中心への移動を表す。そして、直示的中心は話者にとって好ましい、あるいは正しい状態として捉えられる。したがって、上の例は正常な状態への変化ではないため、非直示的に見えるが、直示的な **come** の拡張として考察されるべきである。

以上、Radden (1996)の考察を概観してきた。意味拡張におけるメタファーの関与に注目した研究である。本研究では、ここで挙げた **go** の直示性から拡張した状態変化の一部と、非直示的な **come** の拡張を問題とする。

### 1.3 まとめと本研究のねらい

以上が、直示動詞である **come** と **go** に関する先行研究である。記述的に規則を当てはめていく研究から、直感的に理解できる認知図を用いた考察への変遷が見て取れる。認知言語学誕生以前のアプローチでは、直示的中心には認知主体の視点が存在し、そこから離脱する移動は **go** を用いて表現され、その領域へ進入する移動は **come** で表現されると考えられている。しかし、視点の存在が、ある領域が直示的中心となる際の動機付けはあまり問題とされていない。本論文では、視点の存在と直示性の関係についても研究の対象とする。また、認知言語学の知見を取り入れた研究によると、意味拡張にメタファーが関与している。本研究では、メタファーの関与の他に、言語表現の背後に隠されているイメージスキーマも意味拡張に関わっていることを前提とし、考察を行う。

ここれらを踏まえ、本研究では、以下の三つの観点から研究を行う。

- i. 移動動詞を基本的に特徴づける空間移動
- ii. 空間移動の方向性と視点の投影
- iii. 空間/移動の概念に基づく意味拡張

まず、移動動詞の典型的な用法である空間移動について考察する。この考察には、先行研究ではあまり触れられていないイメージスキーマを用いる。移動行為に関わるさまざまな要素のイメージスキーマ考察と、それらを組み合わせた複合的なイメージスキーマの提案を試みる。次に、空間移動の際に生じる移動の方向性と、視点の投影に関する考察を行う。これは、主に直示動詞である **come/go** に関する考察である。移動

918301  
村松 擁

行為に認知主体の視点がどのように影響し意味変化が生じるかを議論する。最後に、空間、および移動の概念に基づいて、意味拡張の考察を行う。これには、Radden (1996) が行う研究と重なる部分がある。本研究では、メタファーの関与による意味拡張に加えて、意味拡張におけるイメージスキーマの変化も考察の対象とする。

## 第2章 認知言語学のアプローチ

### 2.1 従来の言語研究

認知言語学以前に誕生した言語研究のアプローチとして、形態論、統語論、心理条件的意味論などが挙げられる。これらの従来型アプローチに共通する点は、「言葉の知性的な側面を反映する研究」(山梨 2000: 2) だということである。後述する認知言語学が重視する、言語の背景に存在する主体の感性的、身体的な能力あるいはこれらを包括する認知能力の観点からの研究は行われなかった。

このようないわゆる客観主義的な言語研究は、言語を、分節構造を有する記号系とみなし、この記号表示に対する操作、あるいは計算のプロセスを経て言語情報を生み出すというアプローチを前提としている。この、計算主義を拠り所とする言語研究のアプローチは、以下のような記号観・言語観を前提とする (山梨 2000: 5)

- (16) i. 日常言語に代表される記号系は、外部世界と相互作用していく認知主体とは独立に存在し、その形式と構造の体系は命題文節的な記号系によって規程可能である
- ii. この記号系に対応する意味は、言語外の文脈から独立して、形式に対応する指示対象 (ないしは概念) として存在する
- iii. この記号系を特徴づける構成要素としての文法カテゴリーと意味カテゴリーは、認知主体の解釈からは影響をうけずに独立に存在する
- iv. この種のカテゴリーからなる記号系の構造と意味は、自律的な記号表示によって規定することが可能である

このような観点からカテゴリー化された構成要素は、それ自体が人間から独立に存在し、安定しているように見える。しかし、実際には言語の背景にはそれを操る主体が存在している。その主体の主観的な経験や、空間認知能力など様々な要因を受けて、言語は絶えず揺れ動いている。

### 2.2 認知言語学の枠組み

認知言語学は、認知科学における一分野である。認知科学とは、言語学だけではな

く、「人間、動物、機械などの『知』を研究する学際的総合科学」(辻 編 2013: 267)を指す。また、認知科学は、以下のように三期の進展段階に区分される。

第1期: 記号主義的、計算主義的な認知科学

第2期: 脳科学的、コネクショニスト的な認知科学

第3期: エコロジー的、環境・身体論的な認知科学 (山梨 2012: 1)

生成文法などの形式文法的なアプローチは、第1期の記号主義的な言語学のアプローチに位置する。

本研究の背景である認知言語学は、第3期の認知科学に位置する。認知言語学では、言語の背景に存在する認知主体である人間と環境の相互作用に注目する。すなわち、認知言語学の観点からすれば、言語はそれ自体が自律したものではなく、認知主体の身体的経験や心理的経験を反映したものである。本研究では、認知言語学の下位分類である認知意味論と認知文法を考察のアプローチとして用いる。

草創期の認知意味論において、Lakoff and Johnson (1980)は、それまで言語だけの問題とされてきたメタファーを問題に挙げた。「概念メタファー」という新たな考え方を提案し、メタファーが単なる言葉の上の装飾的表現ではなく、身体的経験や心理的経験を反映しているものだと主張している。

認知文法は Langacker (1987, 1991, 2008, etc.)が提唱する文法研究である。生成文法のように、文法それ自体が自律したモジュールであるという考え方ではなく、言語の背景に存在する認知主体の「概念内容を記号化する記号体系」(辻 編 2012: 282)であると捉えている。

また、認知文法は用法基盤モデルを採用している。認知主体が実際の言語使用の場面から得た具体的事例を抽象化し、スキーマを作り出す。さらに、このスキーマから別の具体的事例を作り出し、さらに高次のスキーマを作り出すことができる。生成文法との違いは、このボトムアップ的な認知過程の存在にある。スキーマ化と事例化は文レベルや語レベルだけの現象ではない。認知主体は、頭に描く様々な対象に関するイメージを抽象化し、イメージスキーマを作り出すことができる。

Lakoff(1987)は、ある語の多義性に注目し、イメージスキーマの拡張や比喩的写像での差異を放射状に配置し、放射状カテゴリーモデルを作成している。

本研究は、言語はその発生源である主体の経験、空間認知能力などによって多いに影響を受けるものであるという立場から言語研究を行うものである。

## 2.3 方法論

本研究は、認知言語学のアプローチから英語移動動詞を考察するものである。本研究でコアとなる理論は、メタファー理論(Lakoff and Johnson 1980)、スキーマ化と事例化(Langacker 1993)、イメージスキーマである。

### 2.3.1 メタファー

言語研究において、認知言語学というパラダイムをもたらした一つの要因として、Lakoff and Johnson (1980)によるメタファーの研究が挙げられる。それまでは、比喩表現というと文学的な、ただ単に言葉を修飾するための技法としてしか考えられていなかったが、Lakoff and Johnson (1980)は、メタファーを単に文学的な装飾技法であるとは捉えず、日常言語に溶け込んだものであり、人間の思考や概念体系に密接に関与したものであると主張している。

例えば、以下に挙げるような言語表現は、概念メタファーによって作り出されるものである。

#### (17) ARGUMENT IS WAR

- a. Your claims are *indefensible*.
- b. I *demolished* his argument.
- c. You disagree? Okay, *shoot!*

(Lakoff and Johnson 1980: 4)

ARGUMENT IS WAR は、戦争に関する概念 (e.g. 攻撃、防御、破壊、発砲 etc.)を議論のそれに比喩的に写像している。(a-c)の例では、ある人物の主張が戦争における軍事拠点の概念に写像されている。その証拠に、(a)では本来拠点が防御できないことを表す *indefensible* が使われている。これが意味するのは、ある主張に説得力が無く擁護ができないということである。ある面から見た拠点が、防御されるものであるならば、攻撃する側面から見ることも可能である。この視点を反映したのが、(b)の例である。こ

の文では建物などを破壊する *demolish* が主張に対して使われている。これは、相手の主張の弱い点を探し出し、反論したことを表している。また、拠点に対する攻撃手段は様々であり、(c)ではある主張に関する反論を促す語として、*shoot* が使われている。

以上の例から、英語話者の中では議論を争いの概念になぞらえていることがわかった。これらの例が指し示すのは、単に議論を戦争の用語で表現できるという事実だけではない。概念メタファーは、我々の考え方、行動、あるいは感情にも作用する。したがって、誰かと議論を交わす際には、入念な準備 (i.e. 戦略) が必要であるし、それゆえに議論に負けると悔しい思いをする。

メタファーは、ある概念を別のものに写像する、メタファー写像によって生まれるものだけではない。我々が日常生活を営む上で得た経験から生まれるメタファーも存在する。これはまさに、認知言語学が拠り所にしていく経験基盤主義の最たるものである。

(18) HAPPY IS UP/SAD IS DOWN

- a. I'm feeling *up*.
- b. My spirits *rose*.
- c. I'm feeling *down*.
- d. My spirits *sank*.

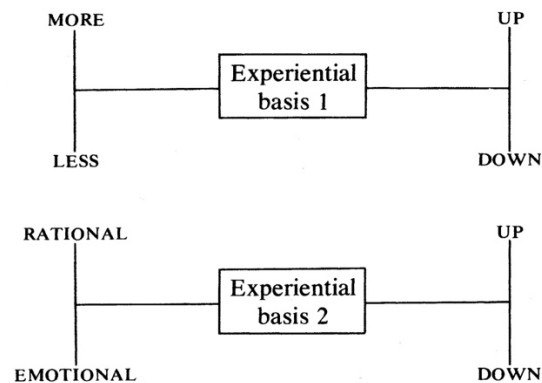
(Lakoff and Johnson 1980: 15)

上の例は、人間の感情を表す文であるが、方向性を表す *up, rose, down, sank* が使われている。Lakoff and Johnson (1980)によれば、我々が悲しい気分になっている時にはうなだれる姿勢をとり、反対に楽しい気分の時には姿勢をよくするという身体的経験が、言語表現に現れている。

他にも、MORE IS UP/LESS IS DOWN (Lakoff and Johnson 1980: 15)や RATIONAL IS UP/EMOTIONAL IS DOWN (Lakoff and Johnson 1980: 17)のようなメタファーも存在する。前者は、ある物を容器に加えたり、積み重ねたりすると、見かけの高さが変化する経験を元にしていく。後者は、人間が他の動植物を支配しているという観点と、CONTROL IS UP (ibid.)というメタファーから生じる MAN IS UP (ibid.)のメタファーから導き出される

ものである。

方向付けのメタファーは様々なバリエーションがあるが、*up* や *down* に無数の意味が付与されているわけではない。以下の図に示すように、異なる事象に対して、異なる経験基盤が与えられることにより、意味に変化が生じるのである。



(Lakoff and Johnson 1980: 20)

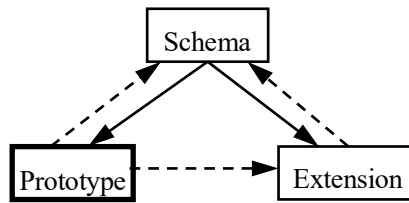
図 3

上の図のように、MORE, LESS, RATIONAL, EMOTIONAL が先ほど述べた経験基盤を通して UP, DOWN とリンクしている。

以上、認知言語学におけるメタファーを概観した。メタファーは、単に言語上の装飾技法ではなく、ある種の概念が別のものに写像されているものや、身体的、あるいは社会・文化的な経験が言語に反映されたものであることがわかる。

### 2.3.2 スキーマ化と事例化

認知言語学、特に認知文法におけるスキーマとは、ある事物に対するプロトタイプと、拡張事例の間にある共通点を抽出し、概略して表したものを指す。プロトタイプとは、ある事物の典型的な例であり、その典型例から逸脱するが、いくつかの類似性を持ったものを拡張事例という。このスキーマ、プロトタイプ、拡張事例からなるネットワークモデルは、以下のように構成される。



(Langacker 1993: 2)

図 4

破線矢印は類似性に基づく認知プロセス、実線矢印はスキーマからプロトタイプ、拡張事例への事例化のプロセスを表している。

ある事物に関するカテゴリー形成において、人間にはカテゴリーの中心的な事例であるプロトタイプから、周辺の拡張事例を作り出す能力が備わっている。この拡張事例は新たに作り出すだけでなく、すでに存在するものを拡張事例として取り込むことも可能である。また、プロトタイプと拡張事例から共通点を見出し、それを抽象化、すなわちスキーマ化を行うこともできる。この二つの認知プロセスは上の図でも表されている通り、いずれも類似性に基づくものである。

このプロセスを経て、スキーマによるネットワークモデルは、以下のように拡張していく。

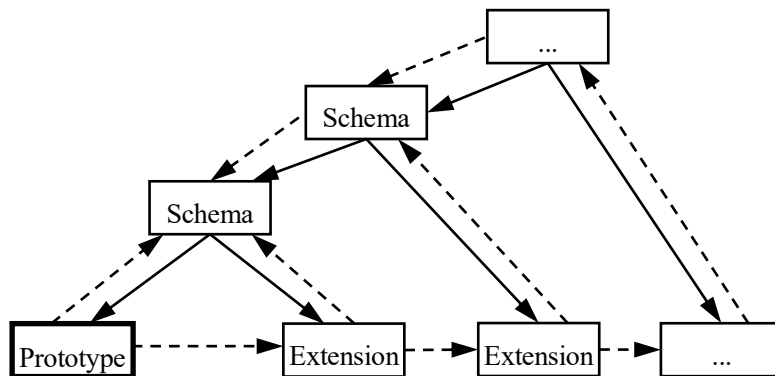


図 5

濃い実線の四角形で囲まれたプロトタイプが、あるカテゴリーにおけるもっとも典型的な例である。このプロトタイプが、類似性を見出す認知プロセスを経て、拡張事例を取り込む。その後、プロトタイプと拡張事例の二つの成員から、同じく類似性を見



出すプロセスによってスキーマが作り出される。また、取り込まれた拡張事例からさらに類似性のプロセスを経て新たな拡張事例がカテゴリーモデルに加わる。その結果、新たに加わった拡張事例と、既に生み出されていたスキーマからさらに大きなスキーマが抽出される。このようなプロセスを繰り返すことで、スキーマのネットワークモデルが構成される。

### 2.3.3 イメージスキーマ

スキーマ化のプロセスは、上の節で紹介した語レベルや構文レベルのものだけではなく、人間の生み出すイメージのレベルにも適応される。

我々が外部世界のモノに対して作り出すイメージは以下のようなものが挙げられる。

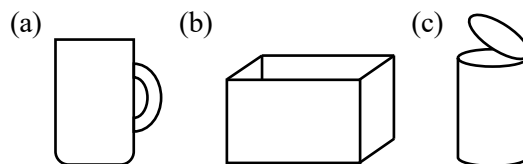


図 6

これらのイメージは、それぞれ(a)マグカップ、(b)段ボール箱、(c)空き缶に相当する。

前節で挙げたスキーマ化のプロセスのように、身の回りに存在する膨大なイメージからプロトタイプを見出し、そのプロトタイプから類似した拡張事例を作り出したり、取り込んだりする。そして、プロトタイプと拡張事例の共通する点からイメージスキーマを作り出す。その結果生み出される容器のイメージスキーマは以下のように図示できる。

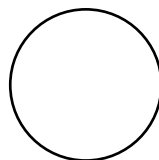


図 7

なお、イメージとイメージスキーマの違いは、絶対的に線引きできるものではない。例えば、プラスチックや金属などの素材の違う容器の存在も考えられるし、(c)を空き

缶と定義したが、蓋の開いた円筒型のゴミ箱とも解釈できる。つまり、「容器」として捉えた場合、図5が最も抽象化したイメージスキーマであると言えるが、図6(a-c)をそれぞれ「マグカップ」、「立方体の箱」、「円筒型の容器」として考えた場合、それぞれがスキーマ的であると言える。

### 2.3.4 拡張とメタファー写像

本研究で問題に挙げる移動行為は、この容器のイメージスキーマから拡張される。その前提条件として、容器のスキーマが場所のそれに写像されるという事実が存在する。

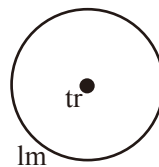


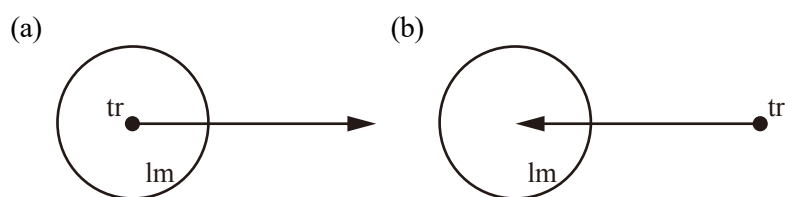
図8

上の図は、容器内(lm = landmark)にモノ(tr = trajectory)が存在していることを表すイメージスキーマである。このスキーマを反映する文として、以下の例が挙げられる。

- (19) a. There were three coins *in* the box.  
b. There were three police officers *in* the room.

上の例では、*in* という前置詞が、(a)では容器を表す *the box* の前に、(b)の文では場所を表す *the room* の前に現れている。容器と場所という異なるカテゴリーのものに対して同じ前置詞が使われていることから、容器のイメージスキーマが場所のそれに写像されていることが見て取れる。この写像のプロセスは、*the box* という容器と *the room* という場所の類似点 (i.e. 境界性を有していること) から生み出されるものであると考えられる。

モノが容器の内外へ移動する事態も、人が場所の内外へ移動する事態に写像される。



(山梨 2012: 13)<sup>2</sup>

図 9

上の図では、tr が容器から出る移動や、容器へ進入する移動を実線の矢印で示している。このイメージスキーマを反映する例として、以下のような文が挙げられる。

(20) a. I took some ice *out of* the glass.

b. My mother put lots of vegetables *in* the bowl.

c. Luke: We've gotta get *out of* here before the Sandpeople return.

[映画 *Star Wars: Episode IV A New Hope* (1977) <00:30:58>]

d. Han: There's another ship coming *in*.

[映画 *Star Wars: Episode IV A New Hope* (1977) <01:01:09>]

(a, b)はそれぞれ the glass と the bowl のような容器に対してモノ (i.e., ice, vegetables)が離脱したり進入したりする様子が、前者は *out of* で、後者は *in* で表現されている<sup>3</sup>。さらに、同様の前置詞 *out of*, *in* を用いて、特定の場所からの離脱や、ある場所への進入を表す表現も可能である (20 c, d)。したがって、容器内外への移動は、特定の場所から離脱したり、ある場所へ進入したりする行為にも写像が可能である。

本研究の主題となる移動動詞はある場所を離脱して、別の場所へ進入する動作を表す。本節のこれまでの議論をまとめると、容器のイメージスキーマは拡張と写像の認知プロセスを経て、以下のような移動のイメージスキーマに変化する。

<sup>2</sup> 山梨(2012)では'lm'が円の内側に描かれているが、本稿ではレイアウトの都合上、この引用を除き'lm'は円の外側に表示する。

<sup>3</sup> 例文に現れるモノの移動は、厳密には外部の力によるものであるが、ここでは力の伝達は無視し、伝達の結果生じるモノの移動に焦点を当てて説明する。

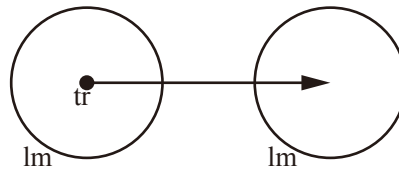


図 10

左右の円は、容器から写像された場所のイメージスキーマであり、移動主体(tr)が移動する際に離脱する領域と到達する領域を表している。移動主体による移動は、実線の矢印で示している。また、移動動詞は起点・経路・着点スキーマ(Johnson1987)がその背景にあることから、以下の様なスキーマが移動動詞の抽象物をより正確に捉えていると考える。

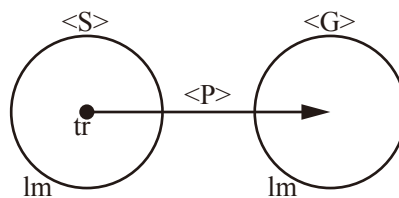


図 11

左の円が起点(S = Source)、矢印が経路(P = Path)、右の円が着点(G = Goal)をそれぞれ表している。詳しくは後述するが、本研究で考察の対象となる移動動詞は、この移動のスキーマを共有していると考えられる。ここで示したイメージスキーマに関しては、さらに第3章で詳細に考察を行う。

## 2.4 まとめ

以上、認知言語学のアプローチと、その中で本研究が拠り所とする理論について述べた。認知言語学誕生以前の言語研究は、主に言葉の「知」の部分にフォーカスを当てた研究が盛んに行われた。この種の研究では、言語が人間とは独立した自律的なものであると見られている。一方で、認知言語学は言語が自律的なモジュールであるとする言語観を問題とする。認知言語学では、言語の背景に存在する人間の身体的、社会的経験が言語表現に反映されると考えられる。これによって、抽象的で捉えにくいものに対して、類似事項を持った概念を説明する言語表現が流用されたり、ある感情

が、それに伴い生じる姿勢の方向性によって表現されたりする。

本研究が拠り所とする理論は、メタファー、スキーマ化と事例化、そしてそれを元にしたイメージスキーマ理論である。次章より、移動動詞の重要な要素に関して、イメージスキーマとメタファーなどの比喩的な意味拡張を中心に考察を行う。

### 第3章 移動動詞に関する認知的分析

本章では、英語移動動詞と、それに関わる全般的な概念の考察を行う。本章で取り上げるのは、次の三つである。i. Fillmore (1972)による移動動詞の分類、ii. Lakoff and Johnson (1999)によるスキーマ、iii. それらを基にした移動動詞のイメージスキーマの考察。

#### 3.1 Fillmore (1972)による分類

本節では、従来の研究による移動動詞の考察として、Fillmore (1972)による移動動詞の分類を取り上げる。Fillmore (1972)は移動動詞を起点指向動詞、中立動詞、着点指向動詞の三つに分類している。以下に例として挙げられている文を引用する。

(21) a. He *left* home on Tuesday.

b. He *sailed from* Vancouver *to* Hawaii last summer.

c. He *reached* Chicago around midnight. (Fillmore 1972: 4)

(21a-c)はそれぞれ起点指向動詞、中立動詞、着点指向動詞である。(21a)では、起点である *home* が目的語として *leave* の後に続いている。(21b)の文では、起点の *Vancouver* と着点の *Hawaii* がそれぞれ *from* と *to* の後に続いて言語化されている。(21c)の *reach* の後には、着点の *Chicago* が目的語として続いていることがわかる。ここで挙げられている動詞に関して考察を行う。

まず、起点指向動詞と着点指向動詞から考察する。上で挙げた文を見る限り、これらの動詞は他動詞である。それぞれの起点と着点の言及にする際には前置詞を必要としない。反対に、起点指向動詞が着点に、着点指向動詞が起点に言及しようとする場合、以下のように前置詞が必要となる。

(22) a. He left home *for* Osaka on Tuesday.

b. He reached Chicago *from* Osaka around midnight.

上の文は、(21a, c)の文にそれぞれ着点と起点を加えたものである。Leave の着点には

for, reach の起点には from が用いられる。

一方で、中立動詞として挙げられている sail には、起点と着点の両方を表す前置詞が用いられている。この動詞に関して、起点や着点を前置詞の伴わない目的語として後置することはできない。

(23) a. \*He sailed Vancouver last summer.

b. \* He sailed Hawaii last summer.

c. \* He sailed Vancouver and Hawaii last summer.

しかし、以下のような場合他動詞として用いることができる<sup>4</sup>。

(24) a. He sailed the Pacific Ocean from Vancouver to Hawaii last summer.

b. He sailed 4,351 km from Vancouver to Hawaii last summer.

上で挙げた例に関して、目的語として言語化されているのは経路もしくは距離である。

ここで、Fillmore (1972)が起点指向動詞、中立動詞、着点指向動詞の例として挙げている動詞に関して、抽象度の低いイメージを用いて考察する。以下の図で、矢印はそれぞれ移動の方向を表している。

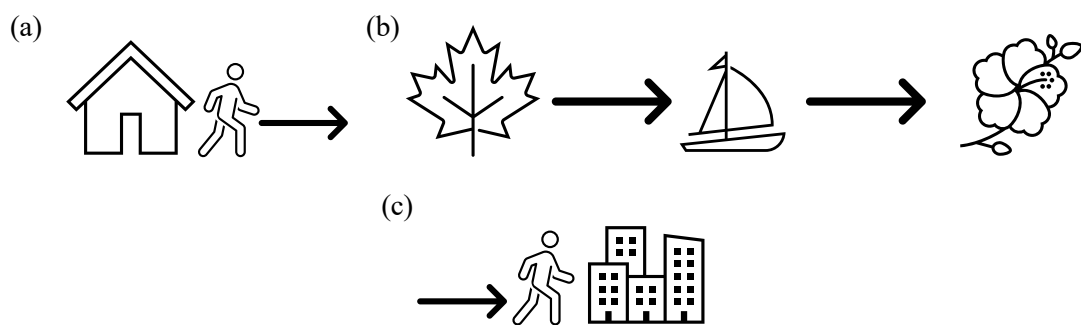


図 12

上の図は(21a-c)と対応するイメージである。この図が表しているのは、起点指向動詞

<sup>4</sup> (24a)に関して、sail の後に across が続くと容認度が上がる。

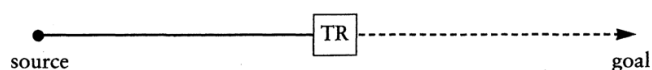
と着点指向動詞の目的語として現れる起点および着点は、それぞれの動詞が表す行為が行われるときに、主語の人物と近接関係にあるということである。主語の人物から離れた場所の言及を行う場合に、前置詞が使用される。図 12b の場合、sail で表される行為は、Vancouver と Hawaii のどちらとも接していないため、それぞれの場所に言及する場合には前置詞が必要となる。一方で、sail の行為をする際は経路である海や川と接触するため、それらについて言及する場合は、前置詞のない目的語として動詞の後に置くことができる。また、経路の距離も目的語として用いることができる。

以上、Fillmore (1972)による動詞の分類を概観した。本節で取り上げた起点指向動詞、中立動詞、着点指向動詞は、それぞれ起点、経路、着点を目的語として言語化できる。しかし、その他の移動に関わる要素を言語化できないわけではない。ここから、これらの移動動詞はなんらかの共通概念を有していると予測できる。次節では、この共通概念について考察を行う。

### 3.2 起点・経路・着点スキーマ

前節では、Fillmore (1972)による移動動詞の分類に関して概観を行なった。起点指向動詞、中立動詞、着点指向動詞は、それぞれ起点、経路、着点が動詞の目的語として言語化されている。しかし、考察してきたように、起点指向動詞を用いた文でも、適切な前置詞を使えば着点に言及することができる。そして、同じことが中立動詞や着点指向動詞にも言うことができる。ここから、移動動詞は何らかの共通する概念を有しており、その構成要素への意識の重み付けの違いで、異なる指向の動詞が生まれるということが推測できる。本節では、このような移動動詞に共通するスキーマについて考察を行う。

Lakoff and Johnson (1999)は、物理的な空間移動に関して、起点・経路・着点スキーマを提唱している。以下にその図を引用する。



(Lakoff and Johnson 1999: 33)

図 13



このスキーマは、以下の要素によって構成されている。

(25) A trajector that moves

A source location (the starting point)

A goal, that is, an intended destination of the trajectory

A route from the source to the goal

The actual trajectory of motion

The position of the trajector at a given time

The direction of the trajector at that time

The actual final location of the trajector, which may or may not be the intended destination

(Lakoff and Johnson 1999: 33)

すなわち、i. 移動するトラジェクター、ii. 起点となる場所（始点）、iii. トラジェクターの意図する目的地である着点、iv. 起点から着点への経路、v. 移動の実際の軌道、vi. 定められた時間におけるトラジェクターの位置、vii. その時間におけるトラジェクターの方向、viii. トラジェクターの実際の最終地点（目的地が意図される場合とされない場合がある）がこのスキーマの構成要素である。

Lakoff and Johnson (1999)は、このスキーマの各要素は、様々な前置詞によってプロファイルされると述べている。例えば、**to** を用いた文は着点、**from** を用いた文は起点をプロファイルする。さらに、プロファイルされた起点や着点は、トラジェクターである移動主体に対するランドマークとして機能する。以下に例を挙げる。

(26) a. John *walked to* the shopping mall.

b. John *walked home all the way from* Yokohama.

(26a, b)は、移動動詞の後に前置詞 **to**, **from** を用いている。これらの前置詞に続いてるのは、それぞれ着点と起点である。着点と起点が前置詞の後に続く形で言語化していることから、**to** や **from** がそれぞれの要素をプロファイルしていると考えることができる。

ここで、Fillmore (1972)の分類で挙げている例をもとにスキーマを考察する。以下に、

(21)で挙げた文を再掲する。

(27) a. He *left* home on Tuesday.

b. He *sailed from* Vancouver to Hawaii last summer.

c. He *reached* Chicago around midnight.

(Fillmore 1972: 4)

(27a)の文は起点指向動詞が使用されている。Leave の起点である home が目的語として言語化されている。この場合、起点がプロファイルされていると言える。(27c)は着点指向動詞に分類される reach が用いられている。着点の Chicago が reach の目的語として言語化されている。言い換えると、この二つの文では、それぞれ起点と着点がプロファイルされ言語化されている。この事実は、Lakoff and Johnson (1999)が述べている事実と異なる。つまり、(27a, c)の文はそれぞれ他動詞であり、from や to が用いられていないにもかかわらず起点や着点がプロファイルされている事になる。このことから、起点や着点のプロファイルは前置詞の使用とは異なるプロセスで行われることが推測できる。

この場合、起点や着点がプロファイルされるのは、トラジェクターの位置によるものであると考えられる。Leave や reach は、「離れる」、「到着する」意味で使用される場合、その動作は起点あるいは着点で行われる。前景化され際立った存在であるトラジェクターがある領域に存在する場合、その領域は別の領域よりも際立って見える。これによって、前置詞 to および from を用いる必要のない他動詞でも起点や着点がプロファイルされる。この場合、イメージスキーマは以下のように変換されることが予測できる。

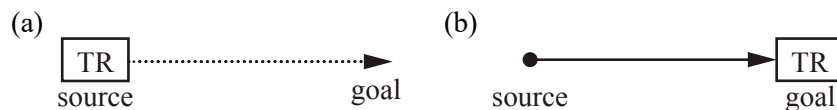


図 14

以上、Lakoff and Johnson (1999)による起点・経路・着点スキーマを概観した。このスキーマは移動動詞が共有しているものである。前置詞の使用によってプロファイルされる要素が異なる。さらに、前置詞が使用されない他動詞を含む文の場合でも、トラ

ジェクターの存在によって副次的にいずれかの領域がプロファイルされる。

しかし、このスキーマにはいくつか問題点がある。それは、言語の背景に存在する認知主体の存在が含まれていないこと、それにより、後述の直示の概念が表されないことである。そこで、次節以降ではこのスキーマにイメージスキーマを融合させ、移動のイメージスキーマを考察していく。

### 3.3 移動のイメージスキーマ

前節までは、Fillmore (1972)による移動動詞の分類と、Lakoff and Johnson (1999)による起点・経路・着点のスキーマを概観してきた。本節では、本研究で移動動詞の考察に用いるイメージスキーマの作成を試みる。移動のイメージスキーマを作り出す理由は次の通りである。i. 後述するように、場所の概念は容器の概念から比喩的に写像されたものであるため。ii. 発話行為の背景に存在する話者＝認知主体の関与を明らかにする。iii. それによって、後述する移動動詞の直示性・非直示性を明確に図式化する。本研究では、Lakoff and Johnson (1999)によるスキーマをもとに移動のイメージスキーマを考察する。

#### 3.3.1 場所のイメージスキーマ

Lakoff and Johnson (1999)のスキーマが示すように、移動行為は移動を開始する起点、移動行為が行われる経路、移動行為が完了する着点を前提としている。そのうちの起点と着点となる場所の概念は、容器の概念からメタファーを介して比喩的に写像されたものである。本節では、容器から場所へと比喩的に写像される様子を、具体的な例とイメージスキーマをもとに考察する。

第2章で述べたように、容器のイメージスキーマは異なる様々な容器のイメージを抽象化させて作られるものである。例えば、容器のイメージとして以下のようなものが挙げられる。

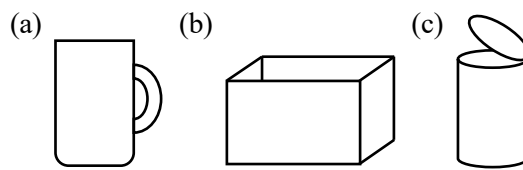


図 15

上の図は、それぞれマグカップ、箱、円筒状の容器のイメージである。認知主体は、様々な形状の容器から抽象化した以下のようなイメージスキーマを作り出すことができる。

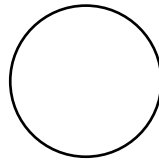


図 16

認知主体は、この容器のイメージスキーマに何らかの要素を足したり、変形や比喩的写像をしたりすることによって様々な言語表現を作り出すことができる。

以下より、容器の概念が移動行為の前提となる場所へ比喩的に写像する例<sup>5</sup>を見てみたい。

(28) a. David: Oh, what's *in* the box? [映画 Seven <01:58:47>]

b. Marty: Wh-Wh-What-What are you doing *in* my room?

[映画 Back to the Future Part II <00:40:46>]

c. Thornburg: Get on the phone to Harry *in* New York. [映画 Die Hard <01:22:11>]

これらは、物理的な容器の概念が段階的に領域を表す概念へと写像されていくプロセスを表した例である。それぞれの文で *in* が用いられていることから、それに後続する対象は全て同じ概念を共有している。The box が示す対象が、この中では最も典型的な容器であるといえる。次に、容器の概念が *my room* で示されるある場所を指す概念へ

<sup>5</sup> 映画の SCRIPT 引用において、斜体字は全て筆者によるものである。

と写像される。この場合は、以下のような類似関係を認知主体が見出したことによるものである。すなわち、四方を物理的な境界で囲まれた箱と、壁、床、天井という物理的な境界で囲まれた空間に類似関係を見出したことで、容器の概念が場所の概念へと写像されている。しかし、New York などの都市には、周囲を囲む壁や、都市全体を覆い尽くす屋根がなくとも、in が用いられる。ここでは、New York という領域と、他の領域を区別する境界が存在することが関係してあると考えられる。内と外を分ける境界を有していることが、容器と都市に共通していると認識し、その結果、容器を述べる際に用いた前置詞を流用することが可能になっている。この現象に関するイメージスキーマは以下のようなものである。

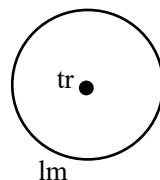


図 17

実線で描かれた円は、図 16 で示した容器のイメージスキーマである。円の中央にある黒丸は、容器の中に存在しているモノを示している。あるモノがある容器の中に存在することを示す文では、内容物が際立つためトラジェクター(=tr)となり、容器はその次に際立つランドマーク(=lm)となる。あるモノがある容器の内側に存在することが、ある人物がある場所に存在していることへと比喩的に写像され際、このイメージスキーマが共有され、同じ前置詞 *in* が使用される。

また、場所の内外への移動もモノが容器の内外へ移動する概念から比喩的に写像される。以下に例を挙げる<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> 例文に現れるモノの移動は、厳密には外部の力によるものであるが、ここでは力の伝達は無視し、伝達の結果生じるモノの移動に焦点を当てて説明する。

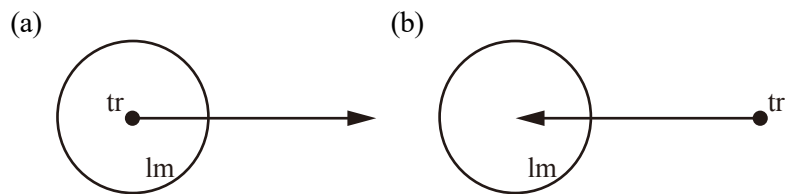
- (29) a. I took some ice *out of* the glass.  
b. My mother put lots of vegetables *in* the bowl.  
c. Luke: We've gotta get *out of* here before the Sandpeople return.

[映画 Star Wars: Episode IV A New Hope <00:30:58>]

- d. Eve: How did you get *in* here?

[映画 All About Eve <02:12:44>]

(29a, b)では、モノが容器の外、あるいは内側へ移動する様子がそれぞれ *out of*, *in* を伴って表現されている。そして、(29c, d)ではある場所の内外への移動が同じく *out of*, *in* を用いて表現されている。この言語表現には、以下のようなイメージスキーマが反映されている。



(山梨 2012: 13)<sup>7</sup>

図 18

容器から離脱する移動と容器の内側への移動が実線の矢印で示されている。

以上、移動行為の前提となる起点と着点の二つの場所に関わるイメージスキーマを概観した。場所の概念は、容器の概念から比喩的に写像されたものである。従って、場所のイメージスキーマは容器のものと同じく円で示すことができる。次節では、起点と着点を結ぶ経路について考察を行う。

### 3.3.2 経路のイメージスキーマ

ある領域と別の領域を結ぶ経路も、移動行為においては不可欠なものである。最も典型的な経路は平面であり、その上を移動主体が移動するものだと考えることができ

<sup>7</sup> 山梨(2012)では‘lm’が円の内側に描かれているが、本稿ではレイアウトの都合上、この引用を除き‘lm’は円の外側に表示する。

る。本節では way を中心に経路の考察を行う。以下に最初の例<sup>8</sup>を挙げる。

(30) Technician: The C.P.D. is *on* the way. [映画 The Fugitive <01:49:10>]

ここでは、経路を表す way の前に前置詞 *on* が使われていることから、移動主体の一部が経路に接触していることがわかる。この場合、経路のイメージスキーマは以下のように示すことができる。

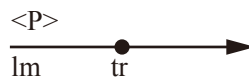


図 19

実線の矢印は経路(= P)と、その上を進む移動主体の移動の方向を示している。黒丸で示された移動主体が経路に接触している。

経路は起点と着点の間に存在する。そのため、*on one's/the way* には着点が後に続く場合がある。さらに、上下方向の前置詞が続く場合や、移動主体が経路に接触していない、あるいは物理的に接触できる経路がない場合にも使用される。以下にその例を挙げる。

(31) a. Be careful *on* the [your] way home. (G)

b. Chris: I'm *on* my way up. [映画 The Negotiator <01:50:10>]

c. Steve: *On* my way down to coordinate search and rescue.

[映画: Avengers: Endgame <01:17:18>]

d. Maverick: I'm *on* my way. [映画 Top Gun <00:08:13>]

(31a)は、経路の終点である着点 home が言語化されている。(31b, c)の文では、up/down などの方向を表す前置詞が使用されている。(31d)は戦闘機のパイロットが僚機の援護に向かうときに使用されている。この場合戦闘機は物理的に経路に触れているわけで

<sup>8</sup> 映画の引用における斜体字は筆者によるもの

はない。着点を僚機の付近と設定した場合に、そこへ向かう移動は経路に沿ったものであるとして、*on my way* が使用されていると考えることができる。これらの言語表現を可能とするために、経路のイメージスキーマも以下のように変化していく。

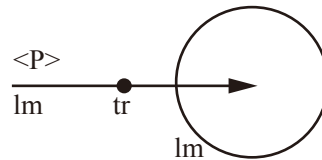


図 20

上に示した図は、例文(31a)に対応している。イメージスキーマ上にある領域が着点として現れている。この領域のイメージスキーマは、前節で述べた容器のイメージスキーマから比喩的に写像されたものである。これによって、例文で着点となる場所が言語化される。

続いて、(31b, c)の文には以下のようなイメージスキーマが反映される。

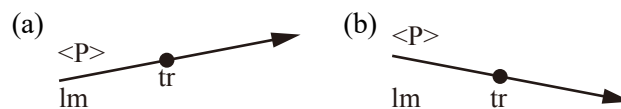


図 21

それぞれ *up* と *down* が用いられているため、経路に上下への方向づけが加わっている。

最後に、(31d)の文と対応するイメージスキーマを考える。

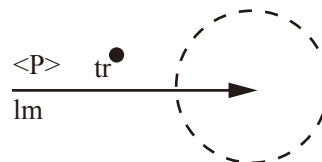


図 22

この文が発現されている状況は次の通りである。話者である認知主体と聞き手が戦闘機のパイロットであり、空戦を行っている。認知主体が聞き手を援護する際ために利



き手に近づこうとするときには発言される。この場合、戦闘機は物理的な経路と接触していないため、トラジェクターは実線の矢印に接していない。また、着点となる聞き手付近の領域は存在するが、言語化されていないため破線の円で表している。

以上、on one's [the] way に関する考察を行なった。典型的な例は、平面の経路に移動主体の一部が接触している。前置詞の追加や着点の言及によってイメージスキーマがダイナミックに変化していく。また、必ずしも経路が物理的に移動主体と接触する必要はなく、着点になり得ると認知主体が認識した場合、物理的な接触がなくても on one's [the] way を用いた文を作ることが可能である。

次に、同じく way を用いた文を見ていく。

(32) a. A fallen tree was *in the way of* the bus.

b. Get *out of* my way. (G)

上記の例は、倒れた木がバスの通り道を邪魔していること、聞き手が話者の進行の邪魔になっていることをそれぞれ表している。この例では、経路を表す語の前に in や out of が使われていることから、経路に容器の概念が流用されていることがわかる。この言語表現は、以下のようなイメージスキーマが関連していると考えられる。

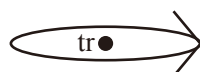


図 23

これまでの考察で実線の矢印で表していた経路は、前節で見た容器のイメージスキーマを楕円形に変形した形で表している。Way に in や out of という前置詞が共起することから、経路が平面ではなく内側と外側の境界を有する容器として捉えられている。

以上、移動行為において前提となる経路のイメージスキーマについて考察を行なった。ある移動主体が経路を移動する場合、通常は平面の経路に移動主体の一部が接触する。従って、経路のイメージスキーマは2次元の線として捉えられている。そして、接触するイメージから前置詞の on が way の前に使用される。このスキーマは着点の存在や上下への方向性を表すように拡張する。さらに、前置詞の on が使用されている

にもかかわらず、移動主体が物理的に経路に接触していないケースも存在する。また、認知主体は経路に対して内側と外側を分ける境界を見出すことができる。その結果、*in* や *out of* など容器の位置関係に関する前置詞が使用される。

### 3.3.3 起点・経路・着点のイメージスキーマ

前節で見たように、移動の要素である起点と着点は、容器の概念から比喩的に写像されたものである。従って、ある領域から別の領域への移動はある容器から別の容器への移動から比喩的に写像されている。これを踏まえて起点・経路・着点の要素を含む移動のイメージスキーマは、以下のように図示できる。

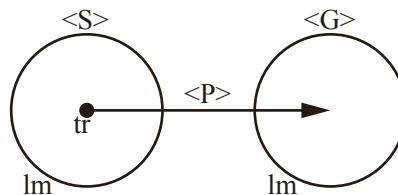


図 24

左右の円は、それぞれ起点(S = Source)と着点(G = Goal)を表している。実線矢印は経路と移動の方向を表す(P = Path)。

移動行為において、移動主体の位置は一定ではない。起点・経路・着点のいずれかに存在している。以下に例を挙げる。

- (33) a. I have to go.  
b. I'm *on my way* home.  
c. She's just *come* here.

移動主体に着目すると、イメージスキーマは以下の三通りに変化する。

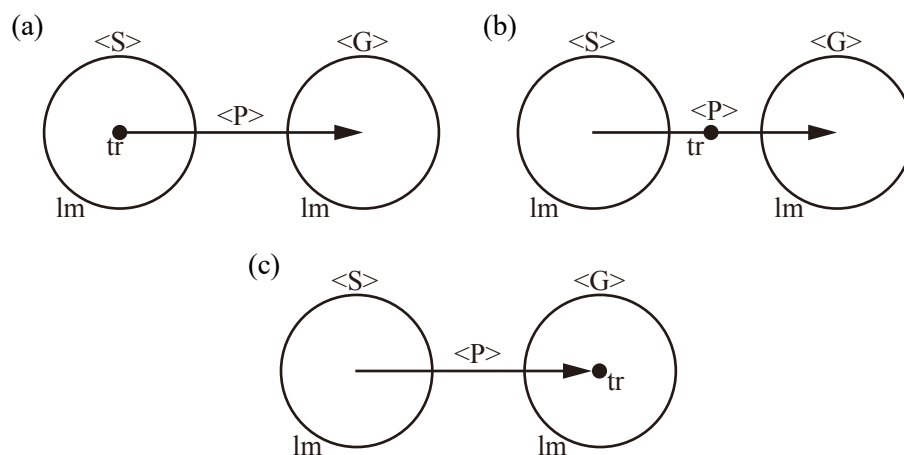


図 25

黒丸の位置が、移動主体の存在する位置を表している。

次に、起点と着点に注目したい。移動のイメージスキーマ上の全ての要素が言語化されるわけではない。それぞれの要素が背景化、あるいは前景化などのプロセスを経て、イメージスキーマはダイナミックに変容していく。具体的には、起点・着点のいずれかが前景化するパターン、両方とも背景化されるパターン、両方とも前景化されるパターンの4種類が想定されるだろう。以下の例を見てみたい。

(34) a. Our Chinese friends *left* town before I could tell them the deal was off.

[映画 The Dark Night <00:27:10>]

b. McClane: I only *moved to* L.A. 'cause my wife took a job there.

[映画 Die Hard 2 <00:01:16>]

c. Doc: This is the exact time you *left*.

[映画 Back to the Future <01:32:02>]

d. George: Science-fiction stories about, uh, visitors...*coming down to* earth *from* other planets.

[映画 Back to the Future <00:59:02>]

これらは以下のように図示できる。

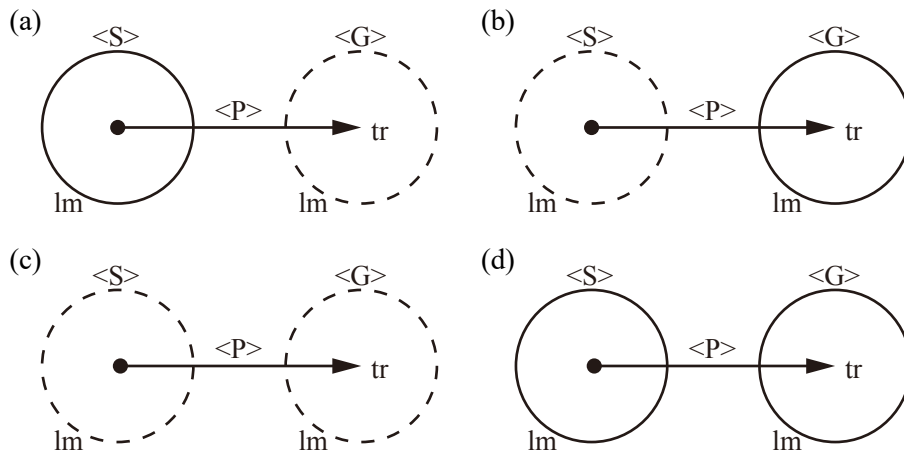


図 26

イメージスキーマ上の破線で表された領域は背景化されており、言語化されない。反対に、実線で表された領域は前景化されており、言語表現に現れる。

この様に、移動主体の位置の違いによるバリエーションが 3 種類あり、それぞれのバリエーションから前景化・背景化の違いによるバリエーションが 4 つ派生する。ある移動動詞の物理的な空間移動には、以上の様なイメージスキーマの拡張が存在している。この考えは、以下の様なネットワークとして描くことができる。

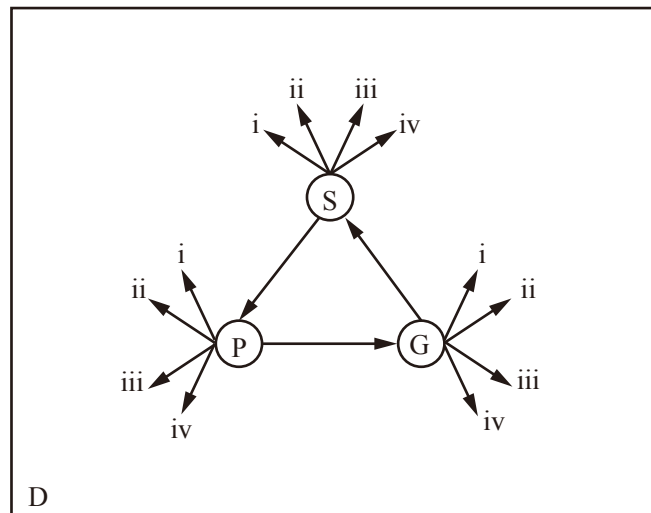


図 27

円で囲まれた S, P, G は、それぞれ移動主体が起点にいる場合、経路にいる場合、着点にいる場合を表している。それらをつなぐ矢印は、移動主体の位置変化の方向を示し

ている。起点にいる状態から経路にいる状態へ移行し、さらに着点へと到達する。到達した着点は、別の移動の起点となる。それぞれ移動の始動（あるいは未然）・途中・完了を表すため、スキーマ上の移動主体の位置の違いは、主に時制に現れると考える。それぞれの要素から拡張する i, ii, iii, iv は、図 26 (a, b, c, d)に対応している。また、このネットワークは全体があるドメイン(D = Domain)に位置しており、このドメインが COME であるなら、*come* が使用される。物理的な空間移動を表現する場合は、上に挙げた要素のいずれかのイメージスキーマが反映される。

このネットワークモデルは、移動動詞が物理的な空間移動を表す際の理論上の拡張を表している。つまり、実際にこの通りに拡張が行われるわけではない。移動主体が存在する位置のバリエーションは存在するが、起点・着点の前景化・背景化は全く同じ頻度で生じるわけではない。認知主体の経験によって、それぞれの要素に異なる重み付けが生じる。後に考察の対象となる *come* や *go* も、この理論上のネットワークのうち、拡張の起こりやすい部分とそうでない部分が存在していると推測できる。

### 3.4 起点・着点に関する考察

移動のイメージスキーマには、起点・着点という領域が含まれている。この起点・着点という概念は、極めて可變的である。起点・着点として言語化される情報が、直接移動主体の起点・着点を指すわけではない。ここでは、移動行為の前提となる起点と着点についてさらに考察を行う。

(35) a. Darth Vader: He will *come* to me?

[映画 Star Wars: Episode VI Return of the Jedi <01:04:40>]

b. David: They got to *come* to you, yeah?

[映画 Seven <01:27:18 >]

c. And then there was that night just before the murder when William *came* to him with his plan.

(BNC)

上記の例は、*come* が表す移動行為である。これらの表現において、前置詞 *to* に続く名詞は着点に存在する人物を表している。それぞれの人物が存在している領域は言語化

されていない。この場合、移動によってどこかの領域へ到達するというよりは、移動の結果その領域に存在する人物との接触が重視されている。

では、次の文はどうだろう。

- (36) a. She is *leaving* Osaka.  
b. Let's *go* to the museum.  
c. Are you *coming* to the party?  
d. I'm *going* to the meeting.

(36a, b)では、起点・着点となる場所が言語化されている。しかし、認知主体は起点・着点を詳細に言語化しているわけではない。例えば、実際の移動では、大阪の枚方市にある学生マンションから引越しをしたり、博物館のアンモナイトの展示ブースを目的としたりするなど、具体的な移動の起点・着点が存在する。つまり、言語化されているのは、起点・着点の一部ということである。移動主体の具体的な移動の始動・終了の箇所は言語化せず、代わりに、その箇所を含む領域が言語化されている。この言語化は、近接性に基づくもの、すなわち、メトニミーが関与している。

(36c, d)については、着点として前置詞 *to* に続く語は具体的な場所ではなくイベントを表している。あるイベントは、イベント会場で行われる。したがって、イベントに参加しているということは、イベント会場に存在していることを表す。この例でも、イベントとイベント会場の近接性に基づき、イベントが言語化されていることから、メトニミーの関与が考えられる。また、より具体的にはイベント会場の特定の部分が移動の終了する箇所となるだろう。例えば、パーティへ参加する場合、パーティ会場にある座席が最終目的地になり、会議に参加する場合は会議室の席が最終目的地になるだろう。このように、移動の起点・着点の言語化にはメトニミーが関与している。この認知プロセスは、以下のような参照点構造<sup>9</sup>によって図示できるだろう。

---

<sup>9</sup> 参照点構造の具体的な説明は Langacker (1993)を参照のこと。

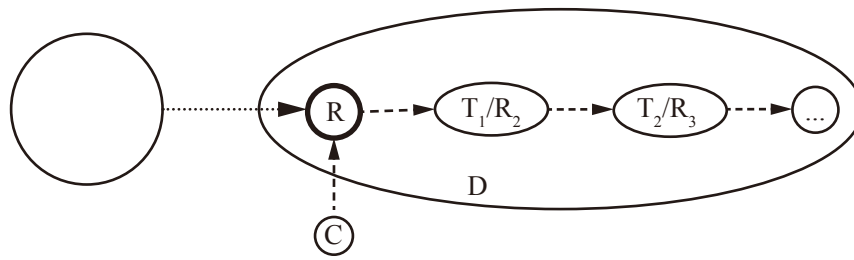


図 28

上の図は、起点・着点が言語化される際の参照点構造を表している。認知主体は、言語化されている、太い円で囲まれた参照点(R = reference point)をもとにターゲット(T = target)の理解をする。その際、ターゲットが参照点になり、さらに別のターゲットへ認知主体のメンタルパス (破線矢印) が及ぶこともある。例えば、(36a)の場合、大阪を参照点にして、ターゲットである枚方市を理解する。さらに、枚方市が参照点になり、学生マンションがターゲットになる、ということが理論上可能である。また、参照点は容器の概念から比喩的に写像されていることを、左の円から伸びる点線の矢印で表している。

### 3.5 直示

ここで、英語移動動詞の中でも come と go に関わる直示の概念の考察を行う。Fillmore (1972)は、話者・聞き手間のディスコースのうち、発話時または移動行為の到達時に、話者または聞き手が存在する領域が直示的中心と主張している。この直示的中心への移動が、come で表現される。大江(1975)や山添(2004)は、話者の視点が存在する領域が直示的中心であり、その領域への移動が come で表されると考えている。

本研究では、話者の視点が存在する領域が直示的中心であり、そこへ向かう移動を come とする考え方を支持する。しかし、先行研究では、視点が存在する場所が直示的中心であるという主張を行なっているが、視点が存在すると直示的中心になり、come が使用される理由については言及していない。以下より、視点の存在が come で表される移動の着点になる理由を考察する。

結論から言うと、この現象は、メタファーによって生じるものである。具体的には、VISUAL FIELDS ARE CONTAINERS (Lakoff and Johnson 1980: 30)のメタファーが関与している。このメタファーにより、人間は、観察行為によって得られた視界を、容器の概念

へと比喩的に写像することができる。このことは、以下の例からも明らかである。

(37) a. The ship is *coming into* view.

b. I *have* him *in* sight.

c. He's *out of* sight now.

(Lakoff and Johnson 1980: 30)

視界を表す語(view, sight)の前に容器の内外を表す前置詞である *into*, *in*, *out of* がそれぞれ用いられていることから、視界の概念が、容器の概念から比喩的に写像されていることがわかる。また、視界への移動が、*coming* で表現されている。Fillmore(1972)の主張する直示的中心となる条件の一つである、話者のいる場所が *come* の使用される典型的な例だと仮定すると、観察行為によって容器へと比喩的に写像された視界は、さらに話者（認知主体）が存在する領域へと写像される。この件に関して、もう一つ興味深い現象がある。視界への進入は、視界の四隅から中央に向かうものだけではない。筆者のインフォーマントが、コンピュータ上で画像の読み込みが始まり、もう少しで画像が表示されるという時に、“*It’s coming, it’s coming!*” と発言した。このことから、見えることが直示的中心への移動に写像されていることがよくわかる。

したがって、話者の視点が存在する場所が直示的中心となり、*come* で表現される移動の着点となるのは、認知主体の視界が容器に写像され、その容器が認知主体の存在する領域へと写像されるというプロセスを経て生じる現象である。移動動詞のうち *come/go* は、このプロセスが反映される点において、他の移動動詞とは一線を画している。

以上に示した直示性を反映するイメージスキーマは、以下のように図示できる。

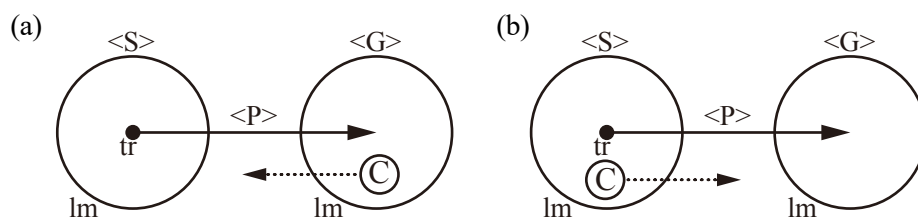


図 29



上記の図(a, b)は、それぞれ come と go のイメージスキーマを表している。どちらも移動を表す動詞であるため、前述した移動のイメージスキーマを基にしている。Come/go に特有の要素として、直示性が存在する。直示的中心は、本研究では認知主体の視界が存在する場所である。したがって、上記図に認知主体(C = conceptualizer)が存在し、視点（点線矢印）が存在する領域が直示的中心となる。

本研究では、これらのイメージスキーマが come/go の背景に存在すると考え、考察を行う。上に挙げたイメージスキーマは、come/go の要素を抽出したものであり、それ自体が多岐にわたる come/go の意味拡張を表すわけではない。焦点シフトや背景化・前景化のプロセスを経て、イメージスキーマは変容していく。さらに、イメージスキーマに変化が無くとも、メタファーやメトニミーが関与することによって、語の意味はさらに拡張していく。また、認知主体の視点が存在する場所は、認知主体が物理的に存在する場所が典型的であるが、認知主体が心理的な存在となり、視点を投影する場合もある。つまり、直示的中心には認知主体が物理的に存在する場合と、心理的に存在する場合がある。Come/go の具体的な考察は、第4章以降で行う。

### 3.6 空間移動から状態変化への拡張

前節まで、移動動詞全般の、物理的移動に関する考察を行った。移動行為は、起点・経路・着点スキーマを共有している。そのうち、起点・着点となる領域は、容器から比喩的に写像されたものである。この写像は、容器と領域が持つ境界という類似関係からメタファーの認知プロセスを経て生じる。また、場所となる領域だけでなく、イベント、行為、活動、状態も容器から比喩的に写像され、その結果領域となり移動の起点・着点として表現することが可能なものもある。また興味深いことに、経路は平面として捉えられる場合と、境界性を見出して容器として捉えられる場合が存在する。

以上の点を踏まえて、移動行為に共通するイメージスキーマを考察した。移動のイメージスキーマは一定ではなく、言語化される要素によって、スキーマの背景化、前景化などの焦点シフトがダイナミックに起きる。

最後に、起点と着点に関して少し考察を加えた。起点・着点として言語化される語は、直接具体的な移動の始動・終了する箇所を必ずしも言語化しない。大抵の場合、隣接関係が見出され、メトニミーの関与によって言語化されている。

次節以降、物理的な空間移動を表す動詞が状態変化を表す際の拡張プロセスを考察

していく。

### 3.6.1 状態変化を表す移動動詞

本節では、本格的な考察に移る前に、どのような移動動詞が状態変化を表す際に用いられるのかを概観していく。これに関して、Practical English Usage 4 (Swan 2017) (以下、PEU4) を引用しながら見ていきたい。

以下、PEU4 (394)による状態変化を表す動詞とその用法を引用する。

#### (38) PEU4

##### **394 *become, get, go, grow, etc.*: changes**

*Become, get, go, come, grow, and turn* can all be used with similar meanings to talk about changes. The differences between them are complicated – they depend partly on grammar, partly on meaning and partly on fixed usage.

##### **1 *become dark, become a pilot, etc***

*Become* can be used before adjectives and noun phrases.

*It was **becoming** very dark.*

*What do you have to do to **become a pilot**?*

*Become* is not usually used to talk about single deliberate actions.

*Please **get ready** now.* (NOT ~~*Please become ready now.*~~)

##### **2 *get dark, younger, etc***

*Get* (informal) is very common before adjectives (without nouns)

*It was **getting** very dark.* (informal)

*You **get younger** every day.* (informal)

*Get* can also be used before past participles like *lost, broken, dressed, married*.

*They **got married** in 1986, and **got divorced** two years later.*

We generally use *go*, not *get*, to talk about changes of colour and some changes for the worse, like *go mad* (BrE) / *go crazy* ...

*Get* is not normally used before nouns to talk about changes.

*I became a grandfather last week.* (NOT ~~*I got a grandfather...*~~)

### 3 *get* + infinitive

We can sometimes use *get* with an infinitive to talk about a gradual change.

*After a few weeks I got to like the job better.*

*She's nice when you get to know her.*

### 4 *go red, go mad, etc*

*Go* can be used before adjectives to talk about change, especially in an informal style. This is common in two cases.

#### a colours

*Go* (and not *get*) is used to talk about changes of colour, especially in British English.

*Leaves go brown in autumn.* (NOT ~~*Leaves get brown...*~~)

*She went white with anger.*

*Suddenly everything went black and I lost consciousness.*

Other examples: *go blue with cold / red with embarrassment / green with envy*. *Turn* can also be used in these cases (see below), and so can *grow* when the change is gradual. *Go* is more informal than *turn* and *grow*.

#### b changes for the worse

*Go* (not usually *get*) is used before adjectives in some expressions that refer to changes for the worse. People *go mad* (BrE), *crazy*, *deaf*, *blind*, *gray*, or *bald*; horses *go lame*; machines *go wrong*; meat, fish or vegetables *go bad*; milk *goes sour*; bread *goes stale*; beer, lemonade, musical instruments and car tyres *go flat*.

*He went bald in his twenties.*

*The car keeps going wrong.*

Note that we use *get*, not *go*, with *old*, *tired*, and *ill*.

### 5 *come true, etc*

*Come* is used in a few fixed expressions to talk about things finishing up all right. The most

common are *come right* (BrE) and *come true*.

*I'll make all your dreams **come true**.*

*Trust me – it will all **come right** in the end.*

*Come* + **infinitive** can be used to talk about changes in mental state or attitude.

*I slowly **came to realise** that she knew what she was doing.*

*You will **come to regret** your decision.*

### 6 *grow old, etc*

*Grow* is used before adjectives especially to talk about slow and gradual changes. It is more formal than *get* or *go*, and a little old-fashioned or literary.

*Without noticing it he **grew old**.*

*When they **grew rich** they began to drop their old friends.*

*As the weather **grew colder**, I think of moving to a warmer country.*

*Grow* + **infinitive** can be used (like *come* + **infinitive**) to talk about changes in attitude, especially if these are gradual.

*He **grew to accept** his stepmother, but he never **grew to love** her.*

### 7 *turn red, etc*

*Turn* is used mostly for visible or striking changes of state. It is common before colour words (and is not so informal as *go*).

*She **turned bright red** and ran out of the room.*

*He **turns violent** after he's had a couple of drinks.*

We can use *turn* before numbers to talk about important changes of age.

*I **turned fifty** last week. It's all downhill from now on.*

*Turn into* is used before nouns.

*He's a lovely man, but when he gets jealous he **turns into a monster**.*

*A girl has to kiss a lot of frogs before one of them **turns into a prince**.*

*Turn to* and *turn into* can both be used before the names of materials.

*Everything that King Midas touched **turned (in)to gold**.*

*They stood there as if they had been **turned (in)to stone**.*

To talk about a change of occupation, religion, politics, etc, we sometimes use *turn* with a noun (with no preposition or article) or an adjective.

*He worked in a bank for thirty years before **turning painter**.*

*Towards the end of the war he **turned traitor**.*

*At the end of her life she **turned Catholic**.*

*Turn (in)to* can also be used to talk about changing one thing into another.

*In the Greek legend, Circe **turned men into pigs**.*

### 8 *fall ill*, etc

*Fall* is used to mean ‘become’ in *fall ill*, *fall asleep* and *fall in love*.

以上のように、PEU4 では *become*, *get*, *go*, *grow*, *come*, *turn*, *fall* の7つの動詞が、状態変化を表す動詞として紹介されている。これらの動詞は、*become*, *grow*, *turn* を除き、本来はある領域から別の領域への移動を表す動詞として使用される。このことから、状態変化は移動の概念から比喩的に写像されていることがわかる。また、*become*, *grow*, *turn* は異なる二つの領域間の移動を表す語ではないが、状態変化を表す動詞として用いられている。その理由としては、後述するが、いずれも移動の要素を少なからず持っていることであると考えられる。

PEU4 の記述では、*come* は *right*, *true* を伴って、物事が良い方向に終わることを表すことができる。さらに、*to* 不定詞が後続し、心理的な状態や態度の変化を表すことができる。一方、*go* は色彩変化と、悪い状態への変化を表すことができる。色彩変化に関しては、*turn* と *grow* でも表すことができる。

### 3.6.2 「状態」の捉え方

この節では、移動動詞を用いた状態変化を表現する用法の考察に先立ち、英語において「状態」がどのように捉えられているのかを考察する。

Lakoff and Johnson (1999)によると、「状態」は「場所」と同じ捉え方をされている。これは、THE LOCATION EVENT-STRUCTURE METAPHOR (Lakoff and Johnson 1999)の下位メタファーである、States Are Locations (Lakoff and Johnson 1999: 179)が関与している。このメタファーによると、内部と外部の構造があり、その両者を境界で区切られている場

所の概念が、状態の概念へと比喩的に写像されていることが説明できる。以下にその例を挙げる。この様子は、前置詞 + 名詞を含む以下のような例で見ることができる。

(39) a. I'm *in* love.

b. She's *out of* her depression.

(Lakoff and Johnson 1999: 180)

上記の例では、それぞれ状態を表す語の前に *in*, *out of* といった語、あるいは句が置かれている。(39a)の場合、*in* が *love* と共起していることから、*love* が示す状態が容器、あるいは場所として捉えられていることがわかる。そして、容器、あるいは場所の内側に存在することは、その状態に身をおいていることを表すため、この文の解釈は「私は恋をしている」となる。一方、(39b)では *depression* に対して *out of* が用いられている。このことから、やはり、状態が容器、あるいは場所として捉えられていることが理解できる。そして、ある場所の外側に存在していることが、ある状態から抜け出していることを表すようになる。そのため、この文の解釈は「彼女は鬱から抜け出している」となる。

(39)の例は、共起する前置詞 *in*, *out of* からわかるように、ある状態が明確な境界が存在する閉鎖的な空間として捉えられている。Lakoff and Johnson (1999)のこの例を見る限りでは、ある場所の内部に存在することがある状態にあることを表し、ある場所の外側に存在することが、ある状態になっていないことを表す。従って、上記の例にある前置詞を入れ替えた場合、それぞれ逆の意味になることが予想される。以下は、Sketch English for Language Learning (以下 SkELL) から引用した例<sup>10</sup>である。

(40) a. I don't know how to move on, I am *out of* love with her, but I'm not sure if I am capable of love again.

b. She was *in* depression for about a year.

(SkELL)

(40a)では、話者がある女性に対して恋愛感情を持っていないことが、場所として捉えられている *love* の外側にいることで表現されている。(40b)では、*depression* の内側に

---

<sup>10</sup> 斜体字は筆者によるもの。

いたことが、主語で表される人物がうつ病を患っていたことを表現している。

このように、閉鎖的な場所の中に存在していることが、ある状態に身を置いていることを表し、ある場所の外側に存在していることが、ある状態から抜け出していることを表すことがわかった。しかし、全ての状態がこの例に当てはまるわけではない。

例えば、以下の例では、ある場所の外側にいることで、逆にある状態になっていることを表すことができる。

(41) Vince: Are you *out of* your mind?

[映画 Twins <00:12:50>]

この例は、相手に対して気が変になった、あるいはおかしくなったことを問う文である。ここでは、その様子が *mind* の外側にいることで表現されている。

ここまで、状態を表す語の前に *in*, *out of* など内側・外側の存在を表す前置詞が用いられるパターンを見てきた。Lakoff and Johnson (1999)の考察では、これらは状態が場所に捉えられたものである。本研究では、2.3.4 節において容器のスキーマについて考察した。そこでは、場所とは容器の概念から比喩的に写像されたものであると説明した。従って、ここまで見てきた意味拡張の根底には容器の概念が存在していると考えることができる。実際、Lakoff and Johnson (1980)は以下の例を容器のメタファーの一部として扱っている。

(42) a. He's *in* love.

b. We're *out of* trouble now.

(Lakoff and Johnson 1980: 32)

場所は容器の概念から比喩的に写像されるため、ここまで見てきたような壁、床、天井で囲まれた閉鎖的な空間の内外に存在することである状態を表すことができる。さらに、この閉鎖空間は垂直方向への広がりを見せる場合もある。以下に例を挙げる。

(43) a. He's *in* a *deep* depression.

(Lakoff and Johnson 1999: 180)

b. He's *in* *high* spirits.

c. He's *in* *top* shape.

(Lakoff and Johnson 1980: 15)

これらの例では、状態を表す語の前に *deep, high, top* などが用いられている。これにより、ある閉鎖的な空間が上方向、あるいは下方向へ垂直な広がりを見せていることがわかる。この種の拡張には、状態を容器、あるいは場所と捉えるメタファー以外の要素が関与している。この例に関しては、*HAPPY IS UP; SAD IS DOWN* (Lakoff and Johnson 1980:15) と *HEALTH AND LIFE ARE UP; SICKNESS AND DEATH ARE DOWN* (ibid.) の関与が考えられる。これらのメタファーは、ある状態における身体的経験に基づくものである。例えば、嬉しい時、健康な時には上方向、悲しい時、病気の時には下方向へ姿勢が変化する。この身体的経験が、言語表現にも反映される。そして、その状態が容器、あるいは場所として捉えられる場合、身体的経験からくる方向付けが容器や場所の垂直方向への拡張にも繋がる。従って、(43a)の憂鬱な感情は身体的な経験から下方向への姿勢の変化が反映され、容器が *deep* を伴う下方向への垂直な拡張を得る。反対に、(43b, c)では気分が良いこと、健康であることが上方向への姿勢の変化を伴うという身体的経験が反映され、容器や場所に上方向への垂直な拡張が付与される。

以上、状態が場所として捉えられる例の一部を見てきた。ここまでの例では、ある状態が閉鎖的な場所に比喩的に写像されることがわかった。この場合、場所へと比喩的に写像される容器の概念が反映されていることがわかる。さらに、閉鎖的な空間は身体的経験を反映するメタファーによって上方向、あるいは下方向へ垂直な拡張を表すことがわかった。

ある状態は、容器から写像された場所の概念から比喩的に写像されたものであるため、ある状態が完全に閉鎖的な空間としては捉えられないケースも存在する。以下の例を見てみたい。

- (44) a. We were *on the verge of* bankruptcy. (SkELL)  
b. Europe was *on the brink of* war. (SkELL)  
c. He's *on the edge of* madness. (Lakoff and Johnson 1999: 180)

これらの例は、ある人・モノのある場所に対する位置関係が *on the verge of, on the brink of, on the edge of* などの縁、瀬戸際を表す前置詞で表現されている。この場合、状態は四方を壁、床、天井で囲まれた閉鎖的な空間としてではなく、ひらけた空間として認識されていることがわかる。そして、上記の例の場合、ある人・モノがそれぞれ倒産、



戦争、気が変になる瀬戸際にいることを表している。

以下のような例はどうか。

(45) a. She's *close to* insanity.

b. We're *far from* safety.

(Lakoff and Johnson 1999: 180)

上の例では、insanity, safety などの状態を表す名詞の前に close to, far from などの、ある場所に対する距離を表す句が用いられている。その結果、ある状態に対するグレディエンスを表すことができる。(45a)では場所と捉えられた insanity に対して、close to を用いてその距離が近いことを表している。これによって、ある人物の気が変になりかけていることを表すことができる。反対に、(45b)は safety に far from が用いられていることから、ある場所からの距離が遠いことが、ある状態からかけ離れていることを表している。

以上、Lakoff and Johnson (1999)による States Are Locations のメタファーが関与することで、場所が状態へと比喩的に写像された例を見てきた。このメタファーの関与は、状態を表す語に in, out of の内外を表す語・句、on the edge of をはじめとする境界を表す句、そして、close to や far from などの距離を表す句が用いられることから推測することができる。

場所から比喩的に写像した状態は、容器から比喩的に写像した場所の概念と同様に、比較的柔軟に拡張を見せる。ある場所はある容器と同じく境界を有するという類似性から比喩的に拡張しているが、この際に、境界が物理的である必要は希薄化されている。これは、以下の例から明らかである。

(46) a. Marty: Wh-Wh-What-What are you doing *in* my room?

[映画 Back to the Future Part II <00:40:46>]

b. Thornburg: Get on the phone to Harry *in* New York.

[映画 Die Hard <01:22:11>]

この文は、3.2.1 節の(28)の例文と同じものである。ここでは、in が物理的な境界を有する閉鎖的な room と、物理的な閉鎖的境界を持たない New York の両方で用いられている。このことから、場所が有する境界は、必ずしも物理的なものである必要がない

と言うことがわかる。このことは、以下のように図示できる。

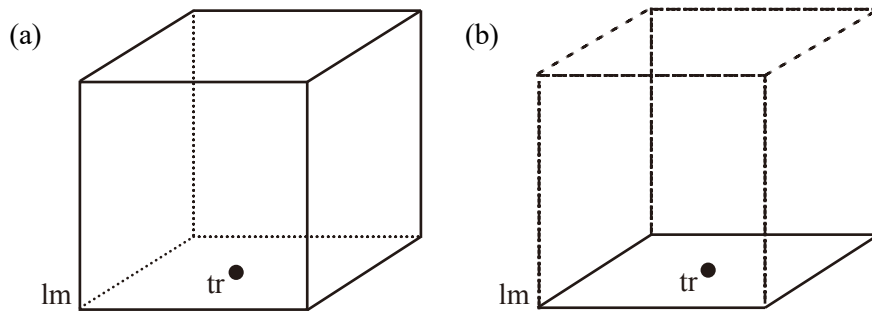


図 30

上の図は、(46)の例文を、抽象度の低いイメージスキーマで表したものである。図 30a は(46a)を、図 30b は(46b)をそれぞれ示している。さらに詳しく見ていきたい。図 30a では、実線で構成されている面が物理的な境界となり、閉鎖的な空間を作り出している。黒丸で示されたトラジェクターはその閉鎖的な空間に存在している。点線は、物理的な面に隠れて見えない境界を示しているものである。一方、図 30b では、閉鎖的な空間を作り出す、物理的な面となる境界は存在しない。その様子を、破線で表している。底面を作り出している実線は、New York の境界を表している。このように、場所は容器と異なり境界に関して柔軟な拡張が見られる。

このような柔軟な拡張が、場所の概念が状態へと比喩的に写像された場合にも見られる。(39a)と(44c)は、それぞれ以下の様に図示できる。

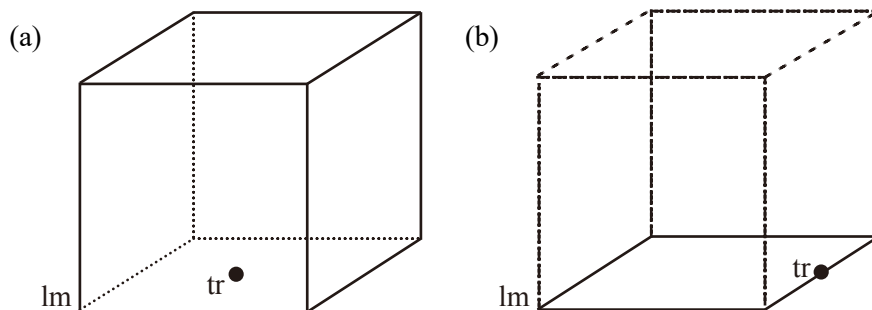


図 31

(39a)で love が場所として捉えられ、前置詞 *in* の後に続いている。このことから、love

が四方を囲まれた閉鎖的な空間へと写像されていることがわかる。一方、(44c)の *madness* には *on the edge of* が先行していることから、閉鎖的ではない場所として捉えられていることがわかる。

この様に、ある状態がある場所の概念から比喩的に写像される場合、非常に柔軟な意味拡張を見せる。このような拡張が可能なのは、ある容器から場所へと比喩的に写像される段階で、上のようなスキーマではなく、より抽象度の高いイメージスキーマを元に、類似関係からメタファー的に写像を行なっているからである。容器のイメージスキーマは、以下のように表される。

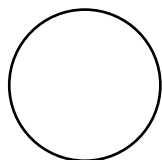


図 32

円の実線は、容器の内側と外側を分ける境界を表している。この境界の存在が、場所や状態へと比喩的に写像される際に動機付けとなる類似項目である。容器の場合に物理的なものであった境界が、場所や状態へと写像されるプロセスの中で希薄化し、必ずしも物理的である必要がなくなっている。

以上、英語において状態がどのように捉えられるかを概観した。英語では、状態は場所の概念から比喩的に写像されるものである。このことは、状態を表す語の前に、場所に対する位置関係を表す前置詞句が用いられることから明らかである。また、場所が容器の概念から比喩的に写像する際に起きた、物理的な境界の希薄化が確認された。容器から場所へと比喩的に写像される際に、物理的な境界に囲まれた閉鎖的な空間である必要が薄れるのと同じ現象が、状態でも確認できた。次の節では、ある場所と捉えられたある状態へと変化する現象が、どのように捉えられているかを概観したい。

### 3.6.3 「変化」の捉え方

前節では、英語で状態がどのように捉えられるかを概観した。ある状態は、ある場所の概念から比喩的に写像されたものである。本節では、状態変化がどのように捉えられるのかを見ていく。

Lakoff and Johnson (1999)は、THE LOCATION EVENT-STRUCTURE METAPHOR の下位メタファーとして、Changes Are Movements (Lakoff and Johnson 1999: 179)を挙げている。このメタファーの関与によって、移動に関することが推論によって状態の概念へと比喩的に写像される。この写像を、以下の様に説明している。

- (47) a. If something *moves from* Location A *to* Location B, it is first *in* Location A and later *in* Location B.
- b. If something *changes from* State A *to* State B, it is first *in* State A and later *in* State B.
- c. If something *moves from* Location A *to* Location B over a period of time, there is a point at which it is *between* Location A and Location B.
- d. If something *changes from* State A *to* State B over a period of time, there is point at which it is *between* State A and State B.

(Lakoff and Johnson 1999: 183-184)

すなわち、あるモノが場所 A から場所 B へ移動する場合、移動前には場所 A に存在し、移動後には場所 B に存在する。移動に関するこの概念が、あるモノが状態 A から状態 B に変化する場合、変化前には状態 A であり、変化後には状態 B であることへと比喩的に写像されている。また、あるモノが一定時間かけて場所 A から場所 B に移動する場合、あるモノが場所 A と場所 B の中間地点に存在することがある。この概念が、あるモノが一定時間かけて状態 A から状態 B へと変化する場合、状態 A と状態 B の中間地点的な状態が存在していることへと比喩的に写像される。これに関して、以下の例文を見てみる。

- (48) a. I *came out of* my depression.
- b. He *went crazy*.
- c. He *went over the edge*.
- d. She *entered* a state of euphoria.
- e. He *fell into* a depression.
- f. He *went deeper* into his depression.
- g. In the sun, the clothes *went from* wet *to* dry in an hour.

h. The clothes are *somewhere between* wet and dry.

(Lakoff and Johnson 1999: 183)

(48a-g)では、ある状態から別の状態への変化が、ある場所から別の場所への物理的な空間移動を表す移動動詞 *come, go, enter, fall* で表されている。(48h)では、衣服が濡れている状態と乾いている状態の中間地点にいることが *somewhere between A and B* の構文によって表されている。

物理的な空間移動には、場所の存在が前提となる。ある状態がある場所として捉えられる以上、その変化は移動として捉えられるのは極めて自然なことである。

### 3.7 まとめ

本節では、移動動詞から状態変化への拡張プロセスを概観してきた。まず初めに、場所の概念が状態の概念へと比喩的に写像するプロセスを見た。これは、ある状態がある場所と同じように内と外を分ける境界を持っていることを類似項目として認識し、起こるプロセスである。このプロセスは、ある状態を表す語の前に、ある場所に対する位置関係を表される語が用いられることから考えることができる。この写像のプロセスを、イメージスキーマを用いて表すと、以下の様になる。

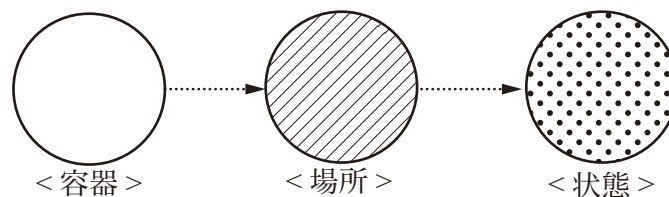


図 33

上の図は、容器・場所・状態の比喩的写像を表したものである。転線の矢印はメタファーが関与している認知プロセスを示している。これらの概念は、内側と外側を分ける境界を元に比喩的に写像されている。容器から場所へと写像される段階で、境界の物理的な要素は希薄化され、閉鎖的ではない空間に対しても、容器と同じ概念を用いることができる。このことは、場所から写像された状態にも当てはまる。

さらに、場所として認識される状態の変化は、移動の概念で表される。物理的な空

間移動は、基本的に二つの場所の存在を前提としている。ある場所から別の場所への移動が、ある状態から別の状態への変化に比喩的に写像されている。物理的な移動行為を反映するイメージスキーマは、以下の通りである。

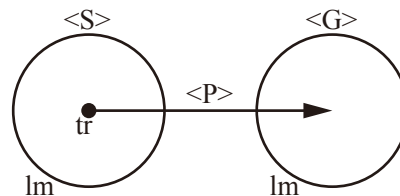


図 34

上の図における左右の円は、容器の概念から比喩的に写像された起点と着点を表したものである。状態変化を移動動詞で表す場合、これらの要素が状態へと写像される。

以上、移動動詞から状態変化への拡張プロセスを見てきた。メタファーの関与によって、ある状態はある場所に捉えられる。そして、ある状態から別の状態への変化は、ある場所から別の場所への移動へと比喩的に写像される。これが、*come/go* を含む移動動詞が状態変化を表す語として用いられるプロセスである。以下の章では、*come/go* の考察を試みる。

## 第4章 Come

本章では、移動を表す英語動詞の一つである **come** と、その意味拡張について考察を行う。本研究で考察の対象となる意味拡張は、「到達」、「出現」、「出自」、「主観的移動」、「状態変化」である。イメージスキーマの変化や、メタファーおよびメトニミーなどの認知プロセスがどのように意味拡張に関わっているかを考察するのが本研究の主な目的である。

第3章で言及したように、**come** は **go** と共に直示動詞と呼ばれる。直示動詞とは、移動の起点、あるいは着点が直示的中心となる移動行為を表す動詞である。**Come** の場合は、直示的中心を常に着点とする移動を表すことができる。これを **come** のプロトタイプの意味とすると、**come** による移動のイメージスキーマは以下のように図示できる。

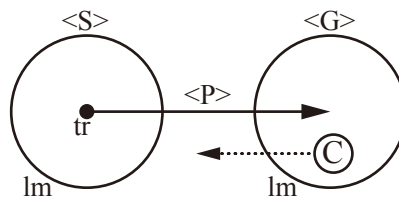


図 35

本研究における直示的中心は、話者である認知主体の視点が存在する場所である。上の図では、移動行為の着点を示す円の中に認知主体(C = conceptualizer)が物理的に存在し、着点から移動主体(tr = trajector)の移動を観察している。点線矢印は、観察行為を行う認知主体の視線を表している。認知主体の視点が置かれている場所が直示的中心となるのは、VISUAL FIELDS ARE CONTAINERS (Lakoff and Johnson 1980: 30)のメタファーが関与しているためである。このメタファーによって、認知主体の視界にモノが進入する移動は **come** で表現することができる。認知主体は、着点から移動行為を観察するために物理的に存在する必要はない。認知主体が存在しない場所であっても、視点を投影するために心理的なコピーを置くことができる。したがって、聞き手や話題の第三者が存在する場所に認知主体の視点を心理的に投影することによって、そこに認知主体が物理的に存在していなくてもそこを着点とする移動を **come** で表現することができる。

以下より、具体的な例を中心に **come** の意味拡張を考察していく。

#### 4.1 移動

本節では、**come** によって表現される物理的な空間移動に関する考察を行う。前節で述べたように、**come** による移動の着点は直示的中心である。すなわち、認知主体の視点が存在する場所が移動行為の着点となる。以下に例を挙げる。

(49) a. Darth Vader: He will *come* to me?

[映画 *Star Wars: Episode VI Return of the Jedi* <01:04:40>]

b. My son is *coming* home soon. (OALD)

上の例は、認知主体自身、あるいは認知主体が物理的に存在する場所への物理的な移動を表している。この場合、起点は背景化している。この移動行為に関して、以下のようなイメージスキーマの変化が見られる。

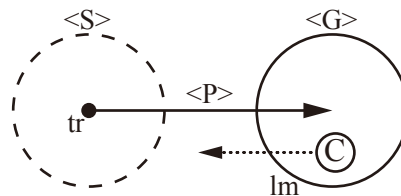


図 36

図 35 で示したイメージスキーマのうち、起点が背景化していることを、破線の円で表している。

**Come** を用いて移動行為を表す場合、着点の言語化は必要ではない場合がある。以下に、着点が背景化している **come** による移動の例と、対応するイメージスキーマを示す。

(50) a. Let me know when they *come*. (LDCE)

b. What time does the next delivery *come*? (G)



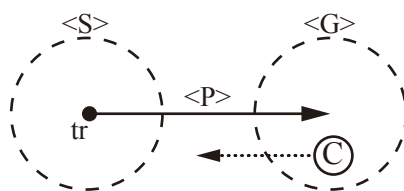


図 37

上のイメージスキーマでは、着点が背景化されていることを破線の円で示している。Fillmore (1972)の主張によれば、**come** は着点指向動詞であるため、着点は文脈上判断される。したがって、移動行為の着点の言及がない場合でも **come** を用いることが可能である。以下の文が容認不可であることが、**come** の着点が文脈から判断されていることを証明する。

(51) a. \*Where did he *come (to)*?

b. \*He *came (to)* somewhere.

(Fillmore 1972: 5)

さらに、以下のように認知主体や認知主体の存在する場所が着点となっていない移動も、**come** で表すことができる。

(52) a. David: They got to *come* to you, yeah?

[映画 *Seven* <01:27:18 >]

b. And then there was that night just before the murder when William *came* to him with his plan.

(BNC)

上記例での着点は、それぞれ聞き手と第三者である。認知主体がある領域に視点を投影する場合、その場所が直示的中心となる。そこを着点とする移動は、**come** が使用される。この場合、認知主体は物理的に着点に存在し着点から移動を観察する場合と、視点を投影するために心理的なコピーを設置する場合がある。着点に視点を投影する際の心理的な認知主体の存在は、次のように図示できる。

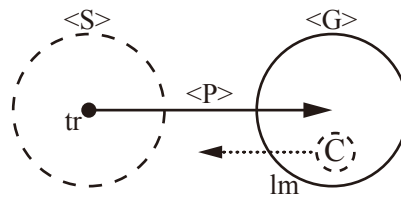


図 38

図 35 で示したイメージスキーマのうち、認知主体が視点を置くため心理的に存在していることを表すために破線の円で囲んだ C (= conceptualizer) で示している。

Come で表現できる移動は、認知主体とは別の移動主体が認知主体が物理的、ないしは心理的に存在している場所への移動だけではない。認知主体自身の移動も come を用いて表現することができる。以下にその例を挙げる。

- (53) a. I'll *come* to the party. (G)  
 b. Can I *come* too? (CCAD)  
 c. "Susan, are you ready?" "I'm *coming*." (W)

上で挙げた文は、認知主体が移動主体として移動を行う様子を表している。Come の移動の着点は、認知主体が視点を投影する直示的中心である。したがって、移動行為を行う物理的な認知主体は、移動行為の着点に視点を投影するために心理的な自分自身のコピーを置いている。この様子は、以下のようなイメージスキーマの変化で表すことができる<sup>11</sup>。

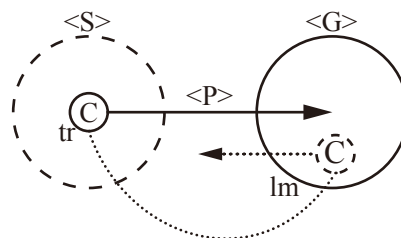


図 39

<sup>11</sup> なお、図 39 では着点が背景化される場合のイメージスキーマの変化は省略している。

上記の図では、物理的な認知主体の移動の着点に心理的な認知主体が存在している。物理的な認知主体と心理的な認知主体はそれぞれ実線の円と破線の円で表している。二つの認知主体を結ぶ点線は、それぞれが同一であることを示している。

以上、**come** による物理的な移動について考察を行った。**Come** で表現される移動行為の着点は、直示的中心である。直示的中心には認知主体の視点があり、移動主体が着点に進入する様子を観察することで **come** が用いられる。**Come** による移動では、移動主体が認知主体自身の場合や、認知主体が物理的に存在していない場所が着点に設定されている場合がある。この種の移動行為が **come** で表現される場合、視点の投影に変化が生じる。移動主体の移動による着点に認知主体が物理的に存在しない場合、あるいは、認知主体自身が移動主体になるために着点に認知主体が物理的に存在することが不可能な場合、認知主体は視点を投影するために自身の心理的なコピーを設置する。

## 4.2 出現

ここでは、出現を意味する **come** の考察を行う。以下に例を挙げる<sup>12</sup>。

- (54) a. A young boy *came* from behind the curtain. (P)  
b. The moon *came out from* behind the clouds. (R)  
c. The ship is *coming into* view. (Lakoff and Johnson 1980: 30)  
d. The castle *came* into view. (P)  
e. A shy and tentative smile *came* to the girl's face. (P)

これらの例にはそれぞれ **come** が用いられているが、主語で表された対象は、移動行為を行うというよりも、認知主体にとって認識可能になったことを表している。

なぜ認知主体にとって認識可能になったことが、**come** で表されるのだろうか。これには、**come** が直示性を持つことの動機付けとなっている、VISUAL FIELDS ARE CONTAINERS (Lakoff and Johnson 1980: 30)のメタファーが関与している。認知主体は、自

---

<sup>12</sup> 以下、例文における P, R, OALD はそれぞれ『プログレッシブ英和中辞典』、『ランダムハウス英和大辞典』, Oxford Advanced Learner's Dictionary の略称である。

身の視界を容器に比喩的に写像することができる。その容器は、さらに、領域へと写像される。したがって、認知主体の視界は認知主体が占有する領域と捉えられる。このメタファーによる拡張の結果、認知主体にとってある対象が観察可能になることが *come* で表現される。

それぞれの文を個別に見ていきたい。(54a, b)は、いずれも *from* の後に続いて起点が言語化されている。通常の移動を表す *come* で用いられる *from*+起点と異なる点は、*from* に後続する語が示す対象が、*come* の主語に示される対象と同時に観察できることにある。通常の移動行為を *come* で表現する場合、起点は認知主体の存在する領域から離れたところにある場合が多い。

- (55) a. He's *come* all the way from Tokyo. (OALD)  
b. We *came* to London from Rome. (R)

上の例では、起点と着点が離れた場所に存在している。起点と着点が離れた場所に存在している様子は、移動のイメージスキーマからも見てとれる。

一方、(54a, b)の例では出現の起点が認知主体の存在する領域内にあるか、物理的に観察可能であることが考えられる。この点において、出現は移動のプロセスが背景化されている。それ以上に、移動そのものが存在せず、起点と着点との間が圧縮されていると考えることもできる。

また、(54a, b)はいずれも起点が言語化された例である。(54a)のようなある対象の出現を表す場合、以下の様に起点を省略したり、*came out* と表現したりすると、出現の意味を持たなくなる。

- (56) a. \*A young boy *came*.  
b. \*A young boy *came out*.

一方、(54b)の場合は *from* 以下の起点を省略しても文は容認される。これは、天体としての月が出現する場所が一定であるため、起点の言語化の必要性がそれほど高くないからである。実際、起点の言及がない“The moon *came out*”という発言に対して“Where did it *come from*?”と質問するのは不自然に捉えられる。

ここまで、起点が *from* に続いて言及されている出現について考察してきた。ここまですでに分かったことは、通常の移動行為を表す際に言語化される起点と異なり、出現での起点は、認知主体と同じ領域内、もしくは認知主体の視界の範囲内に存在しているものである。また、起点の言及の必要性が場合によって異なることも分かった。ここまでの例では、人が出現する場合は起点の言及が必要であるが、月の出現の際には必ずしも重要ではない。これは、月が認識可能になる場所や状況が限定的であるためである。人、あるいはその他動物などが出現する際の起点は様々な場所が考えられるため、起点の言語化が必須になっている。

次に、(54c, d)を見ていきたい。これらの例には起点の言及はないが、共通して *view* が *into* に続く形で着点として言語化されている。認知主体への視界へある対象が出現することを、(54a, b)以上に明確に表していると言える。

この二つの例は、どちらも *S come into view* という形式を共有し、主語として選択された対象が認知主体の視界に現れることを示すが、それぞれの状況レベルの意味は異なる。(54c)は船が視界に入ってくるという表現である。認知主体は静止した状態で、動く船が視界に進入する様子を *come* を用いて表現している。一方で、(54d)で主語として現れている城は、先程の船とは違い動くことはできない。その結果、ここでは認知主体の移動行為の結果としてある城が視界に進入してきたことを表していると考えることができる。ここで話題にしている二つの例は、それぞれ状況レベルでの意味が異なっている。それにもかかわらず、*S come into view* という形式を共有している。「認知主体の視界に対象が進入すること」だけが *come into view* で表現され、視界の進入に至るプロセスが背景化されていると考える。

最後に、(54e)の例を考察したい。この例では起点の言及はない。また、この発言に関して主語で表された対象がどこから来たのかを尋ねるのは不自然である。着点は *to* の後に言語化されている。この例を、(54a-d)で示した出現と比較してみたい。

まずは主語の対象に着目する。(54a-c)で主語の対象になったものは、それ自体が何らかの動作を行うことができる。その動作の結果、認知主体の視界に現れたことが *come* を用いて表現された。(54d)は静止しているものが主語となった。この場合では、認知主体の移動行為の結果視界に進入してきたことが *come* で表現された。つまり、主語の対象、あるいは認知主体の何らかの行為によって認知主体の視界に進入したことが言語化されている。ここまでの主語の対象に関する共通点は、それぞれが境界を有

し、個として認識されることにある。しかし、ここで話題に挙げている *smile* は、それ自体の何らかの行為や認知主体の行為によって認識可能になるわけではなく、また、境界を持った個として捉えられない。笑顔は、表情筋の働きによる顔面の各部位の角度の変化によって生じる。また、笑顔を各部位は初めから顔面に存在するので、*to* を伴って顔が着点に設定されているのは興味深い。

以上のことから、(54e)の笑顔の出現は、他の出現とは大きく異なる性質を持っていることが分かる。この場合は、主語の対象が認知主体の視界に進入したというよりは、ある人物の顔を認知主体が笑顔として認識したことを *come* で表現している。

以上、移動を表す *come* から拡張した、出現という意味を考察してきた。認知主体にとって観察可能になることが *come* で表現される。これは、*come* が直示性を持つことの動機付けとなっている、VISUAL FIELDS ARE CONTAINERS (Lakoff and Johnson 1980: 30)のメタファーが関与している。認知主体は、自分自身の視界を容器に比喩的に写像することができる。容器の概念は、移動行為における領域へと写像される。認知主体の視界は、認知主体の占有する領域へと写像されるため、認知主体の視界への進入が認知主体が占有する領域への進入と捉えられることによって、物理的な移動を表す *come* が使用可能になる。

ある人物がカーテンの裏から現れたり、雲で隠れていた月が見える様になったりする様な、主語の対象そのものが全く見えなくなる状態から見える状態へ変化することだけが、出現の *come* ではない。ある人物の笑顔が観察可能になることも *come* を用いて表現することが可能である。笑顔の構成要素である顔面の各部位は、笑顔になる前でも観察可能である。すなわち、人物や月の出現の様に、認知主体にとって全く観察出来ない状態があったわけではない。それにも関わらず *come* を用いて出現の表現ができるのは、人物や月の様に笑顔を境界を有した個として捉え、それが観察可能になったことだけを焦点化して *come* を用いて言語化しているのだろう。

最後に、出現を表すイメージスキーマを以下に示したい。まずは、認知主体が領域内である対象を視認可能になる、(54 a, b)の場合を考えたい。ある領域から認知主体の占有する領域へ移動するというプロセスは存在しておらず、ある特定の出る（という風に認知主体が認識している）ことで認知主体の占有する領域、さらにそこで観察を行っている認知主体の視界に入ることが *come* で表現される場合は、以下の様なイメージスキーマを反映していると考えられる。

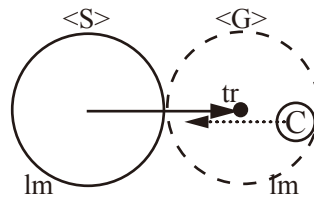


図 40

着点は認知主体が存在する領域であることが文脈から判断できるが、言及されていないため破線の円で示している。トラジェクターの何らかの行為（ここでは実線矢印で示している）によって認知主体の領域内に現れ、それを認知主体が観察している。

(54c, d)の場合は、以下の様なイメージスキーマが反映される。

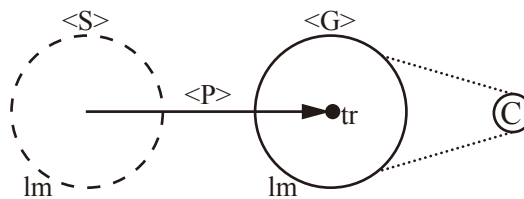


図 41

(54c, d)は come の着点として、into の後に view が続いている。これは、点線で表した認知主体のスコープ内にある視界が容器として比喩的に写像されることで生じる。スコープの先にある実線の円は、メタファーによって容器、容器から領域へと写像された視界を表している。

最後に、(54e)の場合を考えたい。

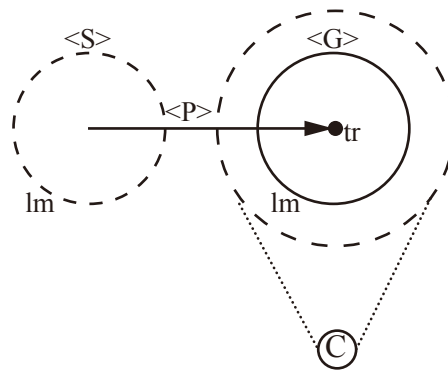


図 42

(54e)は、認知主体の視界に存在するモノに、何かが現れて見える現象である。この場合、認知主体の視界は言語化されていないため、破線の円で表している。その中にある実線の円が、主語の対象となるものが現れる場所である。ここでは、笑顔が例に挙げられているため、ある領域から移動してきたり、何かの裏から出てきたりして観察可能になったわけではない。破線で示された左の円は、笑顔として認識できる前の顔と考えても良いだろう。辞書では「出現」の一例として挙げられているが、ある場所における変化が認識可能になったことを **come** で表しているため、ある意味で状態変化であると言える。

以上、出現を表す **come** の用法について考察してきた。イメージスキーマに様々なバリエーションが存在しているが、**come** が用いられている以上、基本的なイメージスキーマの要素は受け継がれている。すなわち、起点と着点が出現においても存在し、**from** や **into** などの前置詞を伴って言語化されている。出現を表す **come** に関して共通することは、認知主体の視界に、ある対象が観察可能になることである。これは、**come** が直示性を有する動機付けとなった、着点に認知主体の視点が存在していることから派生している。つまり、**come** を用いてモノの出現を表すことができるのは、**come** が直示動詞であり、その移動が直示的中心、つまり認知主体の視点が存在する領域への移動を表すためである。

### 4.3 出自

続いて、出自を表す **come** の用法について考察を行いたい。



(57) a. She comes from London.

b. He comes from a family of actors.

(OALD)

上の例に挙げたような用法は、主語となる対象が、ある領域から別の領域へと移動することを表す用法ではない。例えば、(57a)はある人物がロンドンの出身であることを表している。この文は *She is from London* とパラフレーズが可能である。この文に *came* を用いた場合、主語の対象がロンドンから認知主体の存在する領域まで実際に移動してきたという意味になる。したがって、現在形の *come* と *from* 起点を組み合わせることによって、ある人物の出自を表現することができる。From を伴って起点として表現できるのは、実際の移動でも起点になりうる領域だけではない。(57b)ではある人物が役者一家の出であることを表している。

では、移動を伴わないこの用法で *come* が用いられる原因について探りたい。

まず、*come* が用いられる場合、主語となる対象が認知主体の視点の存在するところにいるというのが前提である。認知主体は、実際に観察できる人物について *come* を用いて述べている。また、実際の移動のように二つの領域が関係しているのも、*come* が使われる要因となっているだろう。移動行為に起点と着点が存在するように、出自を述べるこの用法にも、主語の対象が元々いた領域と、今いる領域の二つが存在している。また、(57b)からも分かるように、起点として言語化されるモノは、物理的な場所でもなくとも良い。

この現象を反映するイメージスキーマの考察を行う。

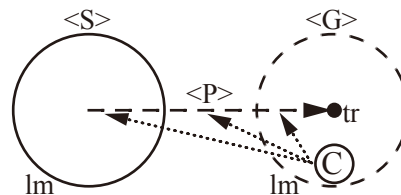


図 43

出自を表す用法のため、起点が言語化されるため、それが前景化していることを左側の円が実践になっていることで示している。一方、着点が認知主体の存在する領域、あるいは認知主体の視点が存在する領域であることは文脈上判断できるが、言語化さ

れていないため背景化していることを破線の円で表している。この用法には主語となる対象の物理的な移動行為は言語化されていないため、経路と移動行為を表す矢印は破線で表している。認知主体は、主語となる対象が元々存在していた領域と、今現在いる領域が離れていることに注目し、その領域間を心理的な視線で観察している。その観察の終点が認知主体の存在する領域であるため、**come** が使用されている。観察行為のための視線移動は、主語の対象の移動であるかのように言語化されている。これは、実際の移動ではなく認知主体の視線の移動が主語の対象の移動と捉えられた到達の一部の用法と類似している。

#### 4.4 主観的移動

本節では、伸びのあるモノがある一定の点まで到達していることを述べる場合の *come* について考察する。以下にその一例を挙げる。

- (58) a. My son *comes* (up) to my shoulder. (G)  
b. His fine blond hair *came* down almost to his shoulders. (P)

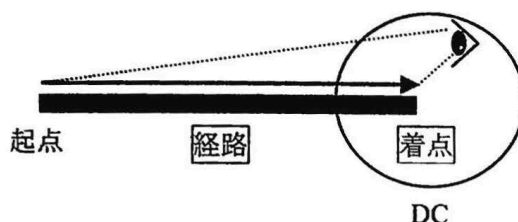
これらの例は、my son, あるいは his fine blond hair の身長、あるいは長さがある一定の点(i.e., my shoulder, his shoulders)まで達していることを表している。My son, his blond hair は移動動詞 *come* の主語として言語化されているが、それら自身が移動しているわけではない。山添(2004)は、この用法を「主観的移動」として、物理的移動による「到達」から拡張した物であると述べている。

この用法について、松本(1997)と山添(2004)の考察を少し確認したい。

松本(1997)は、この何らかの移動を、以下の3つに分類して考察している。

- (59) a. The road went up the hill as we proceeded. 特定の具体物の現実の移動 (現実移動)  
b. The highway enters California there. 任意の具体物の仮想の移動 (仮想移動)  
c. The mountain range goes from Canada to Mexico. 視点の移動 (視点移動)  
(松本 1997: 210)

(59a)は、例えば自動車を運転していた人物が実際に道路を走っていた時のことを描写する場合である。実際に移動したのは、具体的な移動主体であるが、主語で表される語が **the road** へと変化している。(59b)ではハイウェイに関する一般的な事実を述べているので、そこを走る乗り物の具体的な種類は問題としていない。(59c)は、「そもそも移動のルートではなく、具体物の移動を想定しにくい山脈」(松本 1997:210)のある一点と別の一点を追う視点の移動を表している。また、山添(2004)はこの主観的移動において移動しているものは、結局は「話者の視線の先端」(山添 2004:27)であると主張しており、以下の様なイメージスキーマを反映していると述べている。



(山添 2004: 25)

図 44

それでは、この移動に関する考察を行っていく。まずは以下の例をみたい。

- (60) a. The path *comes* straight down. (P)  
b. The highway *comes into* town via University Avenue. (P)

これらの例は、一定の伸びがある形状のものが認知主体の占有する領域まで達していることを表す。この現象が **come** を用いて表現されるのも、認知主体の視点が存在することが関係しているだろう。(60a)では、伸びのあるものの先端が、認知主体にとって観察可能になることで言語化される。ある意味で、出現の **come** と似た表現である。(60b)では、**into** に続く形で着点が言語化されている。両者の違いは、認知主体の視点がある領域が言語化されるか否かにある。では、イメージスキーマでその違いを描写してみたい。

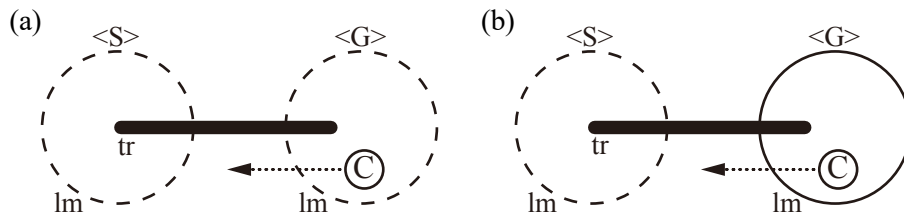


図 45

ある領域から、認知主体の視界まで伸びているモノを太い実線の棒で示している。どこから伸びているかは言語化されていないため、起点にあたる円(S)は破線で示している。図 45(a)は、着点は文脈から判断できるものの、言語化されていないため破線で示している。ここでは、あるものの先端が認知主体にとって観察可能になっていることを表している。図 45(b)は、認知主体の占有する領域が *into* の後に続いて着点として言語化されているため、実線の円で表している。

さらに、以下の例を見てみたい。

- (61) a. The water *came* to my knees. (LDCE)  
b. My son *comes* (up) to my shoulder. (G)

上の文は、認知主体の視界にある、認知主体の体の一部まで、伸びのある対象が達していることを表している。前者では水位が認知主体の膝にまで、後者では認知主体の息子の身長が認知主体の肩にまで到達していることを表している。ある領域から、認知主体の視点のある領域まで達している対象を観察している(60)および図 45 とは少し異なる。前者の場合は、観察している対象の一部は、認知主体の存在している領域とは別の領域にあったが、ここで取り上げている例では、認知主体も観察の対象も同じ領域内に存在している。また、図 45 のスキーマを反映する事態は、認知主体の視界にある対象が進入しているように見えることで *come* で表現されていた。それに対し、ここでは認知主体の視界に存在するモノまで対象が伸びていることが表現されている。この言語表現を反映するイメージスキーマは、以下のようなものになる。

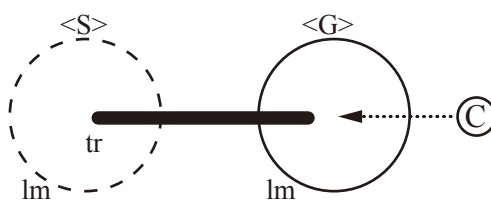


図 46

スキーマ右の円は、着点として言語化されている要素である。そのため、実線の円で表している。この着点は、認知主体の領域ではなく、点線矢印で示した認知主体(C)の視線の先にある対象(i.e., my knees, my shoulder)である。この対象までの、上方向の伸びがここでは言語化されている。認知主体の視界にある対象へ何かが登場する際の *come* と比較的似ている。

- (62) a. His fine blond hair *came down* almost to his shoulders. (P)  
b. Her socks *came to* just below her knees. (W)

上の例は、ある対象が、一定の場所まで伸びていることを *come* で表している文である。前者は下方向、後者は上方向へ伸びていることが、それぞれの主語となる *hair* や *socks* の背景的知識や、前置詞 *down* などから読み取れる。認知主体の視界に存在する対象の一部に、あるモノが伸びていることを表す。先程の二つの例は、伸びのある対象の先端が認知主体にとって観察可能であることが *come* で表されたが、今回の例は、伸びのある対象の全体像が認知主体にとって観察可能である。この点から、出現の用法と類似している前者 2 例とは多少異なることがわかる。

この例において、認知主体は、視界に存在する対象上にある伸びのあるモノを、対象のある一点から別の一点まで観察している。主語となる対象(i.e., *hair*, *socks*)はここでは移動主体ではなく静的なものであるため、この観察行為、すなわち、視線の移動が *come* として表現されている。本節の最初の方で紹介した松本(1997)の視線移動はこの例に当てはまるだろう。認知主体による観察が伸びのある対象に沿って移動するため、その対象がメトニミー的に移動の主語として言語化されている。

では、なぜここで *come* が使用されるか少し考えてみたい。物理的な空間移動や、今までの例では、*come* は認知主体の視点が存在するところを着点とする移動であった。

ここでは、観察行為が終了する点、すなわち his shoulders や her knees などが最終的に認知主体の視点が存在する場所となるため、come が使われる。また、go を使用する場合を考えてみたい。後の節で詳しく考察するが、go は認知主体の視点が存在する場所からの離脱を表すため、伸びのある対象を観察する場合に go を用いると、(59c)のように from を用いて起点を言語化する必要性が生じる。しかし、ここで主語の対象となっている髪や靴下がどこから伸びているかは背景的な知識から判断可能であるため、わざわざ言語化する必要がないことから go ではなく come が選択されているという考え方もできる。

最後に、この用法の come に反映されるイメージスキーマを以下に図示する。

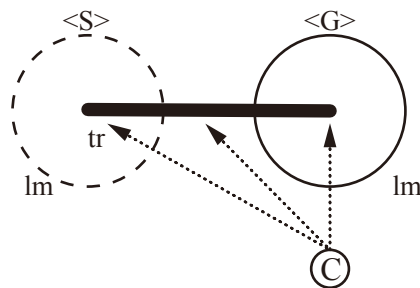


図 47

認知主体の視界にある対象上にある伸びのある対象を観察している。点線の矢印は、認知主体の観察、すなわち視線を表している。これは、時間の流れに伴って位置を変える。この視線移動が come で表現されている。興味深い点は、この視線の移動が視線そのものを主語にしている移動ではなく、視線が沿って移動している伸びのある対象を主語としていることである。

以上、伸びのある対象が、ある一点まで「到達」していることを表す come の用法を考察した。その結果、ある辞書では一括りに「到達」とされているが、実際には大きく分けて二つのタイプがあることがわかった。一つは、伸びのある対象の先端が、認知主体にとって観察可能になることで come が使用されるタイプである。これは、図 45 図 46 で示している。認知主体は、ある対象の一部である先端を観察して全体を表す語を用いて表現しているため、メトニミーが関与している。もう一つのタイプは、対象全体が見えている場合で、対象全体を観察した結果、ある一定の場所まで伸びていることを come で表すタイプである。この場合、認知主体の観察行為に伴う視線の移

動と近接関係にある伸びのある対象がメトニミー的に **come** の主語となっている。このことから、意味拡張のネットワークを考察するとした場合、前者の二つは出現から拡張した例、後者は物理的な移動の **come** から、視線移動が物理的な移動へとメタファー写像され、かつ、メトニミーが関与することによって視線の移動が伸びのある対象の移動であると表現された例であると言える。

#### 4.5 状態変化

前節までは、**come** による物理的な空間移動とその意味拡張に関して考察を行ってきた。本節では、**come** を用いてある状態から別の状態への変化を表す拡張に関する考察を行う。**Come** で表現される状態変化による結果状態は、通例好ましいもの、あるいは正常な状態への変化とされる。Clark (1974: 330)は、繰り返し生じる変化と一度しか生じない変化について、**come** による状態変化は常に正常な状態であると下に挙げる図をもとに主張している。

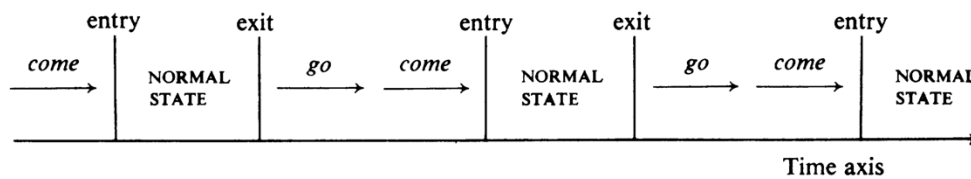


図 48

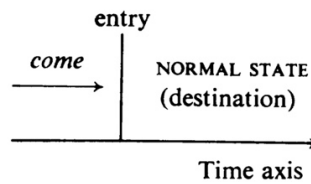


図 49

本節では **come** による状態変化の結果状態と、状態変化へと意味拡張する際の認知プロセスに焦点を当てて考察する。本節で研究の対象とする状態変化は、**come to/into NP**, **come to V**, **come + adj** で表現されるものとする。

#### 4.5.1 Come to/into NP

初めに、come to/into NP を用いた用法を考察の対象とする。この用法は、4.1 節で挙げた物理的な空間移動の比喩的拡張でもある。以下にいくつか例を挙げる。

- (63) a. *come to blows*  
b. *come to power*  
c. *come into blossom* [flower]  
d. *come into effect*  
e. *come to the job with a lot of good qualifications*  
f. I don't know what things are *coming to*.  
g. We worry about what this country is *coming to*. (G)

上の例のうち(63a-e)は、それぞれ喧嘩を始める、花を咲かせる、効果が発動する、仕事に就くことを意味する。程度の違いはあるが、いずれもある状態から別の状態へと変化する用法である。(63f, g)は今後の事態、あるいは国家がどう変化していくのかを案じている文である。

この種の意味拡張では、着点となる場所が、抽象的な事物へと比喩的に写像されるプロセスが存在する。ここでは、争っている状態や権力を持っている状態などが物理的な場所の概念として把握されている。この認知プロセスには、第3章で挙げた *States Are Locations* (Lakoff and Johnson 1999: 179)が関与している。以下の文から、ある状態がある場所へと比喩的に写像されている様子が理解できる。

- (64) a. Couple's chat ended *in blows*.  
b. Labour won the 1964 election and was *in power* for 11 of the next 15 years.  
c. Many of the trees, chestnuts, thorns, an occasional lilac, were already *in blossom* and the river glittered *in the sunlight*.  
d. A curfew imposed by the government is still *in effect* ... .  
e. Erm, now Barbara, I know you haven't been *in the job* as long as the other two, but er, really you've got to do better than this I'm afraid.

(BNC)



上例では、(63a-e)の文で移動行為の着点となっていた要素の前に前置詞 *in* が共通して設置されている。このことから、ある状態が、容器から比喩的に写像される場所の概念と同様に捉えられていることがわかる。

この状態変化による結果状態に着目する。「花が咲く」や「良い条件の仕事につく」などの状態変化はある人物にとって好ましい、あるいは正常な状態への変化と言える。では、「喧嘩になる」、「権力を握る」、「効果が発動する」状態への変化はどうだろうか。喧嘩になることは好ましい状態とは言えず、権力を握った人物が独裁政治を行ったり、発動した効果が国民や市民にとって不利な法律になったりするケースもある。(63f, g)の文においてもこの先の事態や国が悪い状態へと変化する可能性も考えられる。

このように、*come to/into NP* で表される状態変化の結果状態は、常に認知主体にとって好ましいものではない。

#### 4.5.2 Come to V

続いて、*come* に *to* 不定詞が続く場合の状態変化について考察する。この種の意味拡張について、*Practical English Usage 4* (Swan 2017) (以下、PEU4) では以下のように説明している。

(65) *Come + infinitive* can be used to talk about changes in mental state or attitude.

*I slowly **came to realise** that she knew what she was doing.*

*You will **come to regret** your decision.*

(PEU4: 394)

*Come to V* は、心理状態の変化を表す用法であることが述べられている。さらに例を以下に挙げる。

(66) a. How did you *come to be suspected*?

b. I grew to like him as I *came to know* him better. (G)

その他、*know, realize, understand, think, believe, love, like, hate* などの動詞がジーニアス

英和辞典に挙げられている。

PEU4 による記述と、辞書の例から、心理的な状態を表す動詞が多い。また、*love* や *like* など好意的な意味を持つ動詞の他に、*hate* といった好意的ではない動詞の使用も見られる。さらに、*know* や *realize* など、好意的か好意的ではないかのいずれかに定義するのが難しい動詞の使用も考えられる。このことから、*come to V* は正常、あるいは好ましい状態への状態変化ではないことがわかる。

話者である認知主体の存在する領域が、認知主体の状態へと拡張し、そこへの移動が *come* で表現される。(66b)を例にすると、文中の状態(i.e. *know*)へ変化したことは、認知主体が発話時または文が示す時に存在している場所への移動と捉えられ、*came* が使用されている。この場合、その状態が好ましいか好ましくないかという側面は問題にされない。また、認知主体は自分の存在しない領域へ自身のコピーを心理的に置くことによってその領域への移動を *come* で表せるように、認知主体ではない人物の状態も(66a)のように *come* で表現することが出来る。

#### 4.5.3 Come + Adj

最後に、*come* の後に形容詞が来る形の状態変化について考察する。

(67) a. His dream *came* true.

b. Keep trying. It will *come* good eventually.

c. My bow tie *came* undone. (G)

上記の他に、ジーニアス英和辞典第5版は、*go + Adj* との比較も記載している。

(68) a. *go*/\**come* bad {rusty/wild/mad/wrong}

b. *come*/\**go* undone {true/alive/unstuck/close/good/loose} (G)

*Go* を用いた状態変化の結果、正常ではない状態になり、*come* で表現される状態変化は基本的に正常な状態への変化を表すことが上記の例からわかる。

しかし、*come + Adj* で表現される変化の結果状態が、必ずしも正常な状態と言える

わけではない。(67c)の例では蝶ネクタイがほどけたことを意味する。(68b)も *true, alive, good* 以外の形容詞は、正常な状態であると言えるだろうか。また、*come true* を伴う表現を用いた、以下のような文も可能である。

(69) Galway's worst economic nightmare *came true* when US computer group Digital decided to close its manufacturing plant in this thriving city on Ireland's Atlantic coast.

(BNC)

この例では、最悪の経済的悪夢が実現したと表現している。以上のことから、*come + Adj* で表現される状態変化は、ある程度は *go + Adj* と対照的な部分もあるが、いくつかの側面で、独自の概念構造を有していることが考えられる。

#### 4.5.4 Come による結果状態

それでは、*come* による結果状態について考察を行う。上で見てきたように、*come* によって表現される状態変化の結果、常に正常な状態になるとは限らない。この件に関して、上野(1995)は、*come* の性質を「分離する→存在するようになる→独立した存在としてとらえられる」(上野 1995: 199) と考察している。この考えをもとにすると、*come* を用いた状態変化は、後述する *go* のそれと対照的に正常な状態への変化を表す場合と、状態変化の結果、変化そのものや変化を受けたモノが認知主体にとって観察可能になるということが予測できる。

(67a)と(69)の例から考えると、実現したものがそれぞれ好ましいものと好ましくないものであるが、実現した結果、話者に見えるようになったという変化を表している。そのため、二つの例は矛盾するものではなく、同じ概念構造を有した表現であると言える。以下にこの考えの図示を試みる。

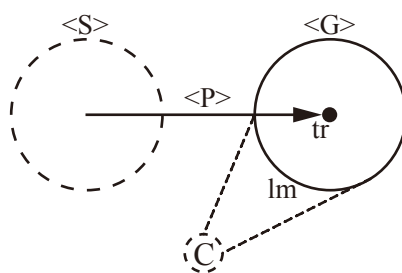


図 50

上の図は、あるモノ(tr)が状態変化を経た結果、話者の目に見えるようになったことを表している。実線の円で囲まれた認知主体(C)から伸びる破線は、視線の範囲を表している。起点と移動は背景化しているため点線で表している。話者の目に見えるようになることが *come* で表されるのは、VISUAL FIELDS ARE CONTAINERS (Lakoff and Johnson 1980: 30)のメタファーが関与していると考えられる。以下の例からわかるように、話者は自分の視野を直示的中心領域に写像する。

#### (70) VISUAL FIELDS ARE CONTAINERS

a. The ship is *coming into view*.

b. I *have him in sight*.

c. He's *out of sight* now.

(Lakoff and Johnson 1980: 30)

以上のように、*come* によって表現される状態変化は、*go* を用いて表現する状態変化が正常でない状態への変化を表すのと対照的に、正常である状態への変化を表現することができる。しかし、*come* は *go* との対照性を見せない側面も持つ。我々の常識に照らし合わせると、必ずしも正常、あるいは好ましい状態へ変化するだけではなく、正常ではない、好ましくないと解釈できる状態への変化も *come* で表現できる。結果状態が好ましい状態でも好ましくない状態でも、変化の結果話者の目に見える状態になった場合 *come* を使って表現することが出来る。

#### 4.6 まとめ

本章では、英語移動動詞の一つである *come* について、イメージスキーマやメタファーなどの理論を用いて考察を行った。*Come* の基本的な意味は、認知主体の直示的中心

を着点とした移動である。直示的中心は、認知主体の視点が存在する場所である。認知主体が物理的に移動行為の着点に存在する場合、着点に進入する移動を物理的に観察する。この観察される移動が、**come** によって表現される。認知主体が物理的に着点に存在しない場合もある。認知主体自身が移動主体となって移動する場合や、話題の中心となっている人物が認知主体の存在しない場所へと移動する場合がそれに当たる。この場合、認知主体は自分自身のコピーを心理的に着点に設置することによって視点を投影する。投影された認知主体の視点がある場所への移動が **come** によって表現される。したがって、認知主体の存在が物理的であっても心理的な場合でも視点が存在する領域が認知主体の直示的中心となる。これには、**VISUAL FIELDS ARE CONTAINERS (Lakoff and Johnson 1980: 30)**のメタファーが関与している。認知主体の視界は容器へと比喩的に写像され、その容器へと進入する行為は認知主体の領域へと進入する行為として解釈される。**Come** の場合では、認知主体が物理的に存在しない場所への移動も直示的中心となり得るため、このメタファーでは視点の投影の際に認知主体が物理的に存在している必要はない。

本章で考察の対象とした意味拡張は、「移動」、「出現」、「出自」、「主観的移動」、「状態変化」である。そのうち、状態変化以外は認知主体による物理的な観察行為が存在する。それらの意味拡張に対して、イメージスキーマの変化を中心に考察を行った。状態変化に関しては、メタファーの関与が見られた。ある状態は、ある場所として捉えられる、**States Are Locations (Lakoff and Johnson 1999: 179)**の関与によって、**come** による移動行為の着点が結果状態となる。状態変化は、従来の研究では正常、あるいは好ましい状態への変化として考えられていたが、実際には認知主体にとって好ましくない状態や、どちらともつかない状態への変化も見られる。好ましい状態への変化の場合、認知主体の直示的中心が正常な状態へと比喩的に写像されている。それ以外の状態への変化の場合、**come** による移動の結果生じる、認知主体にとって観察可能になるという側面が比喩的写像のターゲットとなっている。結果状態を認知主体が観察できることが、**come** による状態変化へと比喩的に写像されている。観察可能な結果については、常に正常な状態であることは絶対条件ではない。

## 第5章 Go

本章では、移動を表す英語動詞のうち、goに関する考察を行う。第3章で述べたように、goはcomeと同じく直示動詞である。Goの場合、直示的中心から離れる移動をプロトタイプとしている。このプロトタイプの意味を反映するイメージスキーマは、以下の通りである。

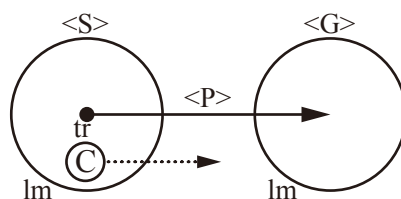


図 51

本研究では、直示的中心を次のように定義している。すなわち、「認知主体の視点が存在する場所」である。上の図では、移動の起点を表す円に認知主体(C = conceptualizer)が物理的に存在し、着点の方へ視点を向けている。なお、認知主体は視点を投影するためにある領域に物理的に存在する必要はない。後述するように、認知主体は心理的な自身のコピーを置くことでそこから視点を投影することができる。

本章では、OEDによるgoの定義をもとに、goの基本的な意味拡張を3種類挙げる。本研究の狙いは、それぞれの定義に物理的な空間移動を表す際のイメージスキーマの変化と認知主体の存在、抽象的な意味へと拡張する際の認知プロセスを考察する点にある。

### 5.1 OEDによる定義

本章では、OEDによる定義をもとにgoの考察を行う。この節では、その定義を確認する。

#### (71) OEDによるgoの定義

Go is the most general verb of motion in English, used to express literal or figurative movement

(i) irrespective of the point of departure or destination, (ii) away from a place, person, or thing,

or (iii) towards a place, person, or thing, or in a particular direction. (OED)

この定義によれば、go は(i)起点あるいは着点に関わらない移動、(ii)ある場所、人物、モノから離れる移動、(iii)ある場所、人物、モノ、あるいは特定の方向へ向かう移動を表す。本研究では、これらの意味拡張を**経路移動**、**離脱移動**、**着点移動**と呼ぶ。この意味拡張には、認知主体によるイメージスキーマの変換が関与している。例えば、起点あるいは着点に関わらない移動の場合、それらの要素は背景化され、移動行為だけが前景化される。また、移動主体や起点・着点として言語化される要素は物理的なものであるとは限らない。その際に関わる認知プロセスも、本章での考察の対象となる。

## 5.2. 経路移動

本節では、経路移動に関する考察を行う。OED の定義によると、起点あるいは着点に関わらない移動であることから、イメージスキーマ上の起点と着点は前景化しないことが予測される。また、その結果、起点と着点が言語化されない。以下に例を挙げる<sup>13</sup>。

(72) a. He's *going* too fast. (OALD)

b. The car was *going* much too fast. (LDCE)

上の文では、移動主体の起点と着点に関わらず、移動だけが表現されている。二つの文に共通して、移動の様態を表す副詞 *fast* が共起している。この表現の背景には、イメージスキーマに以下のような変化があることが予測される。

---

<sup>13</sup> 以下例文における OALD, CALD, LDCE, G, W は、それぞれ Oxford Advanced Learner's Dictionary, Collins Cobuild Advanced Learner's Dictionary, Longman Dictionary of Contemporary English, ジーニアス英和辞典第 5 版、ウィズダム英和辞典第 4 版の略称である。

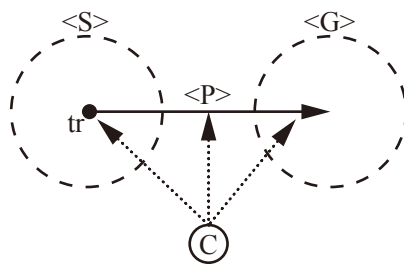


図 52

移動のイメージスキーマにおける起点と着点が言語化されないため、それらを示す円が背景化されている様子を破線で示している。また、背景化され言語化されないため、ランドマークとして認識されない。Go という移動を表す動詞が使われていること、移動行為を行う移動主体が言語化されていることから、黒丸で示したトラジェクターと経路・移動を表す実線矢印が相対的に際立っている。また、この事態を言語化する認知主体(C)は、起点には存在せず、俯瞰的に移動行為だけを観察している。認知主体による移動行為の観察は点線矢印で示している。

この種の意味拡張において、以下のように経路が言語化される場合もある。

- (73) a. We *went* a different way from usual that day. (LDCE)  
 b. According to them she ... had *gone* the usual way home. (BNC)  
 c. He'd have *gone* a different route, they could have gone to see him after. (BNC)

この文から、起点と着点が背景化される際には、移動行為だけではなく経路そのものが前景化することがわかる。

また、さらに、移動行為の経路ではなく、移動距離が言語化される場合もある。以下にその例を挙げる。

- (74) a. We had *gone* about fifty miles when the car broke down. (OALD)  
 b. It took us an hour to *go* three miles. (CCAD)  
 c. It took us over an hour to *go* ten miles. (LDCE)

上の例では、go の後に距離を表す句が続いている。



このように、起点と着点に関わらない移動では、単に起点と着点が背景化され移動行為が際立つのではなく、経路そのものが前景化され言語化する場合がある。そのため、このレベルの移動では、起点及び着点の背景化という認知プロセスに加えて、移動行為と経路の前景化・背景化の認知プロセスが関わっていることが考えられる。このプロセスは以下のように図示できる。

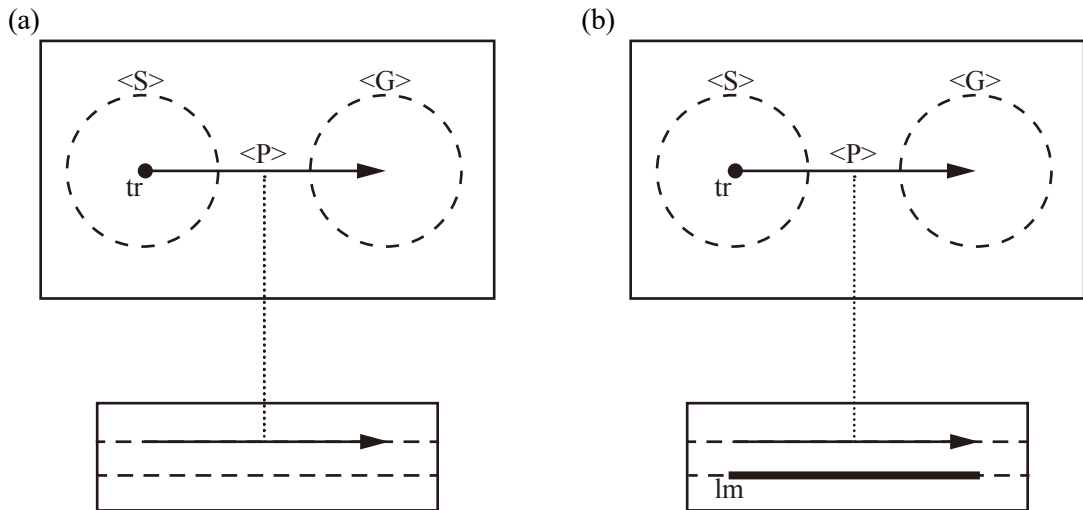


図 53

上の図は、起点と着点が背景化されている移動のイメージスキーマにおいて、移動行為と経路に関わる認知プロセスを表している。図 53a 下部の実線長方形で囲まれた実線矢印は移動行為を表している。実線矢印の左右に伸びる破線は、ある文で採用されている go で示される移動行為のうち、背景化されて言語化していないものを指している。上下二つの実線矢印を繋ぐ点線は、それぞれが同一の移動行為であることを示している。実線矢印の下に破線は、移動行為が行われている経路を示している。この場合、経路は背景化されているため、言語化されない。上で挙げた例文(72a, b)がこのイメージスキーマを反映している。図 53b における実線矢印の下にある濃い実線は、移動の経路のうち、言語化されている部分が前景化していることを表している。移動行為における経路が前景化した結果、言語化される。そのため、経路はランドマークとして認識される。矢印は移動行為を表すため、go が使われている以上は背景化されることはない。この図は、(73)及び(74a-c)に相当する。前景化された経路は経路そのものが言語化される場合と、経路の距離が言語化される場合がある。

以上、物理的な移動を伴う経路移動について考察を行ってきた。この意味拡張では、単に起点と着点のイメージスキーマが背景化するだけでなく、経路が前景化して言語化する例がある。Go を移動行為を表す動詞として使用している段階で移動行為自体は前景化しているが、それが伴う経路も抽象的な形(way, route)で言語化される。また、経路そのものではなく距離が言語化される場合もある。次節では、この拡張において物理的な空間移動を伴わない例について考察を行う。

### 5.2.1 比喩的拡張

この節では、起点と着点が背景化される表現のうち、物理的な空間移動を伴わないケースについて考察を行う。以下にいくつか例を挙げる。

(75) a. 'How did the interview go?' 'It went well, thank you.' (OALD)

b. Everything's going fine at the moment. (LDCE)

これらの文の主語に選択されている the interview, everything はいずれも抽象的なものであり、物理的な移動を行うことはない。本節では、起点と着点が背景化されている go の表現のうち、この種の抽象的な対象が主語となっている文に関して考察を行う。

上の例について、まず意味の解釈から行う。(75a)は面接の進捗を聞いて、上手くいったと返す会話。(75b)は現在のところ全て滞りなくいっていることを表す。いずれの例も、物理的な移動主体がある場所から別の場所へと物理的な移動をしているわけではない。

まず、抽象的な概念が移動主体として主語に選ばれていることに関しては、メタファーが関与していると思われるが、本研究は起点・経路・着点に重きを置いていることから、今回は考察の対象としない。

これらの意味拡張では、go はあるものの進捗状況について言及している。面接を始め、ある出来事には開始が存在し、時間の経過で様々な過程を経て終了する。これを図式化すると、以下のようになるだろう。

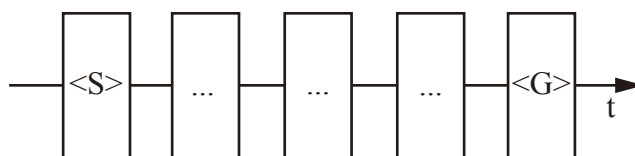


図 54

時間の経過を表す実線の矢印(t)の上には、あるイベントの各プロセスを表す長方形が並んでいる。プロセスの開始(S = source)と終了(G = goal)がその両極端に存在している。このように、あるイベントは時間の流れに沿って開始と終了があるものと考えられる。この様子が、起点と着点をもつ移動の概念へと比喩的に写像される。イベントの開始が起点、終了が着点として比喩的に写像されていることは、以下の例からも理解できる。

- (76) a. Also under the bill, all secondary school pupils will in future be eligible to participate in work experience schemes *from* the beginning of the summer term.
- b. A good deal of discussion *towards* the end of the meeting turned around the University's interest in setting up an alumni society.

上の文では、the beginning, the end の前に前置詞 from, towards が用いられている。このことから、イベントの開始と終了は移動の起点・着点の要素を持つことができることがわかる。従って、イベントの進捗状況を述べる際に移動動詞が用いられるのは自然なことであると判断できる。この意味拡張において興味深いのは、イベントを時間の流れに沿って経験する人物ではなく、イベント自体が主語として選択される点にある。

この種の意味拡張では、認知主体はイベントの開始からその過程、あるいは開始・過程・終了の様子を心理的な視線移動で観察する。このイベントの様子を観察する心理的な視線の移動が、go によって表現されている。この意味拡張は、以下のように図示できる。

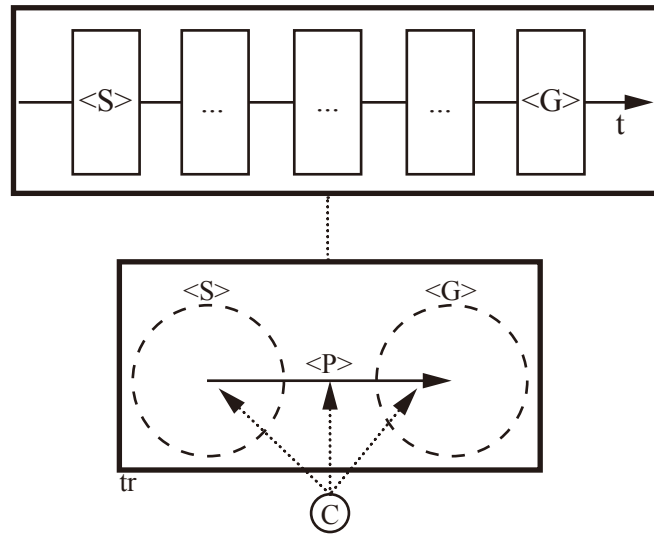


図 55

図上部の長方形で囲まれている図は、図 54 で示したイベントのスキーマである。このスキーマは、図下部の長方形で囲まれた移動のイメージスキーマと同一視される。このプロセスは、二つのスキーマを結ぶ点線で示している。移動のイメージスキーマへと比喩的に写像された後は、起点と着点が言語化されていないため、スキーマ上のそれらの要素は背景化している。この背景化は、二つの破線の円で示している。また、物理的な移動を行う移動主体が存在しないことから、移動のイメージスキーマ上に存在した黒丸は除外している。ここでは、イベントの一部始終ないしは途中経過の進捗状況が述べられている。この場合、認知主体はイベントの開始から終了まで、あるいは途中の様子を心理的な視線の移動で観察している。この種の意味拡張で移動を行なっているのは、この視線である。この視線の時間経過による位置の違いは点線の矢印で示している。また、視線移動の軌跡を実線の矢印で示している。この意味拡張の場合、あるイベントの開始・経過・終了を観察する視線移動そのものではなく、視線移動が行われるイベントが言語化されている。従って、この意味拡張では近接関係によるメトニミーが関与していることがわかる。この点は、後述する主観的移動と類似している。

以上、起点と着点に関わらない移動から比喩的に拡張する例を考察した。この拡張では、開始・経過・終了を持つあるイベントが、起点・経路・着点を有する移動に比喩的に写像されることがわかった。この拡張は、メタファーによるものである。また、開始から終了までを観察する心理的な視線の移動が、イベントによる移動行為で言語

化されている。これにはメトニミーが関与している。このように、物理的な空間移動には、メタファーやメトニミーの関与によって比喩的に拡張することがわかった。以下より、OED の定義による意味拡張をさらに考察する。

### 5.3 離脱移動

OED は go の定義の一つとして、ある場所、人物、モノから離れる移動を挙げている。本研究ではこの意味拡張を離脱移動として、本節で考察を行う。

ある場所から移動主体が離れる移動について考察を行う。以下に例を挙げる。

- (77) a. I must be *going* now. (OALD)  
b. It's late! I must get *going*. (LDCE)  
c. I've got to *go*. (G)  
d. She's *going* tomorrow. (CALD)  
e. What time does the train *go*? (W)

これらの文はいずれも認知主体がある場所から離れる必要のある場合に発言するモノである。起点と着点が言語化されていないという点で、経路移動に類似している。

(77a-c)の移動に関して、認知主体自身による移動のため、イメージスキーマは以下のように変化する。

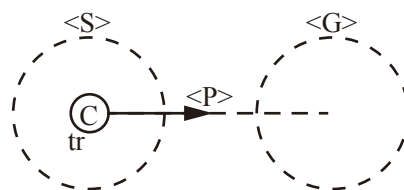


図 56

起点と着点が背景化しているのは、前述の通り言語化されていないためである。ここでは、認知主体自身の移動のため、認知主体がトラジェクターになっている。また、移動行為であるため着点の存在は前提としているが、着点までの到達は前景化されていないため、着点に至るまでの移動は破線で表している。

起点は言語化されていないが、認識されていない訳ではない。(77a-c)の文に対して、以下に示す(78b, c)のような問いかけが不自然になることからそれがわかる。

- (78) a. Where are you going?  
b. \*Where are you going from?  
c. \*Where are you leaving?

Fillmore (1972)が述べるように、go は起点指向動詞であるため、起点は文脈上理解される。また、(77a-c)の場合には移動主体を兼ねる認知主体の移動行為の起点で行われるため、起点は自然に認識されるが、移動主体の離脱行為が際立つため背景化されている。

次に、認知主体以外の離脱を示す例を見ていく。(77d, e)の場合は、認知主体ではない別の人物、モノの移動であるため、イメージスキーマは以下のように変化することが予測される。

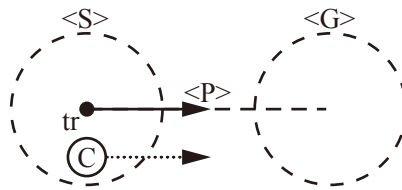


図 57

認知主体は、背景化されている起点から移動主体が離脱する移動を観察する。ここでも同様に起点は背景化されているが、認知主体がそこに存在している以上認識されていない訳ではない。

以上が OED の定義の一つである離脱移動である。起点と着点が背景化され、言語化されない点は経路移動と類似している。起点と着点に関わらない経路移動と異なり、離脱移動の場合は行為の開始を起点からの視点で言語化するため、起点が背景化されているにもかかわらず認識はされている。

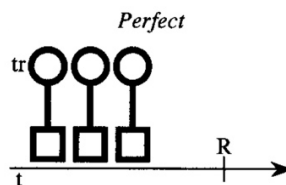
## 5.4 消失

次に考察の対象となるのは、以下に示すような文である。

- (79) a. I left my bike outside the library and when I came out again it had *gone*. (OALD)  
b. The door was open and all his things had *gone*. (LDCE)  
c. “Are there any cookies left?” “No, they’re all *gone*.” (G)

上で示した例では、それぞれ自転車、所有物、クッキーがある領域から無くなったことを表す。この場合、主語となる対象の物理的な移動は観察されない。本研究では、この現象を消失とし、本節で考察を行う。

この意味拡張は、あるモノが認知主体の領域から離れるという点では、離脱移動と類似している。離脱移動との違いは、上の例ではある対象が認知主体の領域から既に無くなった後に言語化されるため、起点から移動する行為を認知主体が観察しない点にある。また、対象物が無くなった後の時間に言語化される場合がほとんどのため、基本的に完了形の *have gone* の形で使用される(79a, b)。興味深いことに、消失へと意味拡張した *go* は *gone* という形容詞の用法で使われることがある。(79c)がその例である。ここからわかることは、消失へと意味拡張した *go* は、ある領域から移動を開始し、離脱して見えなくなった一連の流れのうちの最終的な状態に焦点が当たっている。完了形を用いてある行為の最終的な参与者または状態に焦点を当てる場合は、以下のようなプロセスが想定される。



(Langacker 2008: 121)

図 58

実線の矢印は、時間の流れ(t)を示している。認知主体は、プロセスの先の時間を参照点にしている。

これをもとにすると、(79a, c)に関わる認知プロセスは、以下のように図示できる<sup>14</sup>。

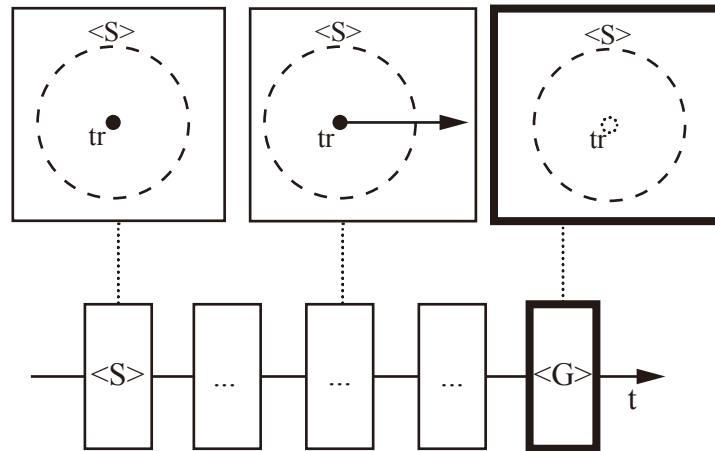


図 59

時間の流れを表す実線の矢印(t)上に存在する長方形は、ある一連の行為の各段階を表している。ある行為には、行為の開始(S = source)と終了(G = goal)が存在する。ある対象がなくなったことを動詞の go で表す場合、その対象は移動行為の起点に存在し、離脱行為を行った後領域から存在しなくなる。対象がなくなった後の状態が<G>を含む長方形であり、その部分が前景化しているため、太い実線で示している。また、消失する対象(tr)は起点には存在していないが、言語化されているため点線の円で示している。このように、動詞 go を用いて have gone で消失を表す場合は、一連の行為全体の存在がある。

一方で、形容詞が選択される場合は行為全体は前提とならない。



図 60

<sup>14</sup> 認知主体の視点は図の構成上省略している。



上記の図のように、ある領域にある対象が存在しないことに対して **be gone** が用いられる。

ここで、消失の意味を表す際に **go** が用いられる理由について考察を行う。この種の **go** による意味拡張は、**come** の「出現」の意味拡張と同様のプロセスが関与していると考えられる。すなわち、メタファーが関与している。**Come** が出現を意味する場合、**VISUAL FIELDS ARE CONTAINERS** (Lakoff and Johnson 1980: 30)のメタファーが関与している。ある対象が認知主体にとって視覚可能になることは、あるモノが認知主体の領域に進入することへと比喩的に写像される(e.g., *The ship is coming into view.* (ibid.))。従って、認知主体がある対象を観察できない、視覚が不可能になっている状態は、**come** とある意味対局をなす **go** を用いて表現される。

この種の意味拡張では、さらに、生命の死を表すこともできる。

(80) a. Now that his wife's gone, he's all on his own. (LDCE)

b. Poor John is gone. (G)

上の文では、それぞれ **his wife** と **John** が亡くなったことを表す。

また、認知主体の視覚能力が関わらず、「消失する」という点のみに焦点が当てられる場合、消失する対象は抽象的なものになり得る。

(81) a. Has your headache gone yet? (OALD)

b. My backache is gone now.

このように、**headache** や **backache** など実際に視覚できないものに対しても **go** を用いてその消失を表すことができる。

以上が、**go** を用いてある対象の消失を表す拡張である。ある対象を認知主体が視覚できないことを、移動のプロセスを経て認知主体の領域から離脱したことで表現する。移動のプロセスを前提とする場合は動詞 **go** が用いられ、無くなったという結果状態だけ言語化する場合には形容詞 **gone** が使われる。いずれにせよ、主語の対象による物理的な移動行為はない。また、単純に認知主体の領域からモノが無くなるだけではなく、生命の死や頭痛、腰痛など抽象的なモノの消失を表現することができる。

### 5.5 着点移動

イメージスキーマ上で着点が前景化されている移動は、go の最も典型的な用法である。前置詞 to を伴って着点が言語化されることが一般的である。以下にいくつか例を挙げる。

- (82) a. I have to go to Rome on business. (OALD)  
b. We went to Rome. (CALD)  
c. We're going to Canada in the summer. (LDCE)

上の例は、認知主体、あるいは、認知主体を含む集団がある領域へ移動する様子を表している。この例では、起点は背景化し、着点が前景化して言語化されている。この意味拡張は、以下のようなイメージスキーマの変化で表すことができる。

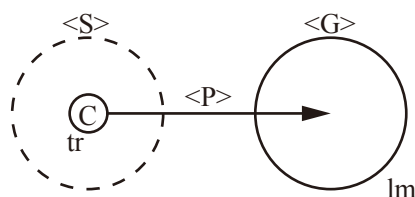


図 61

実線の円で囲んだ認知主体(C)は、(82)の例で移動行為を行う移動主体(tr)である。起点が言語化されていないため、背景化している様子を破線の円で示している。一方、起点は言語化されているため、前景化している様子を実線の円で示している。この場合、着点は移動主体に次いで際立つため、ランドマーク(lm)となる。

続いて、認知主体が以外の人物が移動するケースについて、以下に挙げる例文をもとに考察を行う。

- (83) a. Kimberley: I did it for you when you *went* to Barbuda. [映画 Daylight < 00:05:50 >]  
b. Takagi: Holly *went* to the vault room to FAX some documents.  
[映画 Die Hard < 00:12:21 >]

認知主体以外の移動主体による移動が go で表現される場合、直示的中心からの移動と考えられる。したがって、認知主体は移動の起点に物理的あるいは心理的に存在しており、移動主体の移動を観察している。この場合、以下のようなイメージスキーマの変化が見てとれる。

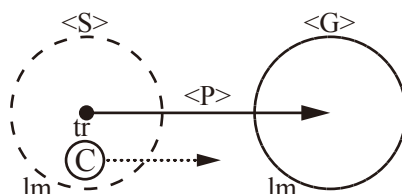
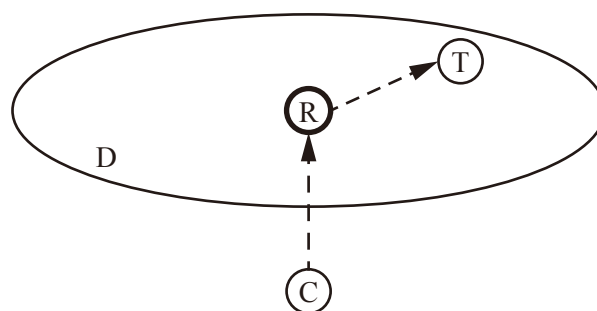


図 62

上の図では、認知主体が黒丸で示した移動主体の起点に存在していることを示している。認知主体から伸びる点線の矢印は、移動主体の移動を観察する視線の移動を表している。

ここまで挙げた例では、起点は背景化され、言語化されていないが、理解されていないわけではない。Fillmore (1972)の分類によると、go は起点指向動詞とされている。起点指向動詞の場合、移動主体の起点は文脈により理解される。この種の起点の理解は、参照点能力(Langacker 1993)によるものである。認知主体は、自分自身、あるいは主語となる対象を参照点にして、それらが存在する領域をターゲットにする。移動主体を参照点として、移動行為の起点となる領域をターゲットとして理解する認知プロセスは、Langacker (1993: 6)の参照点構造を示す図で説明することができる。



(Langacker 1993: 6)

図 63

上の図のうち、C は認知主体を表す。認知主体は、移動行為の移動主体を参照点(R = reference point)としてターゲット(T = target)である起点を理解する。楕円は参照点に限定するターゲットの支配領域(D = dominion)を表す。破線の矢印は、認知主体が参照点を足がかりにターゲットとなる対象を理解する際の経路(mental path)を表す。

以上見てきたように、着点が前景化される go to NP は、ある場所から別の場所への物理的な空間移動を表す。しかし、この形式が移動を表さない場合も存在する。この種の認知プロセスには、メトニミーが関与しているものと、メタファーが関与しているものが存在する。以下より、それらの認知プロセスが関わる go to NP の意味拡張を考察していく。

### 5.5.1 メトニミーの関与

Goto NP で言語化される表現のうち、物理的な空間移動を表さないものを考察する。ここでは、メトニミーが関与する意味拡張に関して、以下の例から考察を行う。

(84) a. Zeus: *Go to school.* [映画 Die Hard: with a Vengeance <00:09:07>]

b. Bible: Are you a praying man?

Norman: I *go to church.* [映画 Fury <00:14:30>]

c. Buck: I think Buford's *going to jail.* [映画 Back to the Future Part III <01:28:53>]

d. You must *go to bed* at once, Branwell.

(BNC)

(84a-d)の例文に共通して、*go to NP* のうち着点として言語化されている名詞の前に冠詞が存在しない。この場合、着点として言語化されている名詞が表す場所・施設などへの物理的な移動として解釈されない。OALD では、このうち *go to church* と *go to jail* をそれぞれ“regularly attend church services”, “to be sent there as punishment for a crime”と同等であると説明している。これらの用法は、移動行為を表す *go to NP* の形式を用いて、その施設における行為を表している。上に挙げた例で説明すると、(84a)では学校に行くことが勉強など学校で行う行為、(84b)は教会で行う礼拝などの行為、(84c)は刑務所で行う服役について言及している。また、(84d)では施設ではなくベッドという一種の家具が着点として選択され、そこへ移動する行為が「寝る」ことを意味している。注目すべきは、「学校へ行く」、「教会へ行く」、「刑務所へ行く」、「ベッドに行く」という行為が、その後に行われる一連の行為を間接的に表しているということである。一連の行為において移動行為の部分が言語化されているプロセスは、以下のように表すことができる。

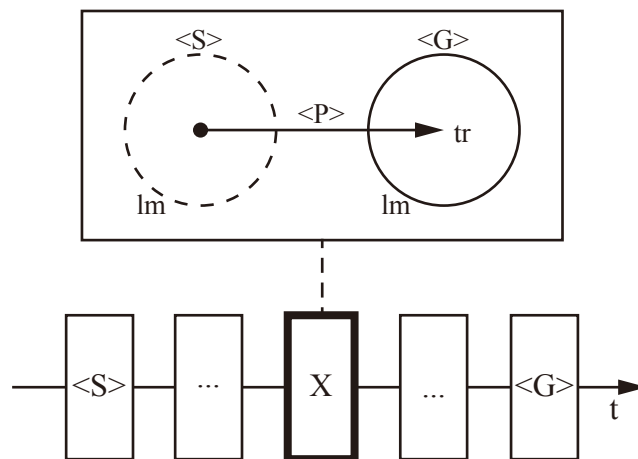


図 64

上の図は、着点が前景化している *go* のイメージスキーマと、行為のプロセスのスキーマを掛け合わせたものである。図下部の矢印は時間の経過を表している。矢印上の長方形はそれぞれ時間の経過によって行われる行為のプロセスを示す。両極端の<S>および<G>はそれぞれある特定の行為における始動と終了を表している。これは、後に

述べる移動行為がある行為の一連の流れに比喩的に写像されたものである。矢印上の中央にある濃い実線の長方形に囲まれた X が、「学校に行く」、「教会に行く」、「刑務所に行く」「ベッドに行く」が表す行為全体の流れのうち、移動行為に当たる部分である。破線は移動のイメージスキーマと X が同じであることを表している。一連の行為のうちこの移動の部分が言語化されていることを濃い実線の長方形で表している。

以上が、ある一定の行為のうち移動の部分が選択される際の認知プロセスである。「学校」、「教会」、「刑務所」「ベッド」で行う一連の行為全体において、部分である移動が選択されているのは、メトニミーの関与によるものである。

次に、行為の一部である移動が言語化されることによってその後の行為の解釈ができる事実を考察する。ある一連の行為のうち、その一部である移動行為の言及によってその行為全体、ないしは一部が解釈可能になるのは、参照点能力によるものである。移動行為という参照点を元に、ターゲットである行為を理解する。

以上、物理的な空間移動を伴わない go to NP の表現のうち一つを考察した。この種の意味拡張では、ある行為全体のうち、その一部である移動行為が言語化の際に選ばれるというメトニミーが関与している。さらに、全体の行為のうち移動を参照点にして全体の行為を表す場合には、参照点能力が関わっていることがわかった。

### 5.5.2 メタファーの関与

続いて、物理的な空間移動を表さない go to NP 構文のうち、メタファーが関与しているものに関する考察を行う。以下に BNC から例を挙げる。

(85) a. For now you must lie down on the bed and go to *sleep*.

b. Britain and France had gone to *war* over Poland...

(BNC)

これらの文は、前者 go to sleep は「眠る」、後者 go to war は「戦争をする」と解釈ができる。それぞれの文の共通の特徴として、前節で挙げたメトニミーが関与する移動と同じく、to の後に置かれる着点となる名詞には冠詞がついていない。さらに、(84)とは異なり、sleep や war など物理的なものではない抽象名詞が着点として使用されている。

抽象的な概念を表す名詞が、go to NP の構文で着点として前置詞 to の後に言語化さ

れる場合、メタファーが関与していると考えられることができる。このメタファーとは、容器の概念からの比喩的な写像に関わるプロセスである。以下の文を参考に、このプロセスを考察する。

- (86) a. She talks *in* her sleep. [映画 *Indiana Jones and the Last Crusade* <00:52:58>]  
b. It does not include the countries directly involved *in* the war: Angola, Mozambique and Namibia. (BNC)

上の例文が示すように、*sleep* と *war* に前置詞 *in* を用いることができる。このことから、これらの語が表す概念が容器の概念から比喩的に写像されていることがわかる。これらの概念が容器の概念から比喩的に写像されたものであるならば、物理的な空間移動で前提となる起点や着点と同じように *go to NP* の着点として言語化することができる。ここでの比喩的写像は、境界を見出すことで行われる。容器、場所などの物理的なモノは、物理的な境界で外と内が隔てられている。この類似関係を元に、容器の概念から場所の概念へと比喩的に写像することに成功している。また、場所の中でも物理的な隔たりがない国・地域などの領土でも国境などの境界が存在している。この境界があることで、言語を操る認知主体はその内側と外側を認識し、容器の概念を援用することができる。ここに共通しているのは、境界の具体性に違いはあるが、その内側と外側にある空間はいずれも物理的なものであるということである。*Sleep* や *war* に代表される抽象的な概念はどうだろうか。ここで挙げた二つのものだけで考えた場合、境界も内外の空間も物理的なものではない。睡眠・戦争の内側や外側に入り込んで自由に歩くことは出来ない。この場合境界として認知主体が認識しているのは、状態と時間の違いである。睡眠の場合、人間ないし他の生物には起きている状態と眠っている状態が存在する。ここに、状態の違いという境界が存在する。同時に、これは時間的な境界でもある。起きている状態と眠っている状態は、起きている時間と眠っている時間ともいうことができる。戦争の場合も同様である。ある国家には、戦争をしている状態と戦争をしていない状態が存在する。この状態・時間の違いに境界を見出し、容器と解釈することでさらに移動行為の着点として言語化することができる。

この種の意味拡張には、*sleep* や *war* などの抽象的な名詞が容器として解釈されるメタファーが関与していることがわかった。ここで取り上げている意味拡張には、着点

に関わるものとは別のメタファーが関与している。(85)で挙げた文はそれぞれ「睡眠状態」、「戦争状態」への状態変化を述べるものである。すなわち、この意味拡張では go to NP に物理的な空間移動の要素は存在せず、状態変化を示すようになっている。この拡張は、後述する go to adj の意味拡張と類似している。以下より、移動行為が状態変化を表す際に関わるメタファーについて考察を行う。

第3章でも触れたように、移動行為が状態変化を表す際には、THE LOCATION EVENT-STRUCTURE METAPHOR の下位メタファーである Changes Are Movements (Lakoff and Johnson 1999: 179)が関与している。移動前・移動後の場所の概念が、変化前・変化後の状態へと比喩的に写像されている。その結果、ある場所から別の場所へと移動することがある状態から別の状態へと変化することへ比喩的に写像されることになる。

以上、go to NP にメタファーが関与する意味拡張に関して考察を行った。この種の意味拡張では、メタファーは次のように複数の段階で関与する。(i)抽象的な概念が容器の概念から比喩的に写像される。(ii)ある場所から別の場所への移動が、ある状態から別の状態への変化へ比喩的に写像する。

## 5.6 主観的移動

本節では、go に関わる表現のうち、以下に挙げるような意味拡張の考察を行う。

- (87) a. The stairs *go to* the basement. (G)  
b. The road *goes through* middle of the forest. (LDCE)  
c. There's a mountain road that *goes from* Blairstown *to* Millbrook Village. (CCAD)

上に挙げた例では、移動行為を表す go の移動主体はそれぞれ the stairs, a mountain road, the road となっている。しかし、これらは実際に物理的な空間移動を行わない。これらの文の解釈は、それぞれ次のようになるだろう。

- (88) a. その階段は地下に通じている。 (G)  
b. その道路は森の中を通っている。  
c. Blairstown から Millbrook Village へ至る山道がある。



このように、これらの文で見られる go は、物理的な空間移動ではなく、階段や道などがある地点から別の地点まで続いていることを観察するために用いられている。この意味拡張は、第 4 章で述べた主観的移動である。以下より、この種の意味拡張について考察を行う。

Go によるこの意味拡張では、認知主体は一定の長さを持つ対象を観察し、その際の視線が移動している。しかしながら、この種の意味拡張においては視線の移動は言語化されず、認知主体の視線移動の経路となる階段や道などのモノが移動主体として言語化されている。これには、メトニミーが関与していると考えられる。すなわち、視線移動と隣接関係にある階段や道などが前景化し、それが移動行為の主体として言語化されている。この認知プロセスは、以下のように図示できる。

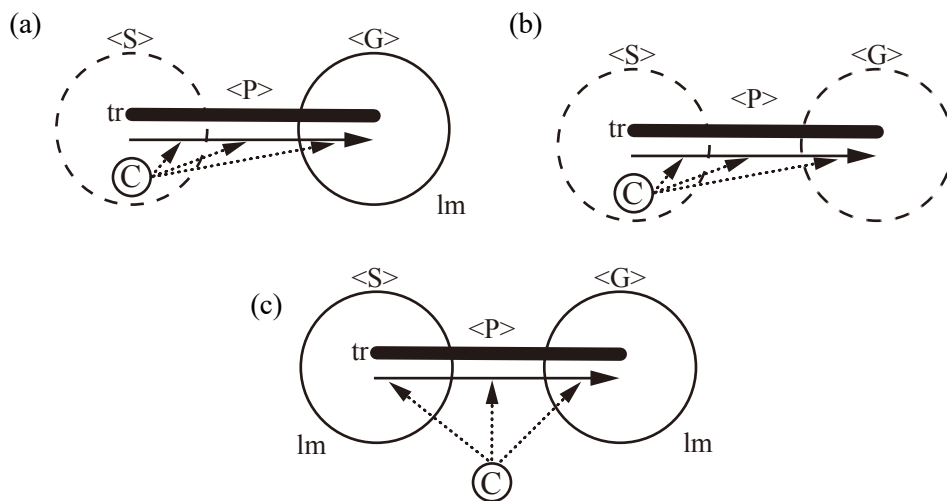


図 65

図 65(a)は、(87a)に対応するイメージスキーマである。この文では、認知主体は自身の現在の位置から階段を観察し、その観察の視点をある地点まで伸ばしている。この場合、起点と着点のうち、着点が言語化されている。そのため、起点を表す円は破線で示し、背景化していることを表し、着点が前景化していることを実線の円で示している。起点から着点へと伸びる太い実線は、階段や道などの対象を表している。円で囲まれた認知主体(C)からのびる点線の矢印は対象を観察する際の視線の位置である。この視線移動の軌跡は実線の矢印で示している。図 65(b)は、(87b)と対応する。この場合起点と着点の両方が言語化されていないため、スキーマ上の両方の円が破線で示され

ている。(87a, b)の場合、認知主体の位置、あるいは視点は起点にあることが予測される。5.5 節で述べたように、go で表現される移動の起点は、参照点能力によって認知主体が存在する位置であると解釈される。従って、起点の詳細は明らかになっていないが、スキーマ上では認知主体は背景化されている起点に存在している。

最後に、は(87c)の文と対応する図 65(c)に関して考察を行う。この文では起点と着点の両方が言語化されているため、スキーマ上の円は実線で示している。この場合、認知主体は起点・着点のいずれにも存在していない。先ほども述べたように、参照点能力により認知主体の位置は起点であると解釈されるが、起点が言語化されている場合は、認知主体が存在する場所とは別に起点が設定されていることになる。従って、認知主体は起点と着点以外の場所において、ある場所から別の場所へと伸びる道を観察している。図 65(a, b)と同様に、この視線の移動が go で表現される。

以上、主観的移動を表す go の考察を行った。この種の意味拡張では、物理的な空間移動は存在せず、ある領域から別の領域へと伸びる対象物を観察する際の視線の移動がメトニミーによって伸びのある対象の移動として言語化されている。また、興味深いことに、主観的移動では認知主体が対象を観察する場所が異なる場合がある。言語化されていない起点からある領域へ向けて対象を観察する場合と、起点・着点のどちらでもない場所から対象を観察する場合がある。

## 5.7 状態変化

前節までは、go で表現される物理的な空間移動と、その比喩的な拡張を考察してきた。ここでは、主に go + adj を用いた状態変化用法への意味拡張とに関する考察を行う。

物理的な空間移動を表す動詞である go が状態変化について述べることができるのは、第3章で挙げたメタファーが関与しているためである。States Are Locations (Lakoff and Johnson 1999: 179)の関与によってある場所が状態へと比喩的に写像され、Changes Are Movements (Lakoff and Johnson 1999: 179)で移動行為が状態変化へと写像される。以下より、さらに詳しく go を用いて状態変化を表す際の意味に関する考察を行う。

第3章で挙げた Practical English Usage 4 (Swan 2017) (以下、PEU4) では、go を用いた状態変化の意味について以下の二つを紹介している。

(89) PEU4 による説明

**a** colours

*Go* (and not *get*) is used to talk about changes of colour, especially in British English.

*Leaves go brown in autumn.* (NOT ~~*Leaves get brown...*~~)

*She went white with anger.*

*Suddenly everything went black and I lost consciousness.*

Other examples: *go blue with cold / red with embarrassment / green with envy*. *Turn* can also be used in these cases (see below), and so can *grow* when the change is gradual. *Go* is more informal than *turn* and *grow*.

**b** changes for the worse

*Go* (not usually *get*) is used before adjectives in some expressions that refer to changes for the worse. People *go mad* (BrE), *crazy*, *deaf*, *blind*, *gray*, or *bald*; horses *go lame*; machines *go wrong*; meat, fish or vegetables *go bad*; milk *goes sour*; bread *goes stale*; beer, lemonade, musical instruments and car tyres *go flat*.

*He went bald in his twenties.*

*The car keeps going wrong.*

Note that we use *get*, not *go*, with *old*, *tired*, and *ill*.

(PEU4: 394)

Swan (2017)は *go* を用いる状態変化について、色の変化と悪い状態への変化を挙げている。

色の変化から考察を始める。Swan (2017)の記述によると、*go* の色彩変化は *turn* を用いて同じ表現ができることがわかる。また、色彩の変化に段階性が見られる場合は *grow* を用いる場合がある。このことから、色彩変化において *go* は *turn* とある概念を共有していると考えることができる。以下より、*turn* に関する基本的なイメージスキーマを考察する。

*Turn* の基本的に関して、以下に OED の定義を一部引用する。

(90) ... To rotate or revolve, and derived uses: ... To change or reverse position: \*Senses denoting change of position: ... (OED)

この定義によると、**turn** は回転、あるいはそれによって位置・場所を変える行為であることがわかる。最初の定義の回転について、以下のような文が挙げられる。

- (91) a. The wheels of the car began to *turn*. (OALD)  
b. The engine *turned* a propeller. (LDCE)

上の文はそれぞれ車輪やプロペラが回転する様子を表現している。この文の概念形式となるイメージスキーマは以下のように図示できる。

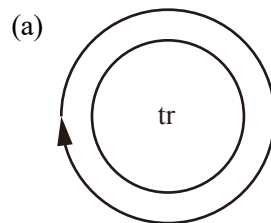


図 66

図 66 は、実線の円で著したモノ(**tr**)が回転する行為を行う様子を表している。以下に示す例がこのイメージスキーマを反映している。

**Turn** は、上の例が示すようにあるモノがその場で回転するだけでなく、あるモノが別のモノの周囲にそって移動する場合もある。以下にその例を挙げる。

- (92) The earth *turns* around the sun. (G)

上の文は、地球が太陽の周りを公転する様子を表している文である。この場合、イメージスキーマは以下のように変化する。

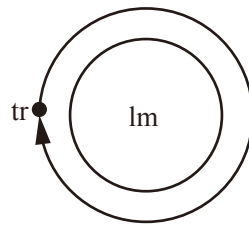


図 67

黒丸(tr)は移動を行う移動主体である。この移動主体による移動行為を、実線の矢印で示している。移動主体は中央の円(lm)に沿って移動を行う。

位置・場所を変える行為については以下のような文が挙げられる。

(93) a. He *turned* into a narrow street. (OALD)

b. He was sitting in his jeep as I *turned* into the driveway. (BNC)

前者二つの *turn* のイメージスキーマを継承する場合、これらの方向転換は以下のように図示できる。

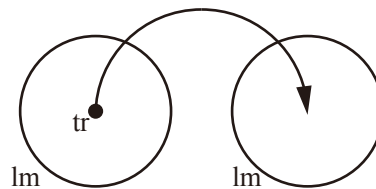


図 68

黒丸で示した移動主体は、弧を描く移動行為で、ある場所から別の場所へ移動する。

Turn による色彩変化はこのイメージスキーマから拡張すると考えることができる。

ある領域から別の領域への移動が、移動の様態は違うが *turn* と *go* の両方に見られることから、*turn* で表現できる色彩の変化は *go* でも表現が可能である。

続いて、悪い状態への変化について考える。PEU4 では、*bad, bald, blind, crazy, deaf, flat, gray, lame, mad, sour, stale* を悪い状態として、*go* を用いた状態変化で表せると説明されている。Go が認知主体の直示的中心を起点とする移動であると考えられる場合、直示的中心となる場所が認知主体にとって好ましい、あるいは正常な状態へと比喩的に写像されていることが考えられる。これは、*come* を用いて好ましい状態への変化が表現

できることから理解できる。

Go で表現される状態変化の結果状態は、上で述べたように悪い状態を指す場合があるが、変化前の状態は必ずしも正常な状態ではない。以下に例を挙げる。

(94) Here things do not get better and better, they *go from bad to worse*. (BNC)

上の文では、状態変化を経た結果状態が悪い状態を指す *worse* である。しかし、変化前の状態は *bad* であり、こちらも悪い状態を指していることがわかる。また、次の例はどうか。

(95) a. I step back, then turn and run, the clinging wetness round my thighs *going from warm to cold* as I race beneath the snow-shrouded trees towards the house.  
b. ... after eating, movement, *going from cold to warm air*.  
c. It is easier to *go from small to big*, than *from big to mega-big*.

(BNC)

上の例では、暖→寒、寒→暖、小→大、大→特大への状態変化が、go で表現されることがわかる。暖かい状態から寒い状態への変化を除き、これらの状態変化は悪い状態への変化は表していない。つまり、この種の状態変化には、直示的中心が正常な状態であり、そこから離脱する移動が悪い状態への変化という比喩的な写像が起きていない。この場合、認知主体による状態変化の観察は、中立な立場から行われていると考えることができる。つまり、5.2 節で見た経路移動の際の、認知主体が起点と着点のいずれにも存在せず移動主体の移動行為を俯瞰的な立場から観察するイメージスキーマが、この状態変化の背景に存在していると考えられる。

以上、go を用いた状態変化について考察を行った。Go によって表現できる状態変化に関して、次の三つのバリエーションに焦点を当てた。すなわち、i. *turn* による状態変化と同様の概念をもつ色彩変化、ii. 認知主体の直示的中心が正常な状態へと比喩的に写像され、そこから離脱する移動が悪い状態への変化へと比喩的に写像される状態変化、iii. 認知主体が起点・着点に存在せず、中立的な立場から観察される移動行為が中立的な状態変化へと比喩的に写像される変化である。

## 5.8 まとめ

以上、英語自動詞の go に関する考察を行った。本章では、OED による定義をもとに、第 3 章で挙げた移動のイメージスキーマにおける変化を考察した。本研究で考察の対象とした go の意味拡張は、次の通りである。

### (96) Go の意味拡張

- a. 経路移動
- b. 離脱移動
- c. 消失
- d. 着点移動
- e. 主観的移動
- f. 状態変化

経路移動では、起点と着点に関わらない移動を go で表現する。この場合、認知主体は移動の様子を起点から観察しない。また、経路そのものや、経路の距離が前景化し、言語化する例も存在する。この経路移動では、比喩的な拡張として、イベントなどの進捗が go として表現される例もある。離脱移動は、認知主体の存在する領域から移動主体が離脱する際の行為を go で言語化したものである。それに関連する意味拡張として、消失を挙げた。認知主体がある対象を視覚できない様子が go を用いて表現される。この意味拡張において、go は have gone として完了形で用いられる場合と、be gone として形容詞として用いられる場合がある。移動のプロセスを経て認知主体の領域から離脱した結果見えなくなったと言語化した場合前者が用いられ、認知主体にとって視覚できないという結果状態に焦点が当たる場合後者の形容詞として用いられる。着点移動は、go を用いた移動表現のうち、着点が前景化されるものである。Go で表現される移動行為では、話者である認知主体が起点に物理的に存在する場合でも起点が言語化されないケースがある。この場合、話者を参照点として起点を理解することができる。着点移動には、さらにメタファーとメトニミーが関与することで比喩的に拡張する。メトニミーの関与が見られる着点移動の意味拡張は、移動行為そのものよりも、着点で行われる行為について言及する。また、メタファーが関与した着点移動では、

主に状態変化を表現することができる。主観的移動は、物理的な移動主体の移動は見られない。道路や階段など、ある一定の地点まで伸びているものを物理的、あるいは心理的に観察する際の視線の移動が go として言語化されている。最後に、go を用いた状態変化について考察を行った。移動動詞である go は、第3章で挙げたメタファーの関与により、状態変化を表すことができる。Go で表す状態変化に関して、本研究では次の3パターンの考察を行った。i. turn による状態変化と同様の概念をもつ色彩変化、ii. 認知主体の直示的中心が正常な状態へと比喩的に写像され、そこから離脱する移動が悪い状態への変化へと比喩的に写像される状態変化、iii. 認知主体が起点・着点に存在せず、中立的な立場から観察される移動行為が中立的な状態変化へと比喩的に写像される変化が、本研究での考察の対象となった go の状態変化である。



## 第6章 結論と展望

本論文では、英語の移動動詞について考察を行った。本研究で考察の対象とした移動動詞は、*come/go* である。この二つの動詞の意味とその拡張に関して、イメージスキーマの変化、メタファー・メトニミーの関与を考察した。本章では、各章の振り返りを行い、将来の研究課題を挙げる。

第1章では、移動動詞 *come/go* に関する先行研究の紹介と、本研究の分析における中心となる観点を紹介した。この章では、従来の研究アプローチによる考察と、認知言語学の知見を取り入れた考察の二つに大別して先行研究を考察した。前者では、直示動詞としての *come/go* に注目している。本研究では、これらの研究を踏まえ、直示動詞を話者である認知主体の視点が存在している領域であると定めた。認知言語学の成果を取り入れた研究は、主に意味拡張に焦点を当てている。ここで挙げた本研究の考察に関する指針は以下の通りである。

- i. 移動動詞を基本的に特徴づける空間移動
- ii. 空間移動の方向性と視点の投影
- iii. 空間/移動の概念に基づく意味拡張

本論文は、この三つの点を中心に考察を行った。

第2章は、二つのパートに分かれている。前半では、この論文の拠り所となる認知言語学について概観した。認知言語学誕生以前の言語研究アプローチと比較している。後半では、本研究での考察で用いる認知言語学の理論について概観を行った。認知言語学誕生以前の形態論、統語論、真理条件的意味論は、「言葉の知性的な側面を反映する研究」(山梨 2000: 2) である。一方、認知言語学は言語の背景に存在する主体の感性的、身体的な能力、あるいはこれらを含む認知能力の観点から考察を行う。本研究における方法論は、主にメタファー、スキーマ化と事例化、イメージスキーマである。Lakoff and Johnson (1980) をはじめとするメタファー理論に加えて、Langacker (1993, etc.) のスキーマ化と事例化、そしてそれを踏まえたイメージスキーマについて簡潔に紹介した。

第3章では、認知言語学の観点から、英語移動動詞に関する諸要素について考察を

行った。起点・経路・着点スキーマ(Lakoff and Johnson 1999)の各要素に対してイメージスキーマを考察し、それらを組み合わせることで移動のイメージスキーマを考察した。また、移動動詞が状態変化を表す認知プロセスに関して、*States Are Locations, Changes Are Movements* (Lakoff and Johnson 1999: 179)のメタファーをもとに確認した。

第4章は、英語移動動詞 *come* に関する考察である。*Come* によって表される移動行為のイメージスキーマを図示し、意味拡張の際の変化を考察した。また、メタファーやメトニミーの関与も研究の対象とした。*Come* は直示的中心を移動の着点とする直示動詞である。そのため、移動のイメージスキーマに認知主体とその視点が反映されると結論づけた。この章で扱った意味拡張は、物理的なものと、状態変化を表す比喩的なものに大別される。物理的な意味拡張では、主にイメージスキーマの変化に注目した。状態変化への意味拡張では、それにかかわるメタファーなどが考察の中心となった。*come* による状態変化に関して、その結果状態は通例好ましい、あるいは正常状態であるとされる。この場合、認知主体の直示的中心を正常な状態へと認識する認知プロセスが生じている。一方、認知主体にとって好ましくない、あるいは正常とも非正常とも言えない状態への変化も見られた。この場合、認知主体によって観察可能であるという *come* の側面から比喩的に拡張したものであると考えた。

最後に、第5章では移動動詞の *go* に関する考察を行った。*Go* は、*come* と同じく直示動詞に分類される。この場合、直示的中心から離れる移動が *go* によって表現される。ここでも、*come* と同様にイメージスキーマの変化と、メタファー・メトニミーの関与に注目して意味拡張の考察を行った。また、同じく物理的な行為と状態変化をはじめとする比喩的拡張を考察の対象とした。*Go* に関する考察では、認知主体の視点が起点にある場合と、起点と着点のいずれにも存在しない場合がある。この違いは、状態変化を表す際の意味の差にも影響する。本研究では、次の三パターンの状態変化について考察を行った。すなわち、i. *turn* による状態変化と同様の概念をもつ色彩変化、ii. 認知主体の直示的中心が正常な状態へと比喩的に写像され、そこから離脱する移動が悪い状態への変化へと比喩的に写像される状態変化、iii. 認知主体が起点・着点に存在せず、中立的な立場から観察される移動行為が中立的な状態変化へと比喩的に写像される変化である。このうち、特に ii. と iii. の状態変化に関して、物理的な移動行為を観察する際の認知主体の位置の違いが反映されていると考えた。

以上、本研究は認知言語学の観点から、英語移動動詞、特に *come/go* に関する考察

を行った。移動動詞全般のイメージスキーマを図示し、それをもとに **come** と **go** の意味拡張の背後にある心的イメージを考察した。この移動のイメージスキーマは、**come/go** のみならずその他の移動動詞の考察に対しても有用であると予測する。

今後の課題として、**come/go** に **to/into** 以外の前置詞が続くパターンの意味分析を挙げる。本研究では、主に **come/go to NP** を中心とした考察を行った。今後の研究では、**come across** をはじめとしたその他の前置詞と組み合わせさせた場合の意味拡張の考察を目標とする。また、今回は自動詞としての **come/go** を考察の対象としたが、今後は名詞へと拡張する際の意味の変化やその背後にある認知プロセスに関して研究を行いたい。

### 参考文献

- Clark, Eve V. 1974. "Normal States and Evaluative Viewpoints," *Language*, Vol. 50, No. 2, 316-332.
- Dewell, Robert B. 1994. "Over Again: Image-Schema Transformations in Semantic Analysis." *Cognitive Linguistics* 5: 351-380
- Dodge, Ellen and George Lakoff. 2005. "Image schemas: From linguistic analysis to neural grounding." in Baete Hamp (ed.) *From perception to meaning : image schemas in cognitive linguistics*, 57-91. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Evans, Vyvyan and Melanie Green. 2006. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Fillmore, Charles J. 1972. "How to Know Whether You're Coming or Going." *Descriptive and Applied Linguistics* 5, 3-17, International Christ University.
- Fillmore, Charles J. 1997. *Lecture on Deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Goldberg, Adele E. 1995. *A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』東京: 大修館書店.
- 出原健一. 2007a 「Come の意味論: 多重活性化モデルを用いて」『彦根論叢』366: 97-111
- 出原健一. 2007b 「Go の意味論—認知論的視点から」山梨正明 他 (編)『認知言語学論考 No.6』 125-155. 東京: ひつじ書房.
- 出原健一. 2009 「Go と「行く」—志向性の観点から—」『彦根論叢』378: 1-17.
- Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Johnson, Mark. 2005. "The philosophical significance of image schemas." in Baete Hamp (ed.) *From perception to meaning : image schemas in cognitive linguistics*, 57-91. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Kobayashi, Noriko. 2000. "Metaphorical Meaning Extension of the Motion Verbs 'Go' and 'Come'." 『東洋女子短期大学紀要』32: 1-9.
- 小森道彦. 1997. 「運動の『過程』または『結果』としての come と go」『英語語法文法研究』4: 53-66.
- 久野 暉・高見健一. 2017. 『謎解きの英文法 動詞』東京: くろしお出版.

918301  
村松 擁

- Kövecses, Zoltán. 2011. *Metaphor: A Practical Introduction Second Edition*. New York: Oxford University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡辺昇一 他 (訳) 『レトリックと人生』 東京: 大修館書店, 1986)
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh*. New York: Basic Books.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦 他 (訳) 『認知意味論』 東京: 紀伊國屋書店, 1993)
- Langacker, Ronald W. 1986. "An Introduction to Cognitive Grammar." *Cognitive Science* 10 (1): 1-40.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar (Vol.I): Theoretical Prerequisites*, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. "Subjectification." *Cognitive Linguistics*, 1 (1): 5-38.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar (Vol.II): Descriptive Application*, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4 (1): 1-38.
- Langacker, Ronald W. 2000. *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*: New York Oxford University Press. (山梨正明 (監訳) 『認知文法論序説』 東京: 研究社, 2011)
- 松本 曜. 1997. 「空間移動の言語表現とその拡張」中右 実 (編) 『空間と移動の表現』 125-236. 東京: 研究者出版.
- Muramatsu, Mamoru and Shigeo Kikuchi. 2018. "A Cognitive Approach to the Meaning of Go." 福森雅史 (編) 『言語・社会・文化 2 —Language, Society, and Culture 2 —』 : 29-38. 大阪: デザインエッグ.
- Muramatsu, Mamoru. 2017. "A Cognitive Approach to the Meaning of 'Go' as an Adjective." in *Omni și Universal* 3: 318-322.
- 村松 擁・梶山達也. 2019. "A Cognitive Study on Come and Go: Reflection of Home Base and a Viewpoint in Image Schemata," 日本認知言語学会第 20 回全国大会ポスターセッション.

村松 擁. 2019. 「Come と go の意味拡張—スキーマ化と事例化のプロセスの観点から—」『関西外国語大学大学院研究論集 Fons Linguae』 42: 22-36.

Norvig, Peter and George Lakoff. 1987. “Taking: A Study in Lexical Network Theory.” *Proceedings of the Thirteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*: 195-206.

岡 良和. 2013. 「直示動詞 come と go の比喩的用法について」『人間と環境 電子版』 6: 1-12.

岡 良和. 2015. 「英語動詞 come と go の用法について」『人間と環境 電子版』 10:19-28.

大江三郎. 1975 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』 東京: 南雲堂.

Radden, Günter. 1996. “Motion Metaphorized: The Case of *Coming* and *Going*.” in E. H. Casad (ed.) *Cognitive Linguistics in the Redwoods: The Expansion of a New Paradigm in Linguistics*, 423-458. Berlin: Mouton de Gruyter.

Swan, Michael. 2016. *Practical English Usage Fourth Edition*. Oxford: Oxford University Press.

辻 幸夫 (編). 2013. 『新編 認知言語学キーワード事典』 東京: 研究社.

上野義和. 1995. 『英語の仕組み—意味論的研究—』 東京: 英潮社.

上野義和 (編). 2006 『英語教師のための効果的語彙指導法—認知言語学的アプローチ』 東京: 英宝社.

山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.

山梨正明. 2009. 『認知構文論—文法のゲシュタルト性』 東京: 大修館書店.

山梨正明. 2012. 『認知意味論研究』 東京: くろしお出版.

山添秀剛. 2004. 『移動動詞 come/go の意味ネットワークならびに状態変化に関する認知言語学的考察』 大阪市立大学大学院博士論文

山添秀剛. 「移動動詞 fall の多義構造について」『札幌学院大学人文学会紀要』 79: 79-98.

## 引用例出典

All About Eve. 1950, dir. by Joseph L. Mankiewicz, 20th Century Fox.

Avengers: Endgame. 2019, dir. by Anthony Russo and Joe Russo, Walt Disney Studios Motion Pictures.

Back to the Future Part II. 1989, dir. by Robert Zemeckis, Universal Pictures.

918301

村松 擁

Back to the Future Part III. 1990, dir. by Robert Zemeckis, Universal Pictures.  
Back to the Future. 1985, dir. by Robert Zemeckis, Universal Pictures.  
Cast Away. 2000, dir. by Robert Zemeckis, 20th Century Fox.  
Daylight. 1996, dir. by Rob Cohen, Universal Pictures.  
Die Hard 2. 1990, dir. by Renny Harlin, 20th Century Fox.  
Die Hard. 1988, dir. by John McTiernan, 20th Century Fox.  
Die Hard: with a Vengeance. 1995, dir. by John McTiernan, 20th Century Fox.  
Fury. 2014, dir. by David Ayer, 20th Century Fox.  
Indiana Jones and the Last Crusade, 1989, dir. by Steven Spielberg, Paramount Pictures.  
Seven. 1995, dir. by David Fincher, New Line Cinema.  
Spy Game. 2001, dir. by Tony Scott, Universal Pictures.  
Star Wars: Episode IV A New Hope. 1977, dir. by George Lucas, 20th Century Fox.  
Star Wars: Episode VI Return of the Jedi. 1983, dir. by Richard Marquand, 20th Century Fox.  
The Dark Knight. 2008, dir. by Christopher Nolan, Warner Bros. Pictures.  
The Fugitive. 1993, dir. by Andrew Davis, Warner Bros. Pictures.  
The Negotiator. 1998, dir. by F. Gary Gary, Warner Bros. Pictures.  
Top Gun. 1986, dir. by Tony Scott, Paramount Pictures.

## 使用辞書

*Colins Cobuild Advanced Learners Dictionary 9th edition.* [CCAD]

『ジーニアス英和辞典第5版』 [G]

*Longman Dictionary of Contemporary English new edition.* [LDCE]

*Oxford Advanced Learners Dictionary 10th edition.* [OALD]

*Oxford English Dictionary* (オンライン版: <https://www.oed.com>, 関西外大学内データベースより閲覧) [OED]

『プログレッシブ英和中辞典』 [P]

『ランダムハウス英和大辞典』 [R]

『ウィズダム英和辞典第4版』 [W]